

秋田県文化財調査報告書第238集
弘田柵跡調査事務所年報 1992

弘田柵跡

第92・93次調査概要

1993・3

秋田県教育委員会

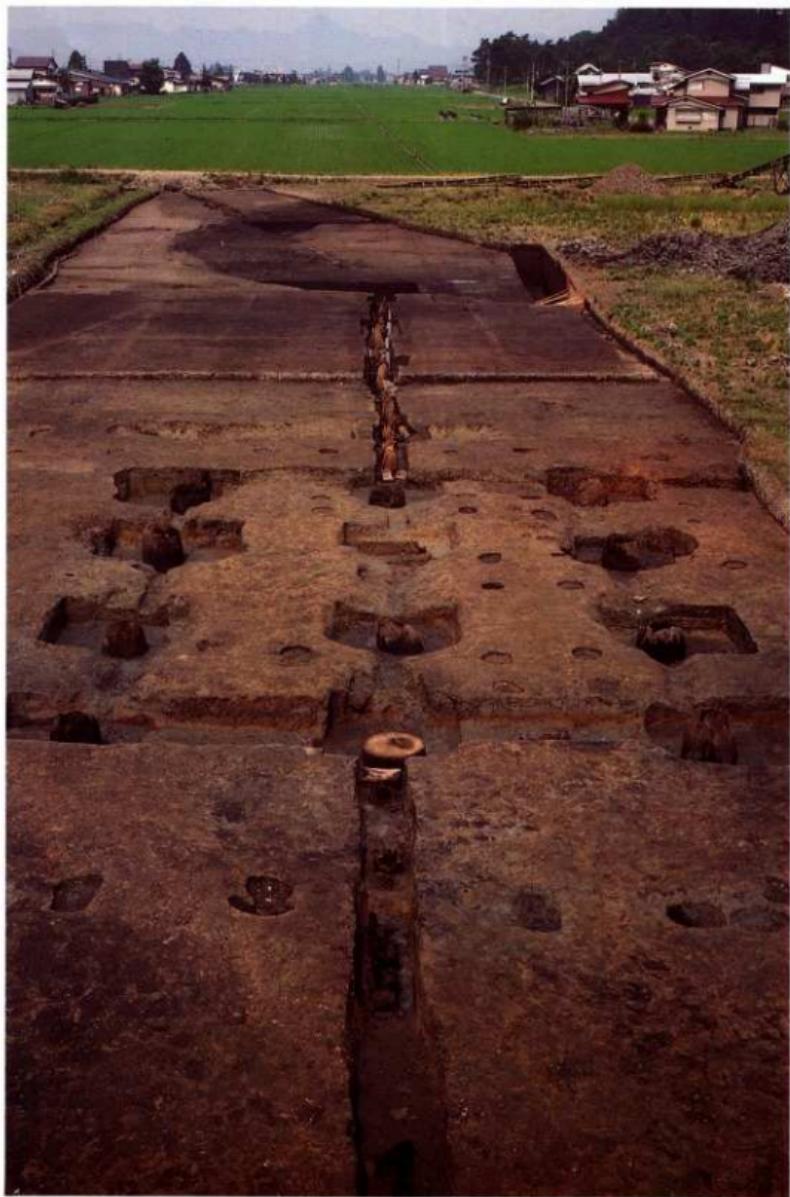
秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所

松田柵跡

—— 第92・93次調査概要 ——

1993・3

秋 田 県 教 育 委 員 会
秋田県教育庁松田柵跡調査事務所



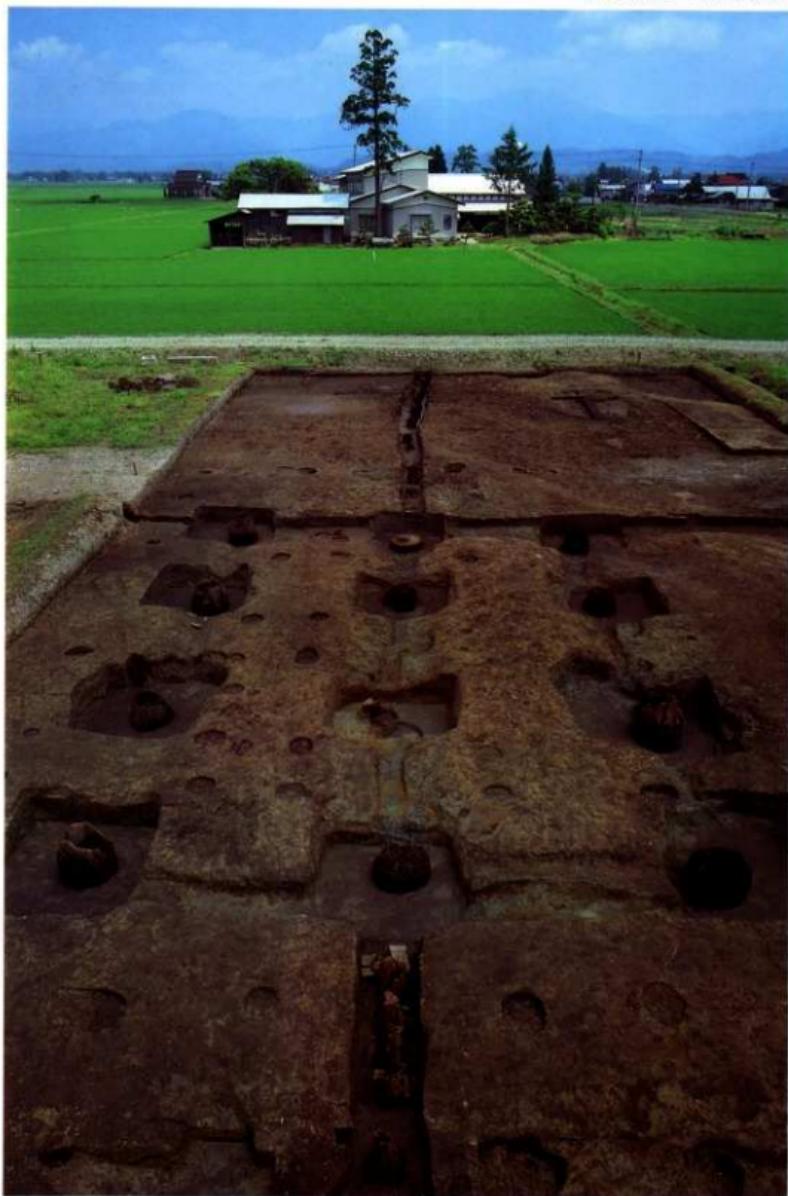
外郭南門と角材列（東から）



1 外郭南門（北から）



2 外郭南門と内郭の丘陵（南から）



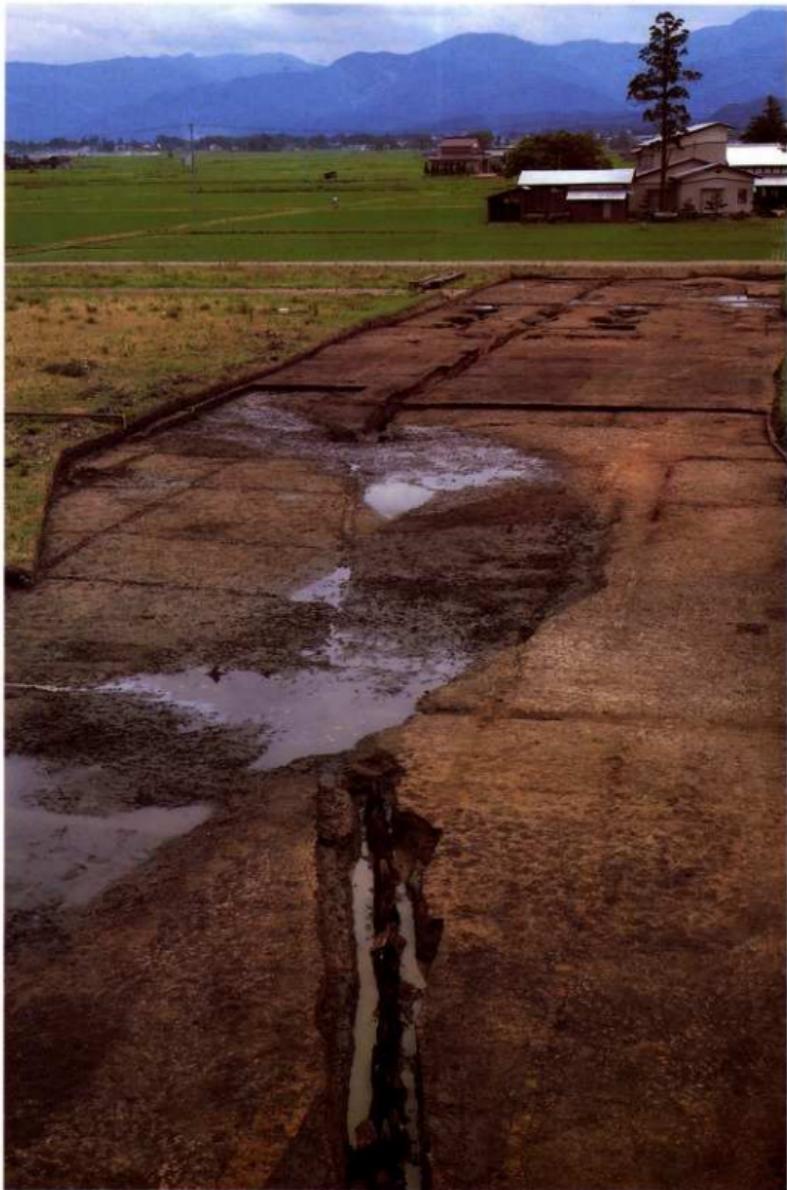
外郭南門（西から）



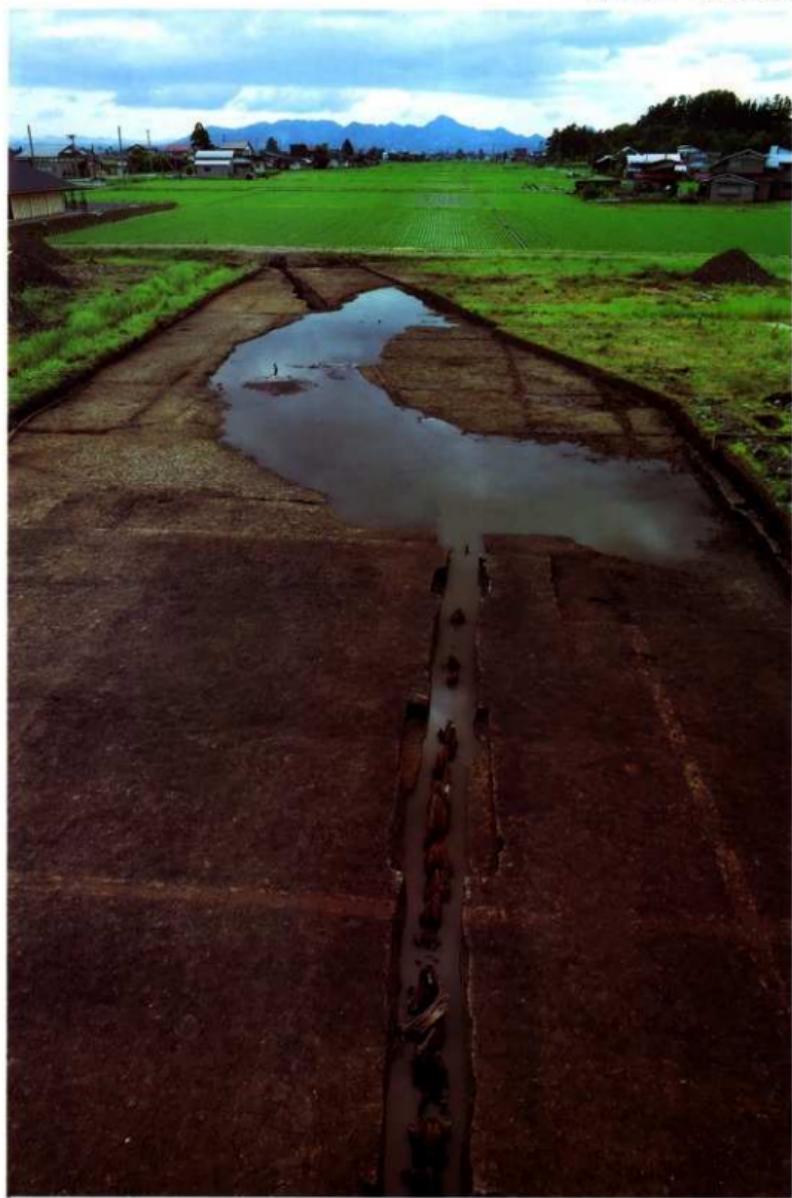
1 外郭南門門柱（南側東2）



2 同 上（北側東2）



角材列開口部（西から）



角材列開口部の最終段階河川跡（東から）



1 S A 1028角材列西端部（西から）



2 同 上（南から）



1 S A 1028角材列（北から）



2 同 上



1 S A 1027角材列（南から）



2 同 上（北から）



1 橋 脚



2 橋脚下部

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備も順調に進捗し、見学者も年々増加していることは喜びに堪えないところであります。

平成4年度の調査は、第4次5年計画の4年次にあたり、「ふるさと歴史の広場」事業に伴って、外郭南部の低地において調査を実施しました。

第92次調査は、外郭南門を含む外郭線を東西約100mにわたって広く調査しました。従来の知見を追認する一方で、外郭線角材列に長さ27mもの開口部があることが初めて判明しました。

第93次調査では、外郭南門と内郭南門との間に大きな河川敷が存在し、橋脚が発見され、大路の幅を推定することができました。さらに払田柵跡では初めての漆紙文書が出土するなど、極めて大きな成果を挙げることができました。

本書は以上のような成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡の研究上、資するところがあれば幸いに存じます。

最後に、調査ならびに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、奈良国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体仙北町、同教育委員会、千畳町教育委員会ならびに土地所有者各位の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成5年3月5日

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

所長 富樫泰時

例　　言

- 1 本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が、平成4年度に実施した第92次・93次調査の概要報告である。
- 2 織文土器の釈読、墨書き器の判断は国立歴史民俗博物館平川南教授に依頼した。
- 3 外郭縁角材の年輪年代測定は、奈良国立文化財研究所光谷拓実主任研究官に依頼した。
- 4 花粉分析・樹種鑑定はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 5 土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』1976（昭和51）年を参考にした。
- 6 実測図は国土調査法第X座標系を基準に作成した。実測図及び地形図中の方位は座標北を示し、磁北はこれより N 7°30'00"W である。詳細は『払田柵跡調査事務所年報1977』を参照されたい。
- 7 遺構には下記の略記号を使用した。
SA　柱列・角材列、　SB　掘立柱建物跡、　SL　河川跡、　SD　溝、
SK　土坑、　SX　橋脚・その他の遺構

払田柵跡調査事務所年報1992

目 次

第1章	はじめに	1
第2章	調査計画と実績	2
第3章	第92次調査	5
第4章	第93次調査	40
第5章	自然科学的分析	87
第6章	調査成果の普及と関連活動	90

挿 図 目 次

第1図	払田柵跡調査実施位置図	4	
第2図	第92次調査実施位置図	5	
第3図	第92・93次調査遺構配置図	7・8	
第4図	第92次調査遺構配置図	9・10	
第5図	S B57外郭南門跡	12	
第6図	S B57外郭南門跡門柱断面図	13	
第7図	S A1027角材断面図	14	
第8図	S A1027・1028・1032断面図	18	
第9図	S A1027角材列布振り出土遺物	13	
第10図	角材列の開口部	19・20	
第11図	S L1035土層断面図	23・24	
第12図	S L1035砂礫層出土遺物（1）	25	
第13図	〃	(2)	26
第14図	〃	(3)	27
第15図	〃	(4)	28
第16図	S L1035最終段階河川跡出土遺物	29	
第17図	S A1037	30	
第18図	S K50・1029・1030, S X1031	31	
第19図	S K1029出土遺物（1）	32	
第20図	〃	(2)	33

第21図	遺構外出土遺物（1）	35	
第22図	〃	(2)	36
第23図	〃	(3)	37
第24図	第93次調査位置図	40	
第25図	土層模式図	43	
第26図	S B1048, S K1050, S D1041	45・46	
第27図	S X1049	27	
第28図	S L1035砂疊層出土遺物（1）	49	
第29図	〃	(2)	50
第30図	〃	(3)	51
第31図	〃	(4)	52
第32図	〃	(5)	53
第33図	〃	(6)	54
第34図	〃	(7)	55
第35図	S K1033・1034	56	
第36図	S K1033出土遺物（1）	57	
第37図	〃	(2)	58
第38図	〃	(3)	59
第39図	S K1034出土遺物	60	
第40図	S K1038・1042～1044・1052	61	
第41図	S K1038	62	
第42図	S K1042	63	
第43図	S K1043	64	
第44図	S D1036・1051	64	
第45図	S D1039	66	
第46図	S X1040, 1045・1046	67	
第47図	S X1045出土遺物	68	
第48図	S X1046出土遺物	68	
第49図	遺構外出土遺物（1）	69	
第50図	〃	(2)	70
第51図	〃	(3)	71
第52図	〃	(4)	52

第53図 造構外出土遺物（5）	73
第54図 " (6)	74
第55図 " (7)	75
第56図 " (8) 漆紙文書	76
第57図 " (9)	77
第58図 " (10)	78
第59図 " (11)	79
第60図 " (12)	80
第61図 " (13)	81
第62図 " (14)	82
第63図 " (15)	83
第64図 河川堆積物の模式柱状図および花粉分析試料採取層準	86
第65図 年輪年代測定試料採取位置	89

表 目 次

第1表 調査計画表	2
第2表 調査実績表	3
第3表 花粉分析結果	86
第4表 外郭線角材年代測定結果	89
第5表 門柱樹種鑑定結果	89

図 版 目 次

巻首図版 1 第92次調査 外郭南門と角材列	
巻首図版 2 第92次調査 1 外郭南門 2 外郭南門と内郭の丘陵	
巻首図版 3 第92次調査 外郭南門	
巻首図版 4 第92次調査 1, 2 外郭南門門柱	
巻首図版 5 第92次調査 角材列開口部	
巻首図版 6 第92次調査 角材列開口部の最終段階河川跡	
巻首図版 7 第92次調査 1, 2 S A1028角材列西端部	
巻首図版 8 第92次調査 1, 2 S A1028角材列	
巻首図版 9 第92次調査 1, 2 S A1027角材列	
巻首図版10 第93次調査 1 橋 脚 2 橋脚下部	

- 図版1 第92・93次調査 1, 2 調査前の状況
- 図版2 第92次調査 外郭南門と角材列
- 図版3 第92次調査 1 外郭南門 2 外郭南門発掘作業
- 図版4 第92次調査 1 外郭南門北側東2柱 2 外郭南門棟通り東2柱
- 図版5 第92次調査 1, 2 SA1027角材列
- 図版6 第92次調査 1, 2 SA1027角材列における角材と、その下の鍵板
- 図版7 第92次調査 1 SA1027角材列 2 布堀り内の角材
- 図版8 第92次調査 1 SA1027角材列角材の下の鍵板 2 SA1028角材列
- 図版9 第92次調査 1 SA1032角材列
- 図版10 第92次調査 1 SA1028角材列西端部と河川跡 2 SA1032角材列東端部
- 図版11 第92次調査 1 角材列開口部 2 SA1032角材列と河川跡
- 図版12 第92次調査 1 SA1035河川跡の土層 2 SL1035Dトレンチの最終段階河川跡
- 図版13 第92次調査 1 SL1035Dトレンチの遺物出土状態
2 SL1035Dトレンチの角材と杭検出状態
- 図版14 第92次調査 1 年輪年代測定試料の採取を行う光谷氏
2 西暦788年の角材木口面
- 図版15 第92・93次調査 1, 2 SL1035河川跡の調査
- 図版16 第93次調査 1 SB1048掘立柱建物跡 2 同トレンチ壁面の柱
- 図版17 第93次調査 1, 2 SB1048掘立柱建物跡の柱
- 図版18 第93次調査 1, 2 橋脚検出状況
- 図版19 第93次調査 橋 脚
- 図版20 第93次調査 1, 2 抜き上げた橋脚
- 図版21 第93次調査 1 SK1033土坑 2 SK1034土坑
- 図版22 第93次調査 1 FNライトトレンチの土坑・その他の遺構 2 SK1042土坑
- 図版23 第93次調査 1 SX1040その他の遺構 2 SX1045その他の遺構
- 図版24 第92・93次調査 遺 物 (1)
- 図版42 第93次調査 遺 物 (19)
- 図版43 花粉分析プレパラート状況写真
- 図版44 材の顕微鏡写真

第1章 はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畠町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く大曲市の東方約6km、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山、長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（鳥川）、南側を丸子川（鞠子川）によって挟まれた沖積地に立地する。1902・3（明治35・36）年の千屋村坂本理一郎による溝渠開削の際や、1906（明治39）年頃から開始された高梨村耕地整理事業の際発見された埋木が、地元の後藤寅外・藤井東一の努力によって歴史的遺産と理解され、遺跡解明の糸口が開かれた。1930（昭和5）年3月、後藤寅外が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、1931（昭和6）年3月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、1988（昭和63）年6月29日付けで史跡の追加指定がなされて現在に至っている。

1970年代になって、指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するため基礎調査を実施して遺跡の実態を把握することを目的に、1974（昭和49）年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。さいわい、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。当事務所は1986（昭和61）年4月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称した。現在は「払田柵跡調査要項」の第4次5年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。これまでの調査成果を要約すると次のとおりである。

史跡は長森・真山を囲む外郭線と、長森を囲む内郭線からなる。外郭は東西1,370m、南北780mの長方形で、外郭線の延長3,600m、内郭を含む総面積約875,000である。外郭線は1時期の造営で角材列が一列にならび、東西南北に八脚門がつく。内郭は東西765m、南北320mの長方形で面積約163,000、内郭線の延長は約1,760mで石累、築地土塀、（東・西・南の山牆）と角材列が連なり、東西南北に八脚門がつく。内郭北門は2時期、東門・西門・南門は4時期にわたる造営が認められる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはI～V期の変遷があり、創建は9世紀初頭、終末は11世紀初頭である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡I－政庁跡－』（昭和60年3月）として公刊した。

出土品には、木簡・墨書き器・埴・土師器・須恵器・灰釉陶器などがある。木簡には「越海郡少隊長解申請」「十火大根二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」などの文書・貢進用木簡がある。墨書き器には「懺悔」「厨」「厨家」「缶舎」「文」などの文字がある。

管理団体仙北町は1979（昭和54）年から保存管理計画による遺構保護整備地区である内郭地域の土地買い上げ事業を進めており、1982（昭和57）年からは環境整備事業を実施している。

第2章 調査計画と実績

平成4年度の調査は「払田柵跡調査要項」に基づく、第4次5年計画の4年次にあたる。さわいわい事業費については、秋田県の要求額どおりの国庫補助金の内示（総計費1,400万円のうち、国庫補助金700万円）を得たので、次のような「平成4年度払田柵跡調査計画（案）」を立案した。

第1表 調査計画表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	備考
第92次	外郭南門 (仙北町払田字仲谷地)	920m ²	4月10日～8月31日	
第93次	同上	360m ²	9月1日～10月31日	
合計	2地区	1,280m		

平成元年度から平成5年度までの調査は、「払田柵跡発掘調査第4次5年計画」として立案され、顧問の指導と助言を得て承認されたものである。

第92次調査は、仙北町による史跡等活用特別事業のうち、外郭南門と外郭線角材列の復原整備計画に基づき、外郭南門の再調査と、その東西両側に連なる外郭線角材列の検出を目的としたものである。

第93次調査は、仙北町による史跡等活用特別事業のうち、外郭南門と内郭南門を結ぶ大路の復原とその両側の張芝、植栽などの整備計画に基づき、大路の検出と、遺構の存在確認を目的としたものである。

平成4年度の調査の実績は、第2表のとおりである。

第92次調査では、1930年、1975年の調査に続き、外郭南門の全体を検出した。また、外郭南門を含む東西約98mの範囲において、外郭線角材列を検出した。外郭南門および角材列は、これまでの認識どおり、建て替えのない1時期のみの造営で、堀、櫓を伴わない。年輪年代測定の結果、角材は西暦800年、801年の伐採であることが判明し、外郭線の東辺での測定結果と合致した。外郭線が9世紀初頭の創建であることが南辺においても追認されたことになる。

第2表 調査実績表

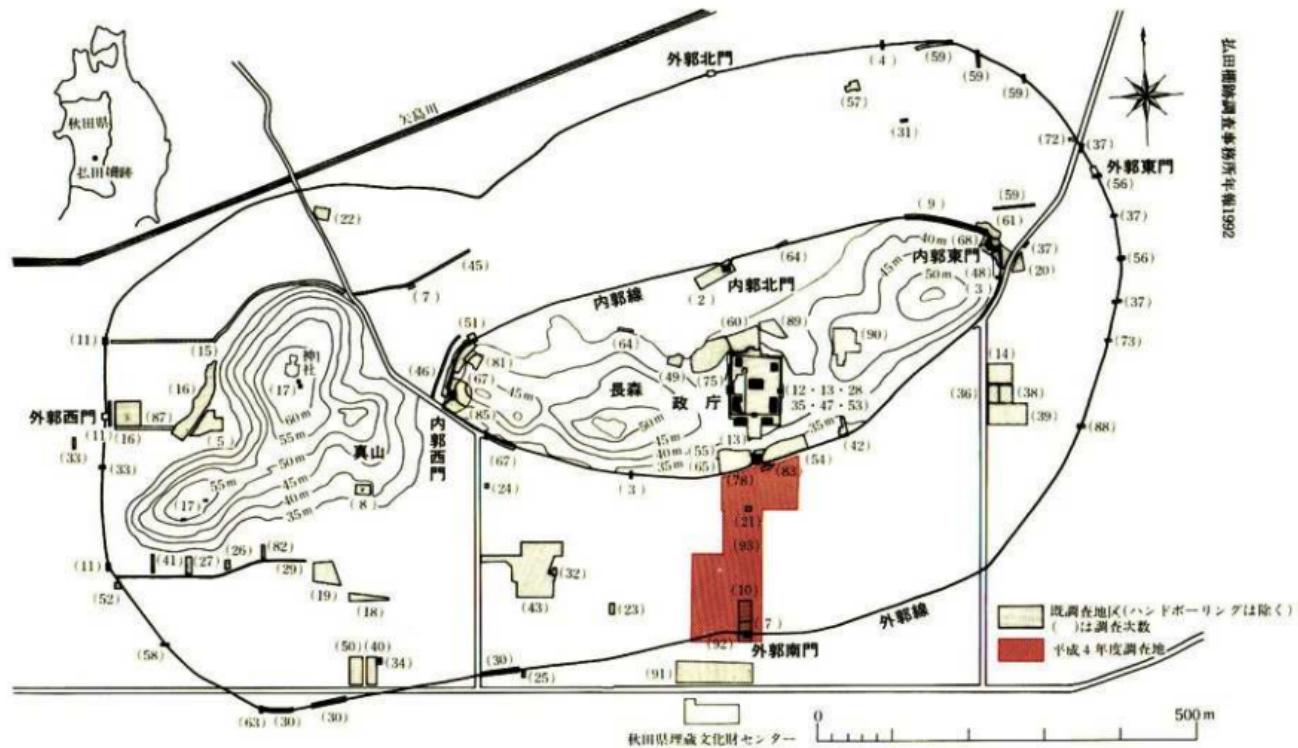
調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第92次	外郭南部 (仙北町払田字仲谷地)	1,400m ²	4月8日～7月2日
第93次	同上	2,800m ²	7月3日～10月20日
合計	2地区	4,200m ²	

外郭線角材列は、これまで途切れることなく全周すると考えられて来たが、外郭内を流れる河川に関連して、27mの間が当初から作られていないことが判明した。

第93次調査では、大路を示す側溝や道路の盛土などは検出されなかった。しかし、掘立柱建物跡と河川内に検出された橋脚の位置から、外郭南門と内郭南門を結ぶ線上に大路が存在したと判断され、その幅は約12m以内と推定される。外郭内を流れる河川跡は、河川敷の南北最大幅が約100mである。この川は外郭線の創建前から存在し、川底から出土する土器の年代の示す9世紀末～10世紀前半に大規模な洪水があって、川底に多くの遺物を堆積させている。

橋脚と考えられる遺構は、河川敷内にある10本の柱で、このうちの1本は先端を尖らせた直径50cmのスギ杭を川底の粘土層に打ち込んでいる。大路を横切る河川に架設した橋の橋脚柱と考えられる。

遺物には多くの土器や、審査・曲物などの木製品が出土した。注目されるものに、掘立柱建物跡付近から出土した第1号漆紙文書と、河川底部に堆積した砂礫層から出土した「小勝」銘墨書き土器がある。総遺物量はコンテナ52箱に上る。



第1図 払田櫛跡調査実施位置図

第3章 第92次調査

第1節 調査経過

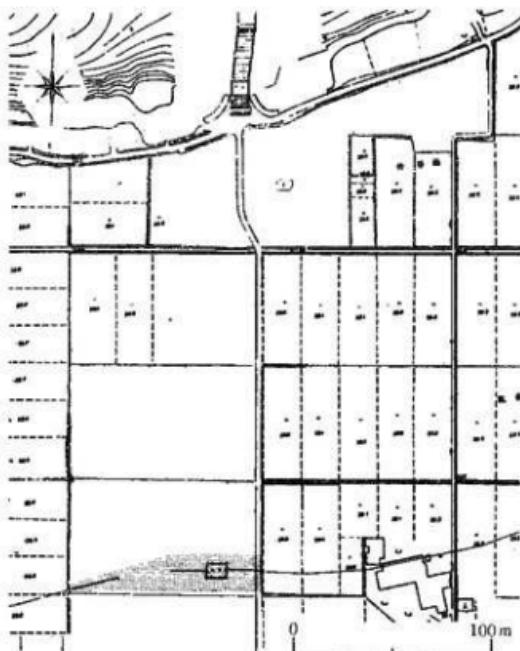
仙北町では平成3年度から史跡等活用特別事業による払田柵跡の整備を開始し、ガイダンス施設とそれに伴う駐車場の建設などを実施した。次いで、今年度はそれらの範囲を除く $20,772\text{m}^2$ を対象として、遺構保護を目的とした盛土造成工事を計画した。

この工事を理由とした現状変更許可申請書が6月3日、仙北町から提出され、申請書は秋田県教育委員会を経由して文化庁へ進達された。

一方、この区域では外郭南門と外郭線角材列の復原整備も計画され、これを理由とした現状変更許可申請書が9月14日、仙北町から提出、申請書は秋田県教育委員会を経由して文化庁へ進達された。

当事務所では、これらの工事に先立ち、外郭南門と角材列の調査を第92次調査として今年度の調査計画に組み入れ、発掘調査を実施したのである。

4月8日、調査区西端の管理用道路と外郭線角材列の交差部分から調査を開始、すぐに角材列の上部を検出した。15日、調査区の東端部に移動し、角材列の布掘りを検出した。20日からは重機を使用して調査区全体の表土剥ぎを行った。5月12日、外郭南門の東側にある現道路敷部分を初めて掘り下げた。15日にはSA1027角材列の南に土坑やその他の遺構を検出。21日、門の西にあるSA1028角材列の調査を開始、布掘りを検出したが、15ライン以西では角材がボーリング棒でも全く当たらないことに気付き、26日、SA1028の第30次調査における深掘り部分



第2図 第92次調査位置図

をさらに下部まで掘り下げたところ、河川跡であることが判明。角材列の布掘りはその東側で止まっており、川の中には構築されていないと判断された。翌日、この河川はかなりの広さがあると考えられたので、河川の西側の S A 1032 角材列は、確実にその存在が確かめられる西端部から河川へ向かって東へ掘り進めることにした。

河川西側の S A 1032 角材列を精査して、6月2日にはその東端が河川の西側の岸で止まることが明確となった。6月10日から外郭南門の第7次調査における埋め土の除去を行って、遺構を現し角材列の実測作業も並行した。18日には門の西の角材列、河川の写真撮影を行った。23日、外郭南門の全ての柱掘形を検出。河川跡にはトレンチを設定して川底まで掘り下げた。しかし、川の南岸は明確であるが、北岸はトレンチ内で把えることができず、調査区の北へ延びていることが推測された。川底からは土器や木製品が出土した。

30日、外郭南門の全景撮影を行った。以後、第93次調査と並行して補足調査を行い、7月30日には奈良国立文化財研究所、光谷拓実主任研究官より、外郭線角材列の中から年輪年代測定試料6点を採取していただいた。

8月18日には第35回顧問会議を開催し、調査・研究の顧問である秋田大学新野直吉学長、国立歴史民俗博物館考古研究部長岡田茂弘教授に対し、第92・93次調査の概要を説明するとともに現地で御指導いただいた。8月22日には現地説明会を開催し、多数の見学者が来跡した。

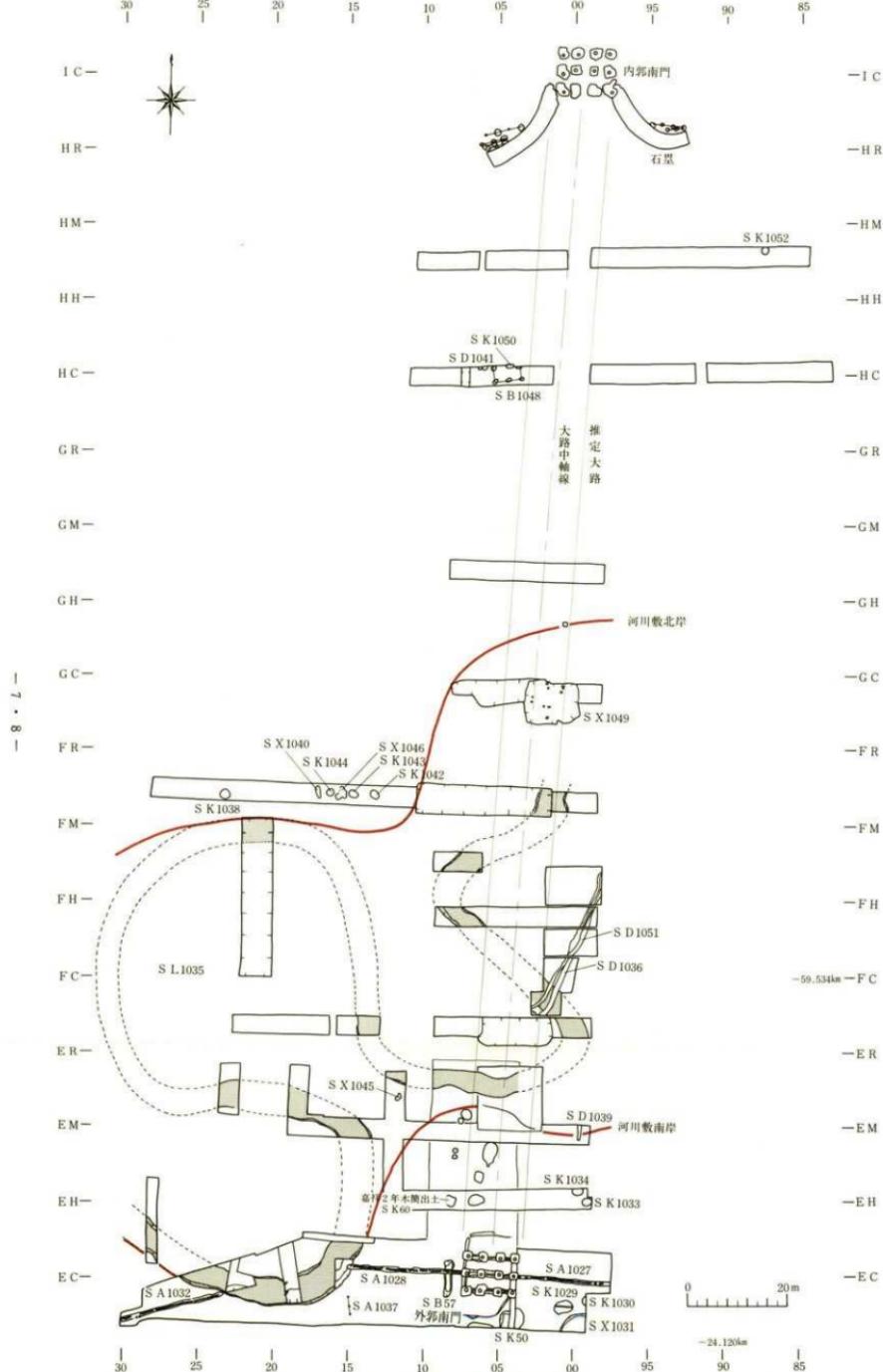
第2節 検出遺構（第3・4図）

外郭南門は1930年、文部省が初めて調査を実施し、その後旧高梨村は土地の買い上げを行い、^(註1)門柱の乾燥を防ぐため水を巡らすなどの保存措置を施してきた。1975年の第7次調査はこの外郭南門を対象としたが、遺構の保存状態は良好であった。この他、外郭南部の低地では、外郭^(註2)南門の北側に連続する地域で第10次調査、外郭線角材列を対象とする第30次調査、さらに外郭^(註3)内^(註4)の旧地形や土地利用状況を探る調査の一環として第62・66次調査を実施してきた。

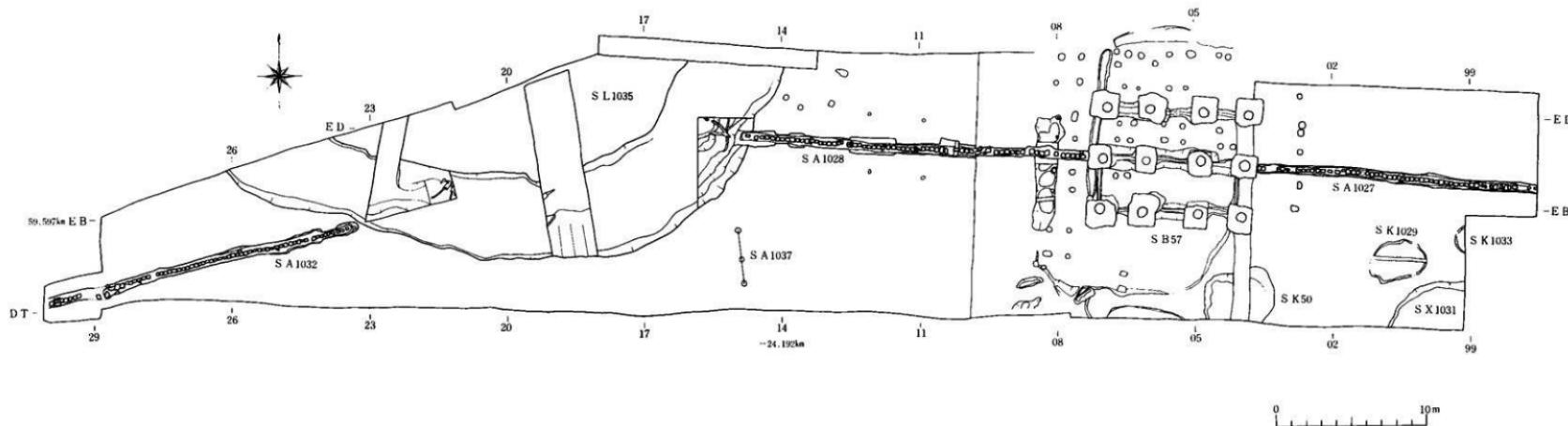
しかし、今回のように門を含む東西約100mもの長さで外郭線が面的に調査されたのは初めてである。外郭南門ではその再調査、角材列では建て替えの有無や、堀・櫓の有無の検討、年輪年代測定の実施などを目的とした。

調査対象地は標高33m前後の水田であるが、仙北町が1991・1992年に土地の買い上げを行い、休耕田となっている。

調査の結果、掘立柱建物跡（外郭南門）1、外郭線角材列3、柱列1、土坑3、河川跡1、その他の遺構1の計10遺構を検出した。



第3図 第92・93次調査造構配図



第4図 第92次調査達構配置図

1 遺構と遺物

(1) 堀立柱建物跡

① S B57 (外郭南門) (第5・6図、巻首図版1~4、図版2~4)

桁行3間×梁行2間の東西棟掘立柱式の門である。柱間距離の平均は桁行總長9.20m（東から $2.86+3.54+2.80$ ）、梁行總長6.65m（北から $3.32+3.33$ ）で、桁行30尺（9+12+9）、梁行22尺（11+11）と考えられる。遺営尺は1尺=30.5cmである。遺物方位は調査南北基準線に対し、N94°Eで、建て替えはなく、1時期のみの遺営である。内郭南門との距離はほぼ240mである。基壇の痕跡や内郭南門との間の道路痕跡は認められない。

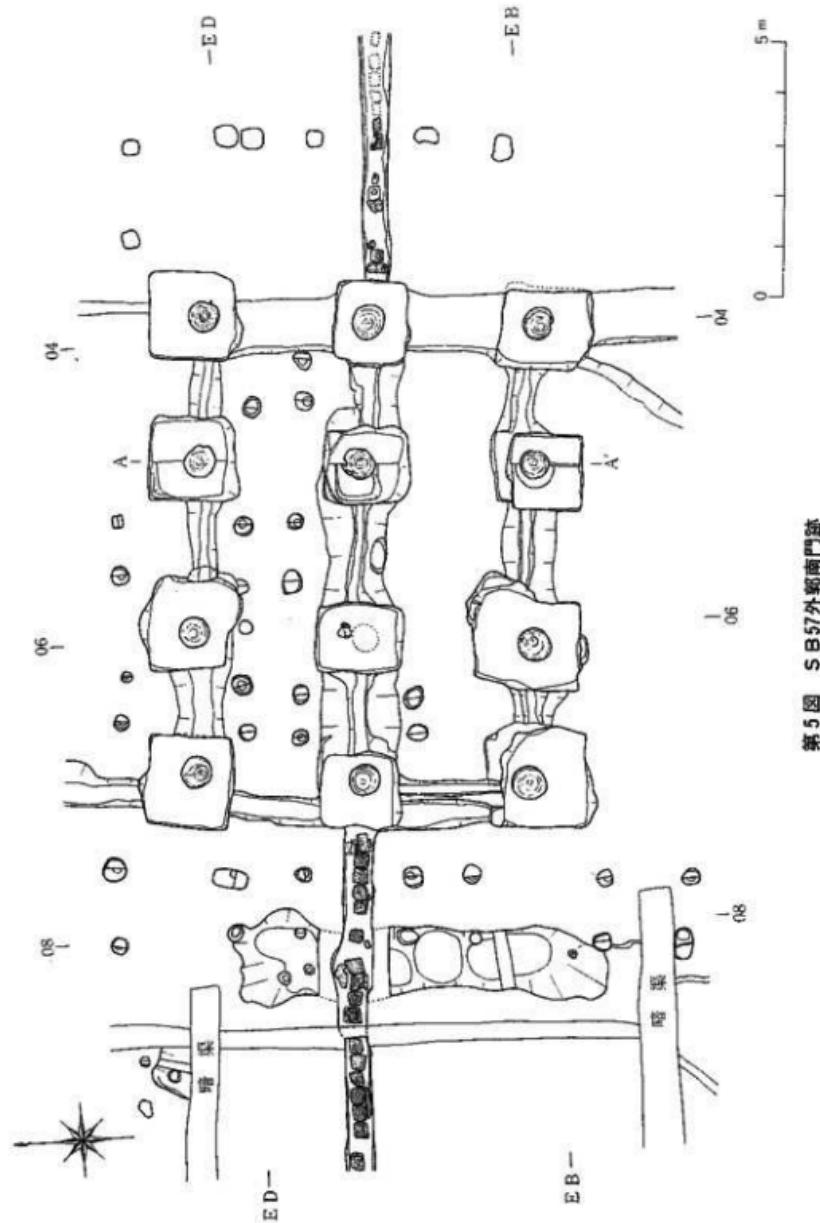
柱掘形は一辺1.35~2.0mの方形で、第7次調査の後に一部が破壊を受けて変形している。垂直に掘り込まれ、埋土は地山の青灰色粘土と黒色土が混じる。門の桁行方向3列の掘形を結ぶ溝があるが、これは文部省調査後に水を滞留させて門柱の乾燥を防ぐために、旧高梨村が講じた遺構保護策である。妻柱の掘形には角材が接続していないが、文部省調査の報告書には接続する状態の平面図や写真図版が掲載されており、元来は直接に接続していたもので、前記の遺構保護のための溝を掘った際に抜き上げられたのであろう。

深さの明らかな側柱4本では、底面のレベルが31.40~31.64mであるが、棟通り中央2本はそれに比べ36~67cm浅い。柱は下部で直徑60~62cmの丸柱で、手斧等の工具で加工が施され、下部に目渡孔がある。東側中央の柱の歴船はほぼ100年、西側中央の柱のそれは80年である。南側の東から2番目の柱は、掘形底面を円形に掘りくぼめた中に柱を置く。内郭西門でも同じ
(註7)

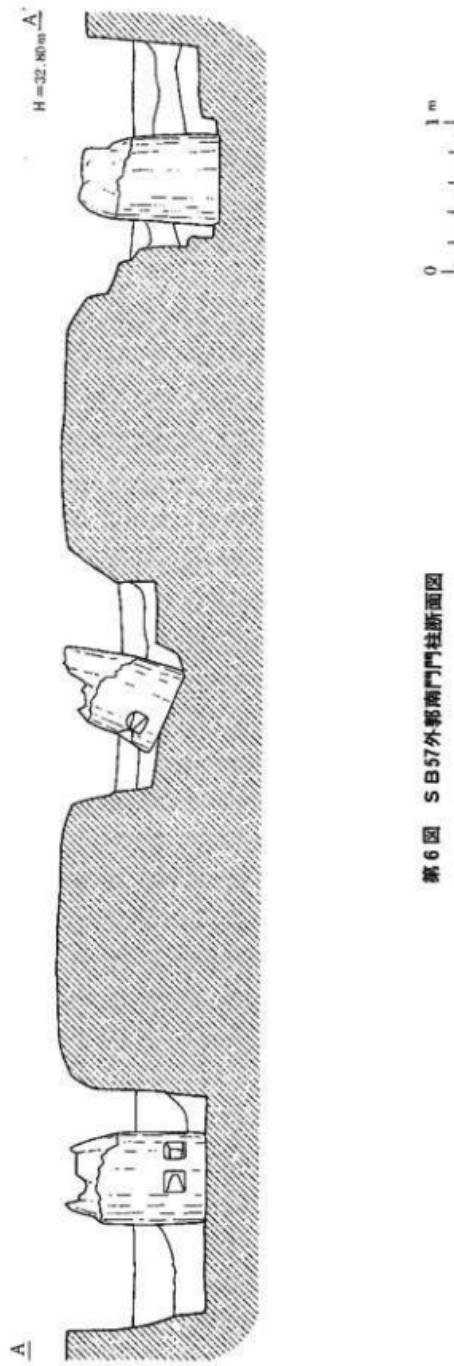
棟通りの東から2番目の柱は南に傾き、遺存長も短い。同じく東から3番目の柱は抜き上げられ、クリ材の残欠が確かに残るのみである。1930年の調査時において、既に半ば腐朽し去っている柱があるとの記述が報告書にあるのは、この材を指すと考えられ、第7次調査ではこの掘形底面に柱の抜き跡を検出している。棟通り中央2本の柱は文部省調査時以前に既にこうした状況となっていたと考えられ、それは掘形の底面レベルが他の掘形よりも浅く作られていることに起因すると推定される。棟通り中央2本の柱掘形の同様な傾向は内郭西門でも確かめられているほか、この2本の柱を欠く構造は、政庁の東・西・南門、内郭東・南門でも認められる。

第7次調査でS A68~71とした4本単位の小柱穴は、内郭東門や志波城政庁正殿などに見られる足場組柱穴と同じで、今回門の東側にも南北1列が検出された。直徑30~50cm、深さ10~20cmのものが多い。門の中央部から南側には検出されず、後世の削平によって失われたもので、元来は門を取り組んで存在したと考えられる。門の側柱との距離は、西側では2列あり、それぞれ1.90m、3.20m、東側では3.60mである。

(註8) (註9) (註10)



第5図 S-B57外郭南門駅



第6図 SB 57外郭南門門柱断面図

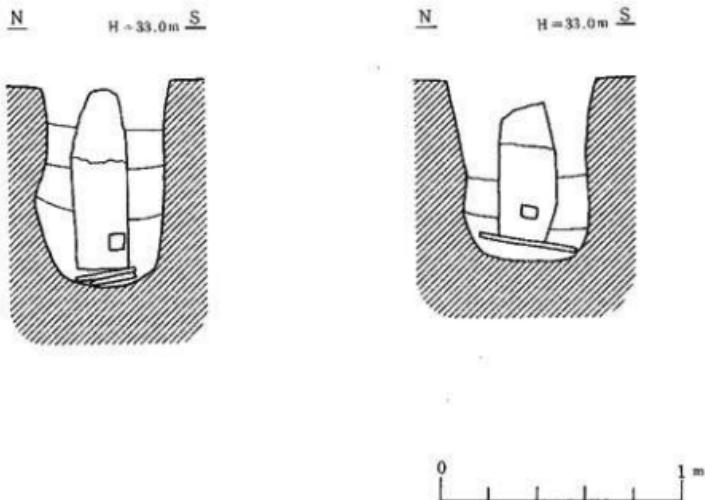
門柱の樹種は西側中央の柱がトネリコ属、南側の東から2本目がケヤキまたはハリギリ、その他はクリである。柱掘形からは遺物は出土しなかった。

(2) 外郭線角材列 (巻首図版5~9)

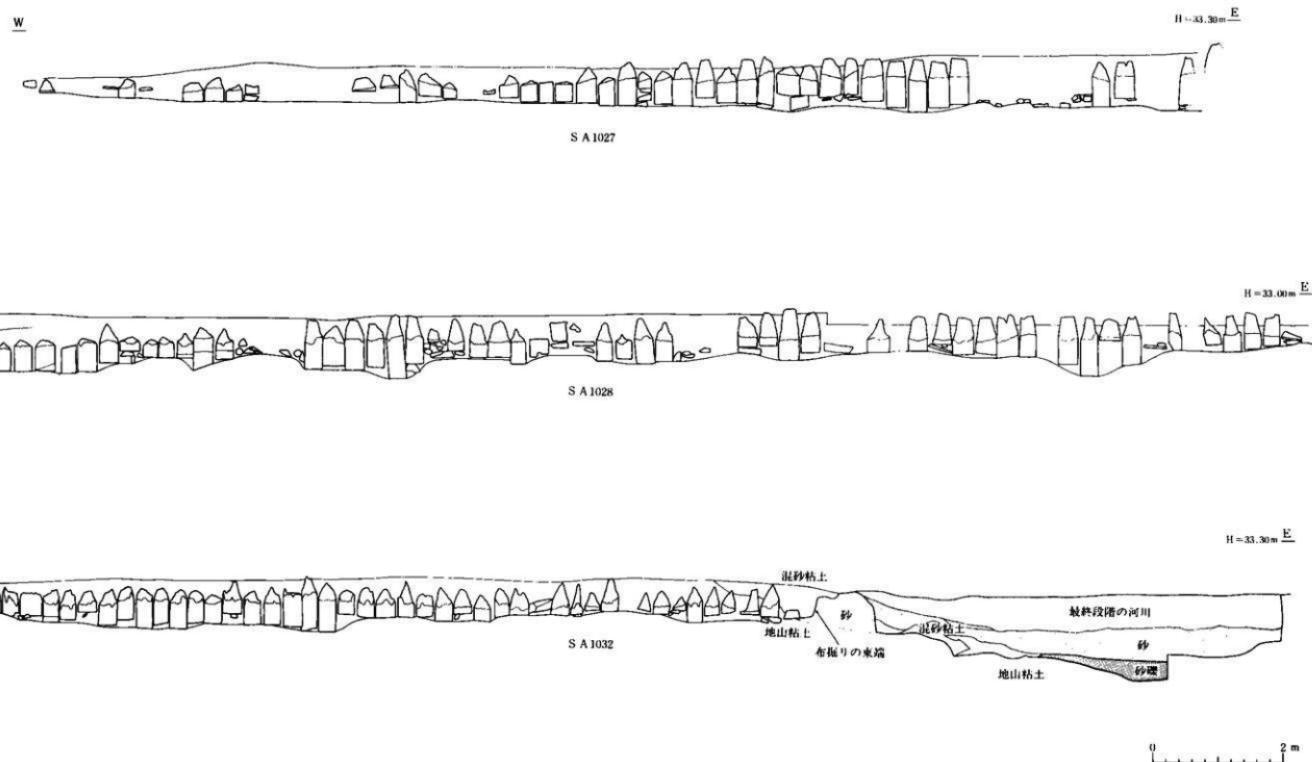
奈良国立文化財研究所、光谷拓実主任研究官による年輪年代測定によれば、角材の伐採年代は西暦800年が1点、801年が4点である。他に788年の数値を示したもののが1点あるが、角材の木口面に虫食いによる孔があり(図版14-2)、この年代で成長が停止したものを伐採した可能性が高く、この数値は伐採年代とは言えない。

① S A 1027 (第7~9図、図版5~8・24)

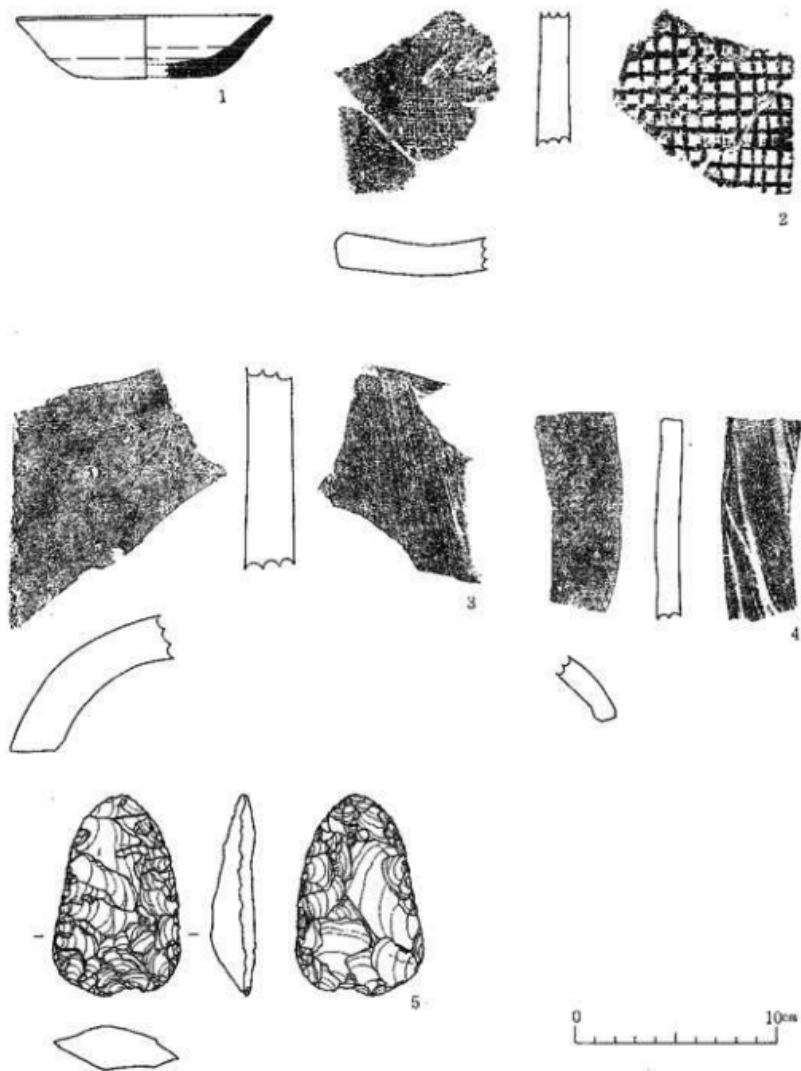
S B57外郭南門の東側中央の柱掘形から東へ18.5mにわたって検出した。門の東を南北に通る町道部分は、今回初めて調査を行ったが、その東の水田は1930年にも調査がなされている。布堀りは上面幅50~80cm、深さは最も深い東端部で85cmあり、その中に角材が南接して立ち並ぶ。角材は一边の長さが30cmを越えるものが多く、36cmを測るものもある。一边の平均は29.5×24.6cmで、長辺を布堀りに対して平行に並べる。既に抜き取られた箇所には角材の下に置かれた礎板のみが残っている。角材の長さは最長80cmほどのものもあるが、門に近付くにつれて布堀りの底面レベルがだいに上がり、東端とは約40cmの高低差が生じている。したがって、角材の保存状態も西ほど悪く、町道があったこともあってか、痕跡のみが並ぶ箇所もある。



第7図 S A 1027角材断面図



第8図 S A 1027・1028・1032断面図



番号	種別	器形	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	回数
1	窯底盤	杯	外面: ロクロナデ・網目彫へち切り 内面: ロクロナデ	12.8	5.4	3.1	0.42
2	平瓦						24-1
3	丸瓦						24-2
4	丸瓦						24-3
5	石施			10.0	6.3	2.2	24-4

第9図 SA 1027角材列布掘り出土遺物

外郭南門の東側中央の柱掘形内には角材はないが、元来は柱に接続していたものであろう。角材列の東端から、外郭南門の東側中央の柱まで60本の角材が存在したと推定される。年輪年代測定では801年の数値を示すものが2点ある。

遺物は、布掘り内から須恵器杯、平瓦、丸瓦、石器が出土した（第9図）。石器は龜文時代のものが混入したものである。他に小破片であるが、須恵器では回転ヘラ切り痕のある杯、高台付杯、甕、土師器では回転糸切り痕のある杯、甕底部が出土した。

② S A 1028 (S A 58) (第8・10図、図版8・10)

S B 57外郭南門の西側中央の柱掘形から西に23mの長さで検出した。1979（昭和54）年の第30次調査で坪掘りによって角材の確認調査を行っており、布掘りの所々が上部のみ幅広くなっているほかはS A 1027と同様の幅である。西側中央柱の掘形内にも1930年の調査時には角材が存在して柱に接続していたが、抜き上げられている。角材の一辺の長さは30cmを越えるものが多く、平均は $28.7 \times 24.8\text{cm}$ である。最も長い角材は97cmの長さがある。抜き上げられた角材も含め、73本の角材が立ち並んでいたと推定される。

布掘りの西端は、S L 1035河川跡に向かって落ち込む植物遺体を含んだ自然堆積土を掘り込んで作られ、河川の肩部で明確に壁をなして止まる。河川と角材列との新旧関係は、明らかに角材列の方が新しい。西端の角材は西に傾いている。この角材は下部が僅かに残るだけであるが、他に比べて特に大きな角材とは言えない。西に傾いているのはこの角材を西側から支えるものが特になかったことを示すものか。その東隣りの角材は残存しない。

年輪年代測定では788年、800年の数値を示すものが各1点、801年が2点である。

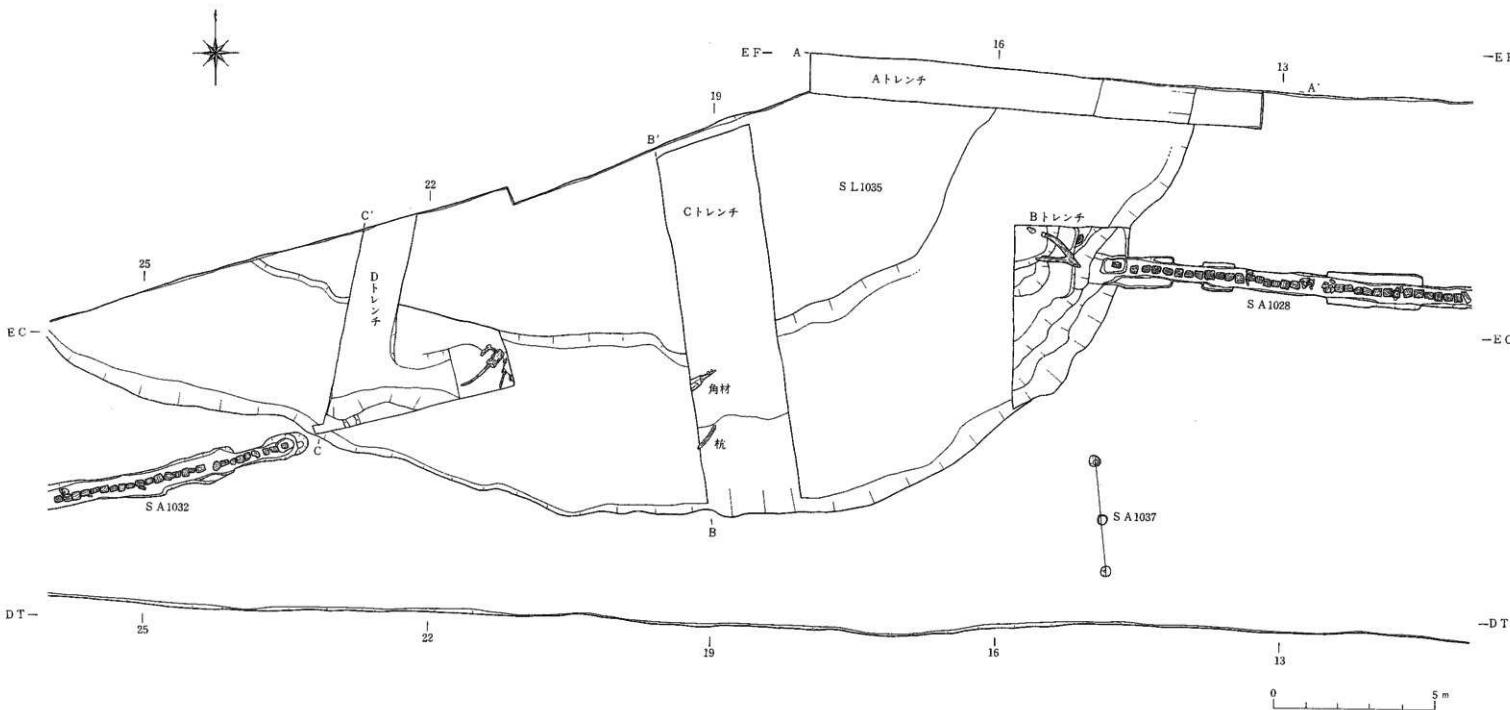
③ S A 1032 (第10図、図版9)

S L 1035河川跡の西側に21mにわたって検出した。暗渠排水溝との重複が激しく、布掘り上部はかなり破壊を受けている。西端部の角材は西に向かって傾くものや、横倒するものがあるが、布掘り内にも砂利が入っていることから近年の攪乱によるものであろう。S A 1027・1028と異なり、角材の一辺が30cmを越えるものはほとんどない。一辺の平均は $25.8 \times 21\text{cm}$ である。

布掘りの東端部はS L 1035河川跡に傾斜する植物遺体を含んだ自然堆積層を掘り込んで作られ、壁をなして止まっている。最も東の角材は失われており、礎板が残っている。新旧関係は角材列が河川よりも新しく、東側のS A 1028角材列の西端部と同様である。

角材列全体を見ても明らかにスギ以外の材と判断されるものは見られない。角材の底面レベルにはかなりの変異があり、隣接する角材どうしではS A 1027の場合最大25cm、S A 1028では55cm、S A 1032では27cmの高低差がある。

布掘りの底面に直接角材が置かれるとは限らず、掘り下げた布掘りに土を入れ、その上に礎板を置いてから角材を建てる箇所もある。底面レベルの高い角材には下に2段、3段の礎板が



第10図 角材列の開口部

置かれているが、その場合、両側の角材の底面が低く、その間の1本だけが高くなっていることがある。一壁板に2本の角材がまたがる場合もある。

しかし、こうした箇所でも布掘りの幅は一定していて、古い角材をこの部分のみ抜き上げて修復を施したと判断される形跡は認め難い。反面、約7mの間、高低差が20cm以内に収まっている所もある。これらの状態に明確な規則性は窺えない。こうしたことから、壁板の有無や角材の底面のレベルの違いは、角材を布掘り内に建てる際に必要に応じて1本づつ角材の高さを調整しながら建てたことによると考えられる。

S A 1032には角材の1辺の幅が30cmを越えるものはほとんどない。ところが、S A 1027と1028には最大幅が34cmを測るものもあって、その違いは歴然としており、門に近い位置で幅の広い角材を使用していることが明確である。

S A 1028角材列の南北両側に対をなす4個の柱穴がある。径20cm、深さ27cmで、径10cmの柱痕跡がある。東西方向3.60m、南北方向3.80mの距離である。角材列に関連するものか否かは定かでない。

S A 1028と1032角材列の間にはS L 1035河川跡の南端部があり、この間27mにわたって角材列が当初から作られておらず、河川を境に角材列の方向に変化がある。角材列に代わり得る区画施設あるいは遮蔽施設は、南岸の地山面には検出されない。角材列に伴う掘、樁状建物、角材列の上部を支えるための支柱は調査範囲内には認められない。

(3) 河川跡

① S L 1035 (第11~16図、巻首図版5・6、図版12~13・24~26)

S A 1028とS A 1032角材列の間に、外郭内を流れるS L 1035河川跡の南端の一部がある。南岸は粘土質上の地山で、北岸はこれより約100m北にある。

河川の深さ、角材列や遺物の有無の確認を目的にA~Dの4本のトレンチを設定した。川底までの深さは川の検出面より約2.0mあり、最下層には砂礫が20~40cmの厚さに堆積する。上層ほど粒子が細くなり、砂質土、粘土質土となる。砂礫層には土器や木製品が含まれ、土器の年代は9世紀末~10世紀前半と推定される。その上の砂質土層には水流を示す細かな層理が見られ、植物遺体が含まれるが、土器などの遺物はほとんど出土しない。

Bトレッジでは水流によって流されたと見られる自然木が、河川の下方の斜面に検出された。

Cトレッジの砂礫層からは外郭縁角材列に使用した角材と同様の角材が、角材上部の腐朽して尖った方を河川の上流に向けて横倒して出土した(図版13-2)。一边27×24cm、残存長100cmあり、S A 1028角材列西端部の1本が川底に流れ落ちたものと見られなくもない。S A 1028などの角材と異なる点は、角材の半分以上が腐朽して細くなっていることである(図版26)

-16）。砂礫層に流れ落ちた時点で既にこのような状態となっていたと見ることができよう。また、長さ1.95mの細いスギの角杭が、最終段階の河川の上部から砂礫層の上面まで打ち込まれていた（図版13-2）。手斧痕跡が全体に見られ、古代における何らかの仕事であろう。

Dトレンチでは上方に生えた自然木に、工具による伐採痕が見られた。

最終段階の河川跡が北に湾曲する幅4.5~6.0mの泥濘状となって平面確認される。少量の遺物が植物遺体とともに出土した。

河川内に角材列や布掘りは存在せず、角材列はこの蛇行する河川の東西両側において明確に止まっている。角材列の布掘りは、S A1027・1032とともに河川の肩部にある植物遺体を含む自然堆積土を切っており、角材列の方が新しいことが明らかである。

この河川は9世紀初頭の外郭線角材列の創建時に既に存在し、その後も河底を下刻する形で流れた時期もあったが、やがて9世紀末~10世紀前半の頃に多くの砂礫と共に遺物を堆積させる状況に変化し、砂層、粘土層をも堆積させて、さらに最終段階の河川を形成したと考えられる。なお、最終段階の河川は、明治乍間の耕地整理前の様子を描いた『耕地整理地区現形図』^(註1)を見ると角材列の開口部付近では細い水路と、それに沿った道路がこの位置に重なるように描かれているが、その北側の第93次調査区での蛇行する流れは全く描かれていない。河川の上部からも僅かではあるが土師器や木製品が出土していること、古代の仕事と考えられる杭が打ち込まれていることなどから、この部分の河川としての終焉は古代の範囲内と推定される。

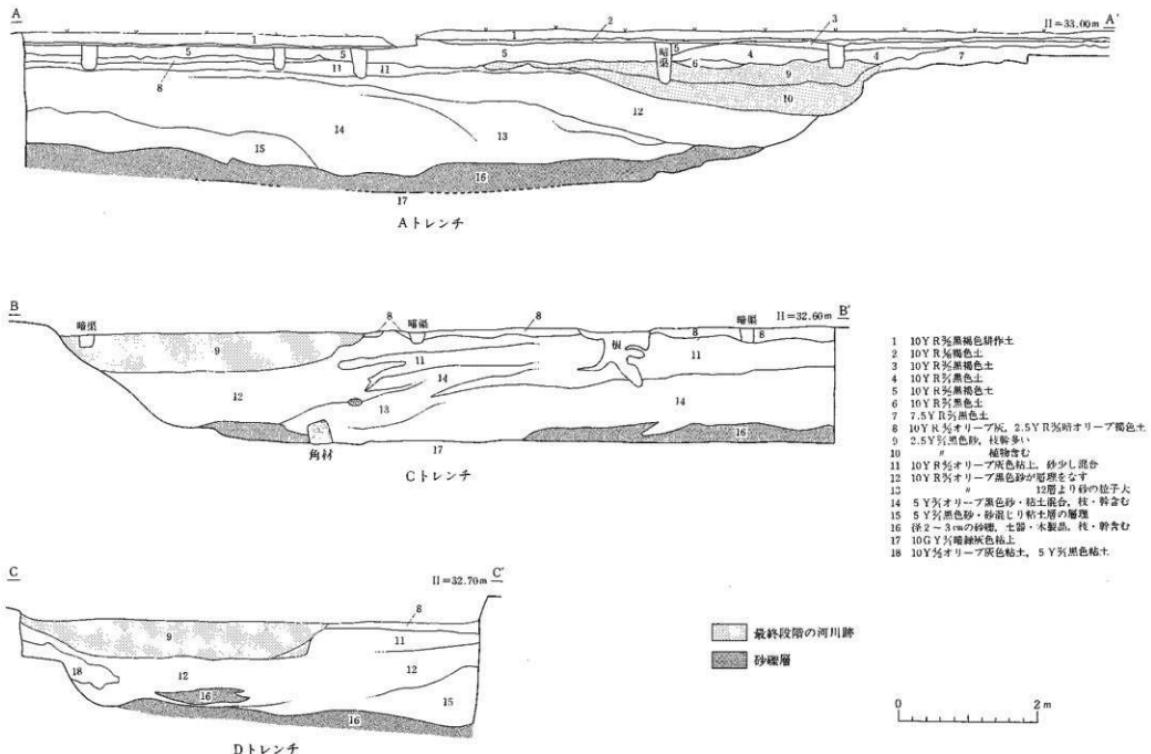
川底の砂礫層出土遺物（第12~15図）は、1~9が須恵器杯で、1・2のみ底部切り離しが回転ヘラ切り、他は回転糸切りによっている。7~9は底面に墨書きがあり、9は「日當」か。10は小型の須恵器甕である。11・14は両面に黒色処理を施す土師器杯で、14には低い高台が付く。12~24は土師器杯で、13の体部に「蟠」と見られる墨書きがある。25は土師器甕である。26は砥石で4面を使用する。木製品としては27・28が斎串、29・30は箸、31は槍扇である。32は末端に孔があるが用途不明。33には桟皮紐が付き、側板の痕跡が見られる。曲物の底板であろう。

角材列開口部の最終段階河川跡からは、土器では低い高台の付く土師器皿（第16図1）、珠洲系陶器（2）、木製品では串（3・4）、方形曲物蓋（5）、方形曲物底板（6）、円形曲物底板（7）、下駄（8）が出土した。

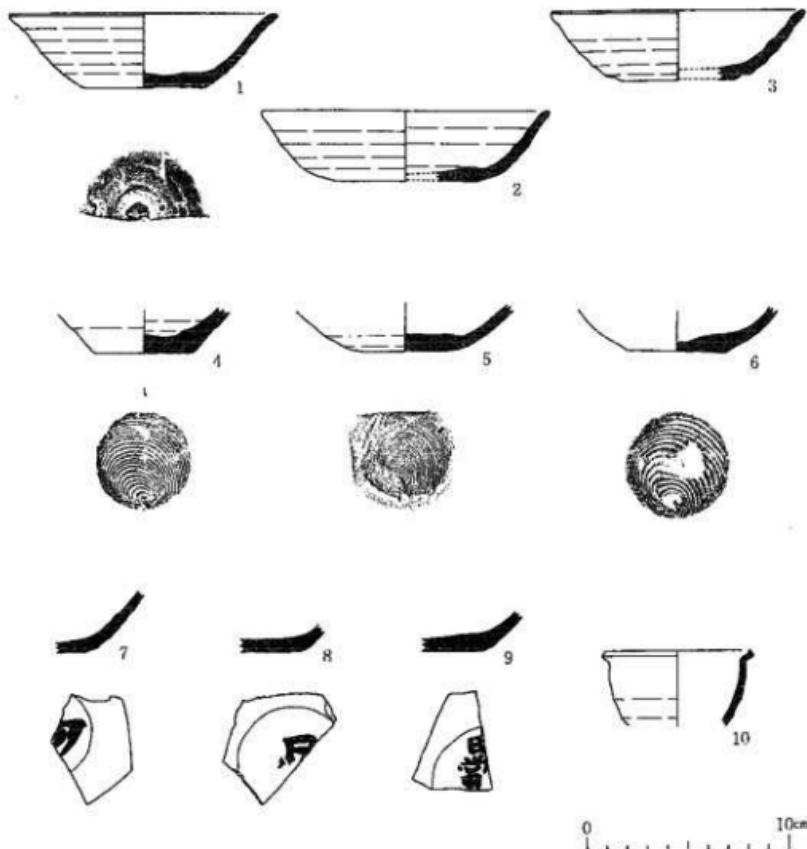
（4）柱列

① S A1037（第17図）

地山面で確認した南北筋2間の柱列であるが、南へ延びる可能性がある。掘形は直径30~40cmの円形で、深さ25cmほどで底部が丸みを帯びる。北端に径16cmの柱痕跡があり、総長は

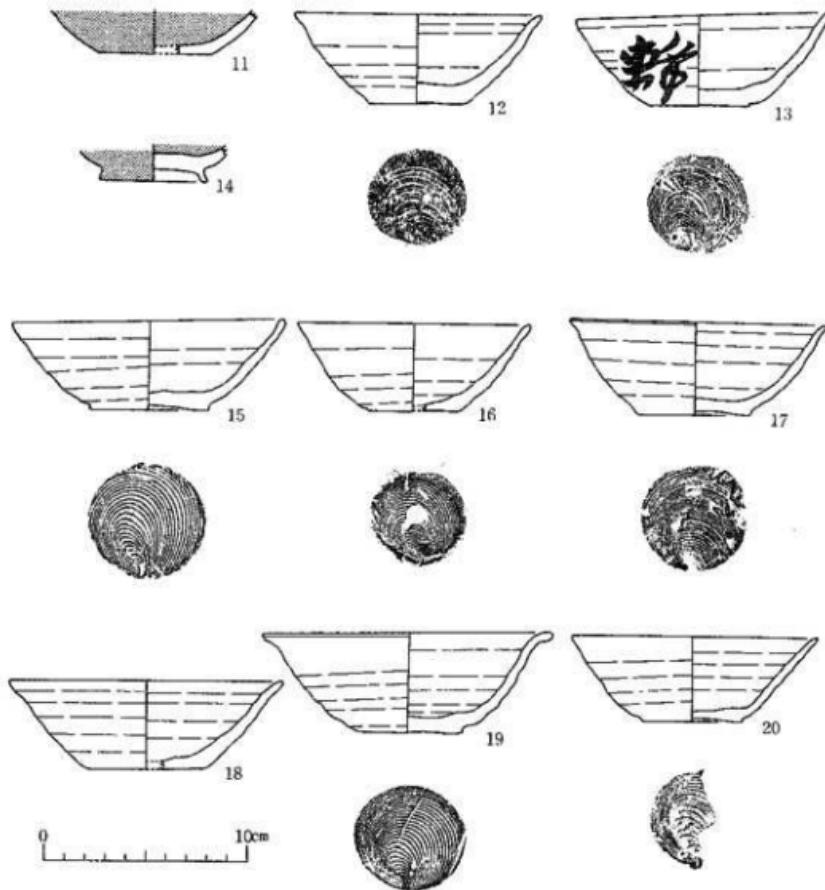


第11図 S L 1035 土層断面図



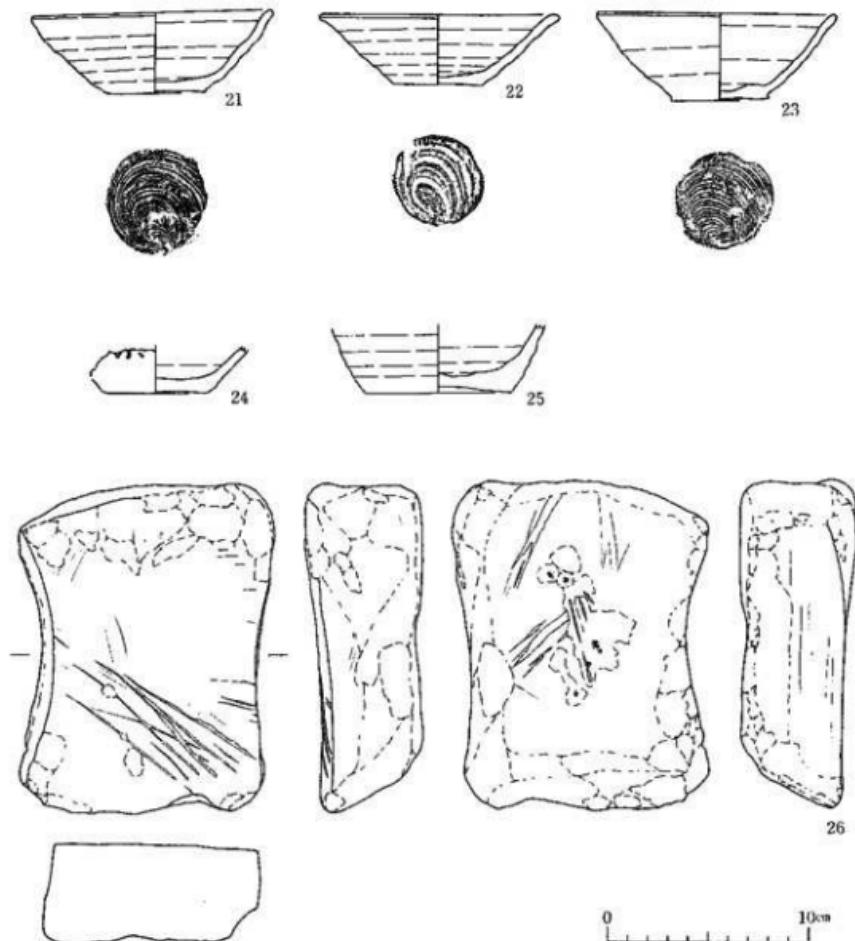
番号	種別	器形	特 徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径 指数	高径 比	外輪 状態	内輪 状態
1	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ	13.4	6.0	3.7	0.45	27.7	39°	
2	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ	14.4	7.0	3.6	0.49	25.0	31°	
3	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ	12.6	5.6	3.5	0.44	27.8	36°	
4	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ			5.0				
5	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ			5.0				
6	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ			5.0				
7	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、底面に墨書き □ 内面：ロクロナデ							24-5
8	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、底面に墨書き □ 内面：ロクロナデ							24-6
9	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り、底面に墨書き □ 内面：ロクロナデ							24-7
10	須恵器	小型盤	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ			7.2				

第12図 S L1035砂疊層出土遺物（1）



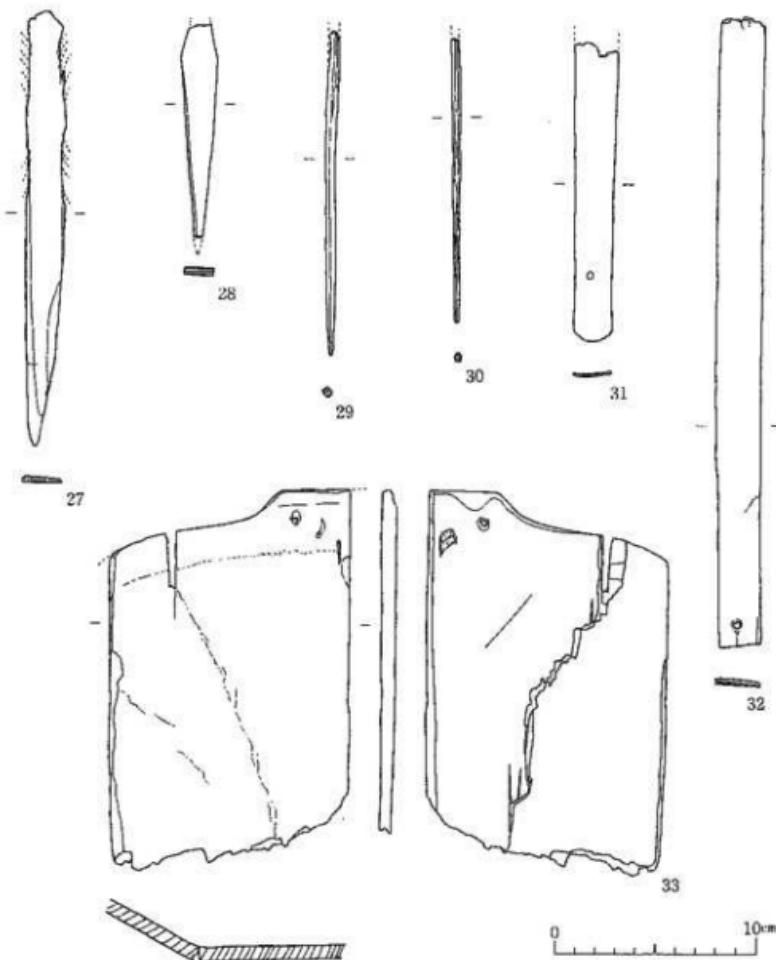
番号	種別	器形	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	脚高 (cm)	底径 指標	底径 指標	外傾 度	國版
11	土師器	杯	内面黒色處理 ロクロナデ	5.6	—	—	—	—	—	—
12	土師器	杯	外面：ロクロナデ・回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.2	4.8	4.5	0.39	37.0	35°	—
13	土師器	杯	外面：ロクロナデ・回転糸切り 各部に凹凸有り 内面：ロクロナデ	12.7	5.0	4.7	0.39	37.0	32°	24-8
14	土師器	高台杯	両面黒色處理、ロクロナデ	—	—	—	—	—	—	—
15	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	13.5	5.8	4.6	0.43	34.1	37°	25-1
16	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	11.6	4.4	4.4	0.38	37.9	32°	25-2
17	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.8	5.5	4.7	0.43	37.0	31°	25-3
18	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	13.6	5.8	4.4	0.43	32.4	37°	—
19	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	14.4	5.3	5.2	0.37	36.2	38°	25-4
20	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.2	4.8	4.2	0.39	34.5	31°	25-5

第13図 S.L.1035砂礫層出土遺物（2）



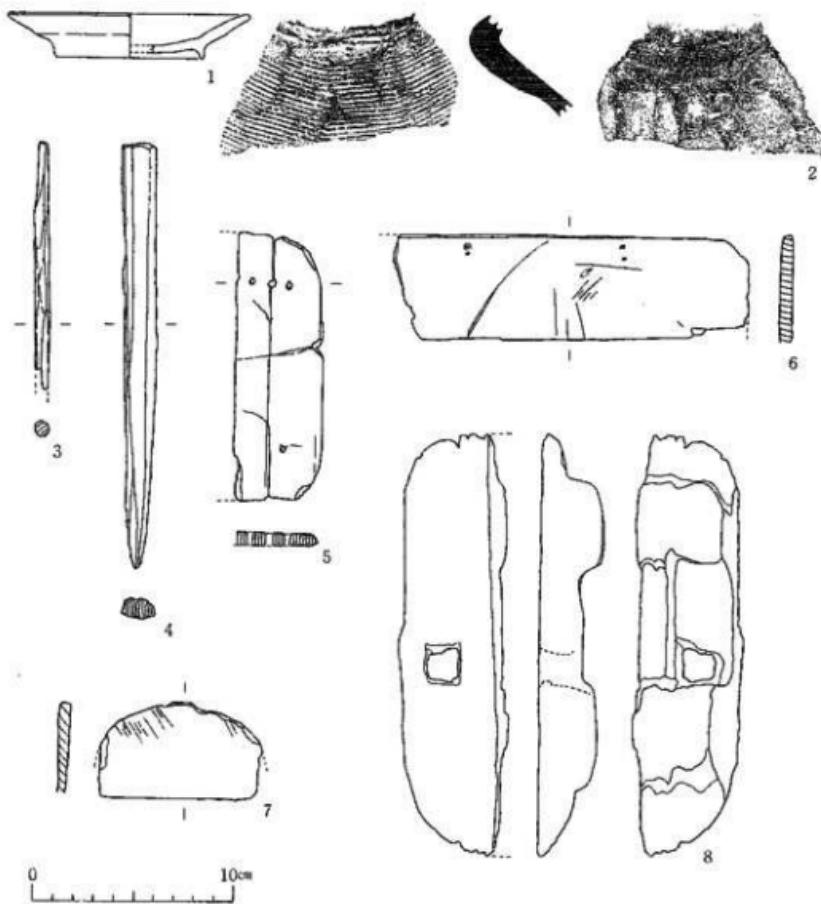
番号	種別	器形	特 徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	底面 指標	高さ 指標	外輪 地	内 底	固 底
21	土器器	杯	外側: ロクロナデ → 回転糸切り 内側: ロクロナデ	12.0	4.4	4.3	0.37	35.8	36°	25	6
22	土器器	杯	外側: ロクロナデ → 回転糸切り 内側: ロクロナデ	11.9	4.5	3.5	0.36	29.4	43°	25	7
23	土器器	杯	外側: ロクロナデ → 回転糸切り 内側: ロクロナデ	11.9	4.8	4.4	0.40	37.0	36°	25	8
24	土器器	杯	外側: ロクロナデ → 回転糸切り、型名□ 内側: ロクロナデ		5.2						
25	土器器	妻	外側: ロクロナデ → 回転糸切り 内側: ロクロナデ		7.2						
番号	種別	器形	特 徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	底面 指標	固 底			
26	砥石	4面使用		17.3	5.8	5.0					

第14図 S L 1035砂礫層出土遺物（3）



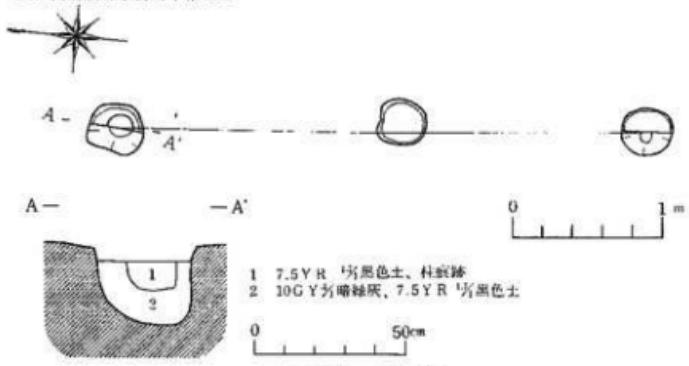
番号	種別	特 徴	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	固 形
27	直 縫		21.7	0.3		
28	直 縫		10.7	0.5		
29	管			0.5	0.5	
30	管			0.4	0.4	
31	块 瓦	底に孔底径0.3cm		2.2	0.2	
32	直 縫		31.3	2.2	0.3	
33	直 縫	側 板 痕 跡 あり			0.7	

第15図 S.L.1035砂疊層出土遺物（4）



番号	種別	器形	特 質		口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径 深さ	高さ 底径比	外側 内側	圖 版
1	土器部 高脚杯	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ			12.0	2.3			19.2		
2	動物部 骨										
番号	種別	特 質		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	圖 版				
3	筈				0.8	0.9					
4	串			21.2	1.7	1.1					
5	動物部 骨	縫じ孔3ヶ所あり				0.8					
6	動物部 骨	縫じ孔2ヶ所あり				0.7					
7	動物部 骨					0.6					
8	下 駄										

第16図 SL 1035最終段階河川跡出土遺物



第17図 SA 1037

3.6m（北から1.9+1.7）、12尺（6+6）と推定される。北端の柱は、SA 1028角材列の西端より南へ6.3mの距離がある。方位はN 6° Wである。

(5) 土坑

① SK 50 (第18図)

外郭南門の南に位置する掘り込みである。1975年の第7次調査で西半分を調査したが、今回その東半分を新たに調査した。遺構の中央の南北に第7次調査時のトレンチがある。東西4.60m、南北推定4.30mほどの略円形で、深さ20~30cm、底面は丸みを帯びている。

須恵器甕の胴部破片が出土した。

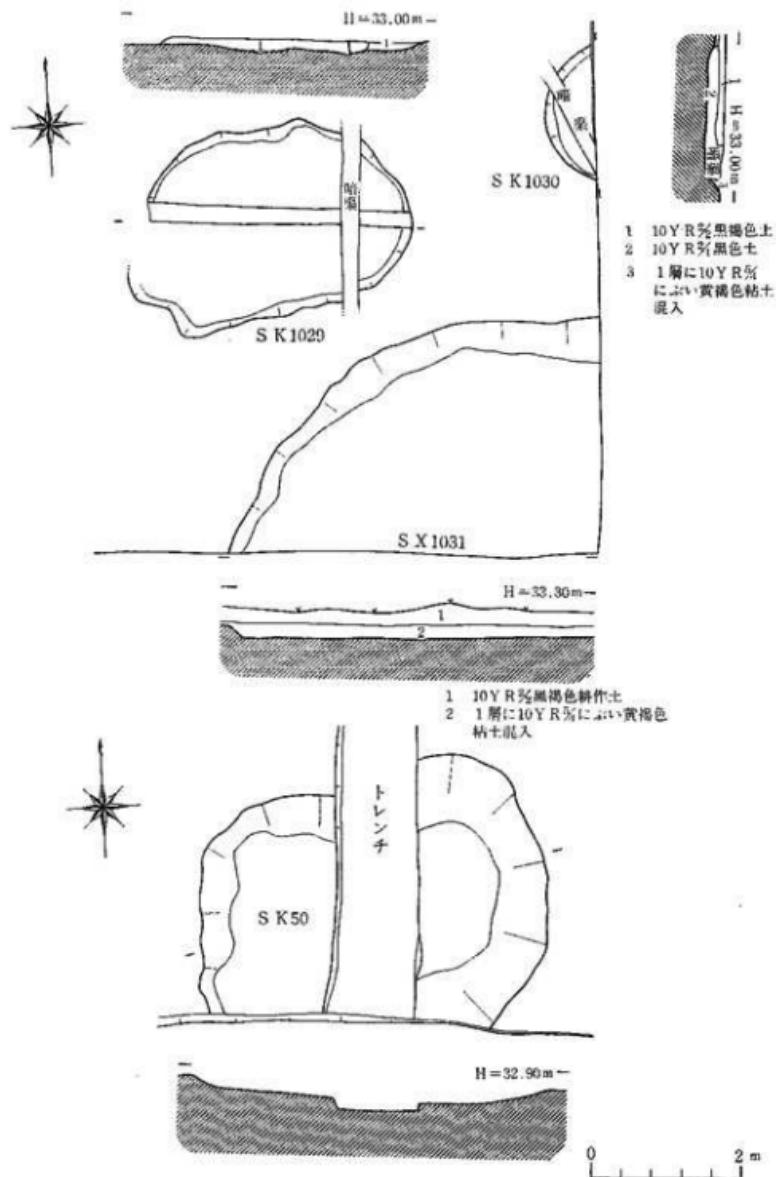
② SK 1029 (第18~20・27)

長軸3.80m、短軸2.50mの、東西に長い梢円形を呈する遺構である。深さ7~18cmである。坑底には細かな凹凸が多い。土師器・須恵器の破片が多く出土し、これらを土坑内に廃棄したものと思われる。

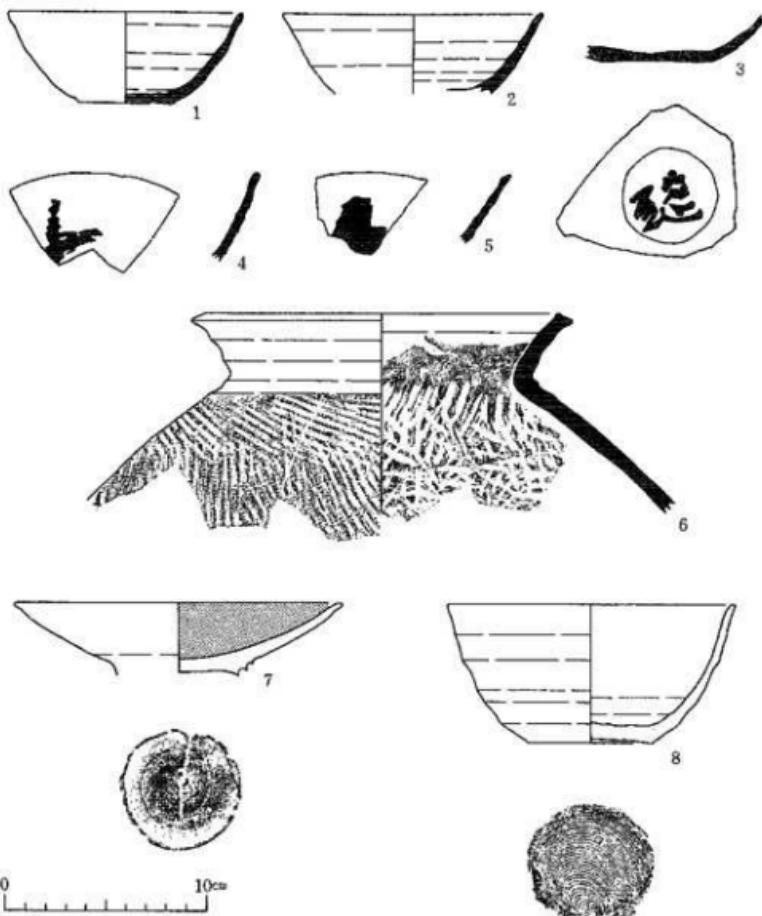
第19図1~3は須恵器甕で、3は底部に「縦」の墨書があり、内面を硯に転用する。4、5も体部に墨書があり、6は須恵器甕である。7は内面黒色処理を施す土師器高台付皿である。8~15は杯で、9は「□」、10「□主」、11は「木」の墨書がある。16は鍋で外面に煤が付着している。他に破片としては、回転糸切り痕のある須恵器甕、土師器では回転糸切りで内面黒色処理が施された甕、下部にケズリ痕のある甕、砂底の甕底部、内外両面に叩き目のある甕、凸面に格子叩き目のある平瓦が出土した。

③ SK 1030 (第18図)

SK 1029の東2mにあり、その西側の一部を調査したのみである。直径は推定2mほどの円形と思われ、深さ約22cm、底面は平坦である。

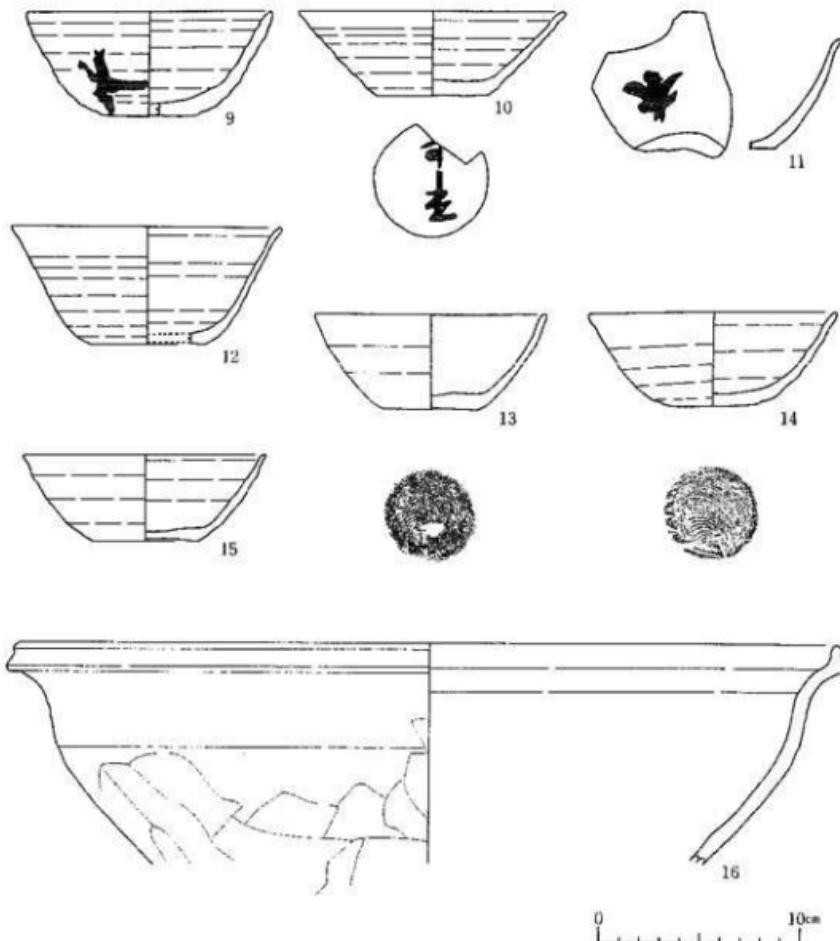


第18図 SK50・1029・1030, SX1031



番号	種別	器形	特徴	寸法 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底面 形状 指標	高さ 指標 指標	外縁 度	回数
1	須志器	杯	外側：ロクロナデ→圓輪系切り 内面：ロクロナデ	11.6	4.6	4.5	0.40	38.8	28°	
2	須志器	杯	外側：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	13.0						
3	須志器	杯	外側：ロクロナデ→圓輪系切り、底面に墨書き「最」 内面：ロクロナデ、軸切端		4.7					27-3
4	須志器	杯	外側：ロクロナデ、墨書き「口」 内面：ロクロナデ							27-1
5	須志器	杯	外側：ロクロナデ、墨書き「口」 内面：ロクロナデ							27-2
6	須志器	甕	外側：タタキメ 内面：アテ其底	17.4						
7	土師器	馬糞罐	外側：ロクロナデ 内面：黒色処理	13.9						27-4
8	土師器	杯	外側：ロクロナデ→圓輪系切り 内面：ロクロナデ	14.3	6.3	6.9	0.44	48.3	19°	

第19図 SK 1029出土遺物（1）



番号	性 別	器形	特 訴	外径 (cm)	内径 (cm)	高さ (cm)	底径 指標	高さ 指標	外幅 度	四 面
9	上部器	杯	外面: ロクロナデ、裏面: 「口」・切妻余切り 内面: ロクロナデ	12.2	4.6	5.1	0.38	41.8	24°	27~6
10	土師器	杯	外面: ロクロナデ、裏面に墨書き「口」・切妻余切り 内面: ロクロナデ	13.2	5.6	4.2	0.42	31.8	40°	27~5
11	土師器	杯	外側: ロクロナデ、裏面「木」・内面: 暗色処理							27~7
12	土師器	杯	外面: ロクロナデ・切妻余切り 内面: ロクロナデ	13.5	5.6	5.9	0.41	43.7	27°	
13	土師器	杯	外面: ロクロナデ・切妻余切り 内面: ロクロナデ	11.6	4.6	4.8	0.40	41.4	27°	
14	土師器	杯	外側: ロクロナデ・切妻余切り 内面: ロクロナデ	12.2	4.6	5.6	0.36	45.9	32°	27~8
15	土師器	杯	外面: ロクロナデ・切妻余切り 内面: ロクロナデ	12.1	5.3	4.3	0.44	35.5	31°	
16	土師器	縄	外面: ロクロナデ→ケズリ 内面: ロクロナデ			40.6				

第20図 SK1029出土遺物（2）

遺物は小破片であるが、土師器の杯、壺の底部・胴部が出土した。

(6) その他の遺構

① S X 1031 (第18図)

S K1029・1030の南にある大きな掘り込みである。東西4.90m、南北3.15mで、約1/4ほど掘り上げた。深さ約20cm、底面は平坦である。

遺物は須恵器壺の口縁部・胴部、底部切り離しが回転糸切りによる杯、土師器壺の口縁部が出土した。いずれも破片である。

第3節 遺構外出土遺物 (第21~23図、図版28)

1 土 器 1は底部切り離しが回転ヘラ切りで無調整の須恵器杯、2は蓋である。3~6は杯の底面で、3には「□平」、4~6には「□」の墨書きがある。7は珠洲系陶器である。

2 瓦 8~11は丸瓦で、凹面に布目痕がある。

3 木製品 12は円形曲物の底板かと思われる。

4 石 器 12は砥石で、表裏2面を使用する。13・14は縄文時代の石器で、13は刃部を局部的に磨いて作り出している。

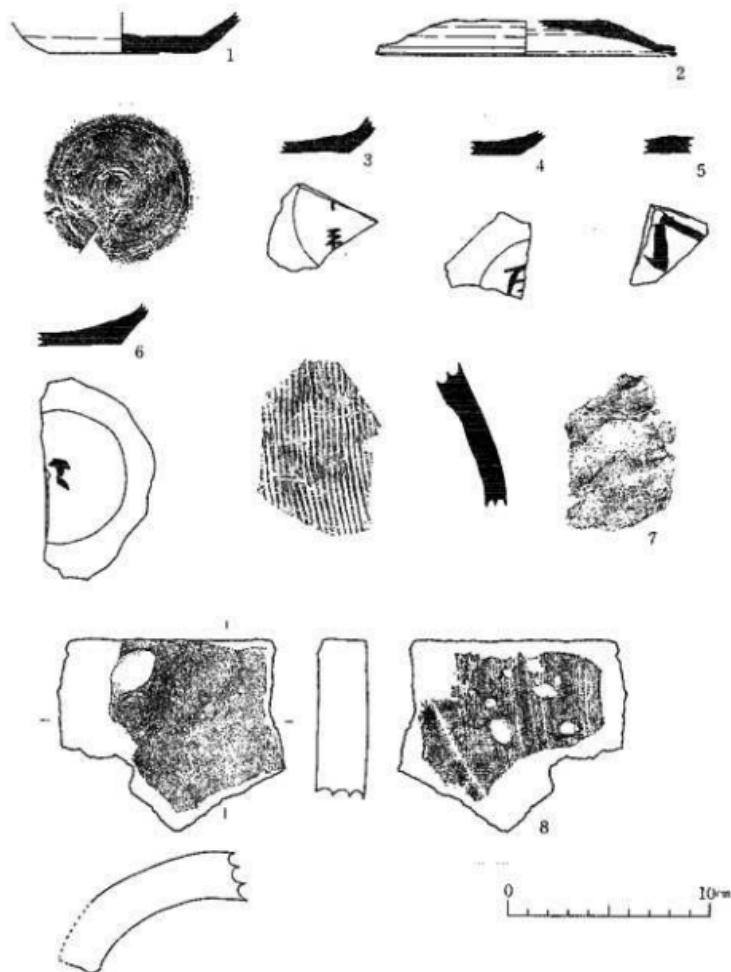
第4節 小 結

1 外郭南門について

第92次調査では、史跡管理団体仙北町による「ふるさと歴史の広場事業」に伴い、外郭南門を含む外郭区画施設を東西約100mにわたって調査した。

外郭南門は第7次調査での認識どおり、建て替えのない、1時期のみの造営である。今回、棟通り中央2本の柱掘形の深さは他の掘形に比べて浅く、柱の遺存状態も良くないことが明らかとなった。この2本の柱掘形が深い傾向や、柱を欠く構造は、政庁及び内郭の東・西・南門に共通する現象である。このことは、この2本の柱は直接に棟を受けて屋根の重量を支えるための柱としては大きな意味を持たないことを意味するのであるまい。門の構造は通常の八脚門とは異なって、二階部分を有する櫓門である可能性が高いと考えられる。

足場組柱穴の深さが浅いことや、SA 1027角材列の布掘り底面が門に近付くにつれてだいに上がっていることは、門の周辺は後世にかなりの削平を受けており、古代においては一段高い地点を選地するか、あるいは基壇を造成していたことも推測される。



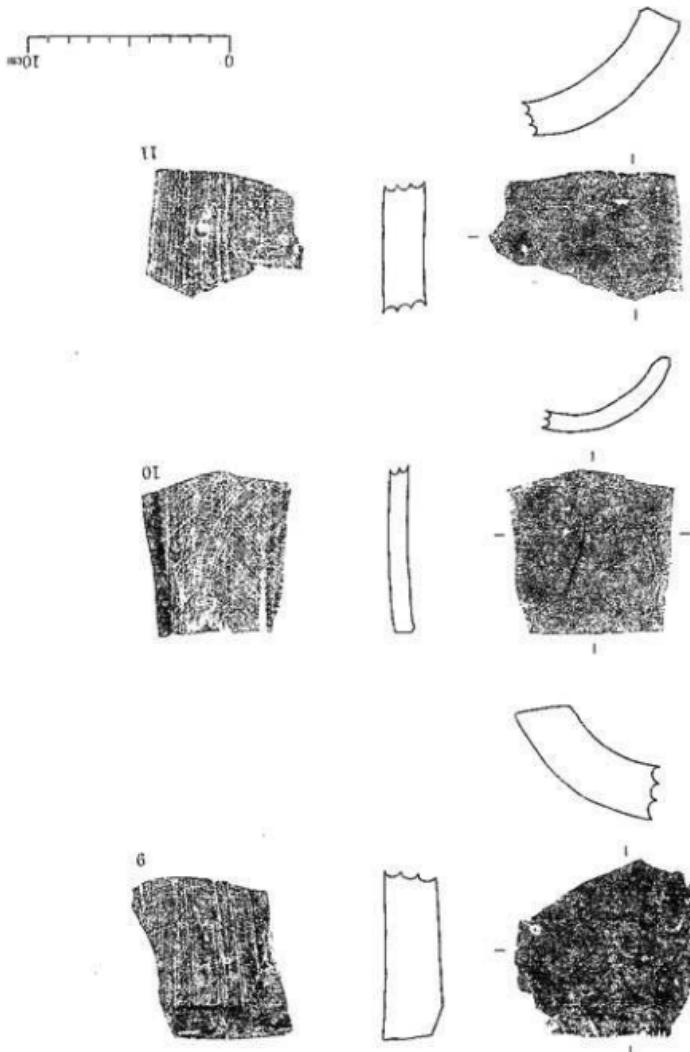
番号	種別	器形	出土地・層位	特徴	径	口径	底面	底径	高さ	外輪	内輪
1	須恵器	杯	E D00-2層	外面：ロクロナデ～凹凸～内面：ロクロナデ	7.4						
2	須恵器	蓋	E C09-2層	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、軸用窓	14.8						
3	須恵器	杯	E C11-1層	外面：底部に墨芯「口平」						28-1	
4	須恵器	杯	E D00-2層	外面：底部に墨芯						28-2	
5	須恵器	糸	E D00-2層	外面：墨芯							
6	須恵器	杯	E D00-2層	外面：底部に墨芯						28-3	
7	須恵器	蓋	E B00-2層								

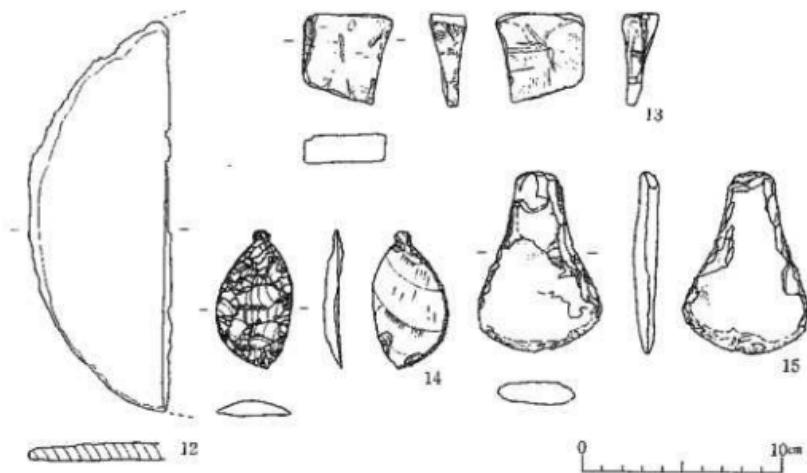
番号	種別	出土地・層位	特徴	径	底面	底径	高さ	内輪
8	丸瓦	D T98-2層	凹面：布目張	2.5			28-4	

第21図 造構外出土遺物（1）

第22圖 地磚外出土遺物(2)

番号	種類	出土地點・標位	特徴	縦	横	高さ	厚さ	年代
11	瓦	E 399-2号	回頭：舟貝瓦					2.1 28-7
10	瓦	E 399-2号	回頭：舟貝瓦					1.0 28-6
9	瓦	E 399-2号	回頭：舟貝瓦				2.8 28-5	





番号	種別	出土地・層位	特	被	大きさ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	回数
12	石器	F G 99-3層					0.9	28-8
13	鉢 石	E C01-2層	四面使用		4.5	1.8	1.4	28-9
14	石 勺	E B 09-1層			7.0	1.0	0.8	28-10
15	石 勺	E C01-2層	両面部削磨		9.0	6.1	1.2	28-11

第23図 遺構外出土遺物（3）

2 外郭線角材列について

外郭線角材列も外郭南門と同様に建て替えは行われていない。外郭線の南側11mまでを調査したが、この間に堀は検出されなかった。また、調査範囲の門の東側18.5m、西側68mの間に櫓は付設されておらず従前の認識どおり、これらは伴わないと見てよい。

外郭線は門を含めて建て替えがなく、存続期間は内郭線に比べて短い。そのことは第88次調査で外郭線東辺の角材列の上に約1mの砂礫層が堆積している事実があり、その堆積年代がS L 1035の川底の砂礫層の堆積年代と符合すると考えられることや、第92次調査のCトレンチにおいて、既に基部のみとなった角材が川底に横倒していたことなどからも裏付けられよう。川底の砂礫層出土土器は回転ヘラ切り技法がほぼ消滅し、須恵器の占める量も少なくなった段階で、大きく見て9世紀末～10世紀前半代と推定される。この頃には既に外郭線は機能していないかったと考えることができる。

外郭南門の両脇の角材と、それより離れた角材では角材一辺の幅に明瞭な違いがある。門東側のS A 1027は平均29.5×24.6cm、西側に連続するS A 1028は28.7×24.8cmであるが、河川跡を挟んだS A 1032は25.8×21cmと一回り小さく、その違いは計測によらずとも明確に知ら

れるほどである。外郭南辺の角材列を広く調査した第30次調査での角材の大きさを見ると、本年調査区の西方にある30-2地点での平均値は 20.8×17.7 cm、さらに西にある30-4地点、30-5地点では、それぞれ 25.4×23.4 cm、 19.8×16.3 cmである。また、外郭東辺での大きさをも上回っている。これらと比較すると外郭南辺では、門の両側の位置は際立って幅の広い角材を使用していることが明らかである。S A1027と1028自体の中では門に近いほど角材が大きくなるというわけではないが、角材の高さも門に近い所は高く、門から離れるに従って低くなる構造となっていた可能性はある。このことは内郭の4門の両側が八の字形に入り込み、左右対称に櫓状建物や柱列が付設されたり、北門を除いて築地土壙より一段と高い位置に造られ、その両側に取り付く角材列や石墨が、門に近付くにつれてせり上がった構造になっていたと考えられて、多分に装飾的効果を持つ構造となっていることにも共通する事象であると考えられる。外郭東門・西門でも角材に同様の現象があるのか、今後検討する必要がある。

角材の地表からの高さ、上部構造、構築方法は依然として不詳である。しかし、角材の底面の高さが一定ではなく、高低差を有し、礎板を重ねる場合があって、1本づつ丁寧に建てたと考えられることや、1930年の調査で内郭線角材列が横倒しとなった状態が検出されていることは、その解明の大きな手掛かりとなろう。この時の報告書によれば、角材列がその内側あるいは外側に倒れた状態が2箇所検出され、その中でも長い角材は12~14尺あり、上方に長さ1尺2寸~1尺6寸、幅3寸~4寸の貫穴を有するものがあることが記されている。角材の底面レベルの調整はこの貫穴に横板を通して、角材の横方向の連結、固定をはかるために貫穴の高さを揃えることを意図したことによるものではなかろうか。

外郭線角材列は昭和初年以降、これまで全て連続する区画施設と考えられて来たが、外郭内を流れる河川に関わって、創建時から作られていない部分があり、この部分には角材列に替わり得る施設の痕跡も見られなかった。河川跡の氾濫時の最大幅は第93次調査で約100mであることが判明したが、角材列が途切れる部分では、創建時の河川の湾曲と最終段階のそれとが一致していることから、外郭線創建時の川幅も最終段階の川幅と大きな違いはない、およそ4~6mほどと推定される。この部分での防御性は弱いと考えられる。

外郭線の南門に近い位置でさえ河川に伴う開口部のあることは、外郭線東部で河川が柵内に流入する箇所と、本年調査区の西方で柵外に流出する箇所においても、同様の状態のあることが予想され、今後、外郭線上のこうした部分の探索が必要である。

西側の開口部については一つの予見を述べておきたい。外郭南辺角材列の確認調査を行った第30次調査によると、外郭南門の88m西の位置（今回調査区西端から20m西）から長さ32mにわたって角材列が確認されていない。また同じく外郭南門の西155mの位置（今回調査区の西端から87m西）から長さ44mにわたって同様の結果である。耕地整理前の様子を描いた『耕地

整理規形図』では、後者の間に北東から南西に流れる細い水路が描かれている。あるいはこの間が角材列の開口部となっているのかも知れない。

城柵官衙遺跡における外郭線の機能として、一定の地域を区画して特定の地点以外からの出入りを規制し、外観をより威厳あるものにして、防備に十分機能するための必要条件を備えたものとされる。払田柵の外郭線にはこのように当初から門以外の開口部があり、櫓・堀も伴わぬことは、防御的機能はさほど重視されていないと言えよう。外郭線が短期間で消滅することも、このことと軌を一にする現象であろう。

乍輪年代測定の結果、角材は西暦800年、801年の伐採であることが判明した。これは1987年の外郭線東部を対象とした第73次調査で得られた西暦801年という測定結果に合致する。^(註4) 外郭線が9世紀初頭の創建であることは外郭線南辺でも追認されることになる。

- 註1 文部省『史蹟精査報告 第三 払田柵跡・城輪柵跡』1938(昭和13)年
- 註2 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1975 扉田柵跡－昭和50年度発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第40集 1976(昭和51)年
- 註3 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1976 扉田柵跡－第9・10次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第44集 1977(昭和52)年
- 註4 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1979 扉田柵跡－第23～30次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第75集 1980(昭和55)年
- 註5 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1985 扉田柵跡－第60～64次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第139集 1986(昭和61)年
- 註6 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1986 扉田柵跡－第65～67次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第154集 1986(昭和62)年
- 註7 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1990 扉田柵跡－第84～87次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第216集 1991(平成3)年
- 註8 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡I－政府跡－』秋田県文化財調査報告書第122集 1985(昭和60)年
- 註9 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1987 扉田柵跡－第68～73次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第168集 1988(昭和63)年
- 註10 秋田県教育委員会・払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1984 扉田柵跡－第55～59次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第121集 1985(昭和60)年
- 註11 仙北町教育委員会所蔵
- 註12 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1991 扉田柵跡－第88～91次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第225集 1992(平成4)年
- 註13 註1に同じ
- 註14 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1988 扉田柵跡－第74～78次発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第185集 1989(平成元)年

第4章 第93次調査

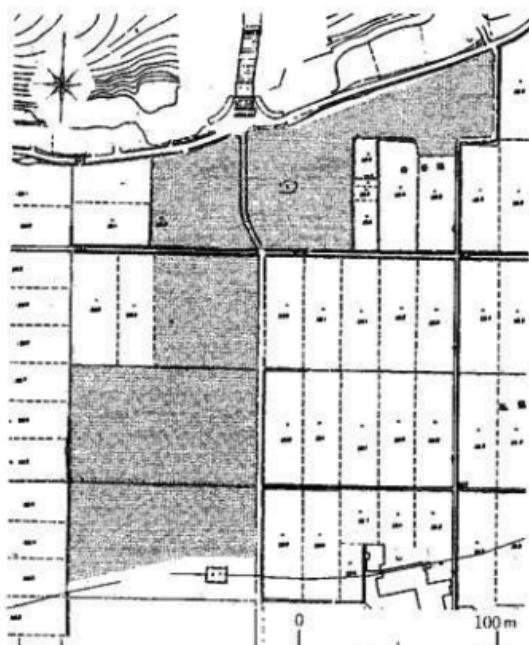
第1節 調査経過

仙北町では平成3年度から史跡等活用特別事業による払田柵跡の整備を開始し、ガイダンス施設とそれに伴う駐車場の建設などを実施した。次いで、今年度はそれらの範囲を除く20,772m²を対象として、遺構保護を目的とした盛土造成工事を計画した。この工事を理由とした現状変更許可申請書が6月3日、仙北町から提出され、申請書は秋田県教育委員会を経由して文化庁へ進達された。また、この区域では外郭南門と内郭南門を結ぶ大路の復原、その両側の張芝、植栽なども計画している。

当事務所では、これら工事の実施に先立ち、大路の検出と遺構の存在確認を目的とする調査を第93次調査として今年度の調査計画に組み入れ、発掘調査を実施したのである。

7月3日、第92次調査の補足調査と並行して調査を開始。7日からは重機を用いてトレンチ内の表土除去を始め、南側のトレンチから掘り下げを行った。土坑からは木製品や墨書き器が出上した。その後、各トレンチで河川跡の検出や、遺構の有無の確認に努めた。7月20日、表土除去終了。7月30日、奈良国立文化財研究所光谷拓実主任研究官より、外郭線角材列の中から年輪年代測定試料6点を採取していただいた。

F Nライントレンチの東半部では全く遺物が出土しなかったが、西半部では包含層があり、8月3日、土坑も検出された。18日には第35回顧問会議を開催し、調査・研究の顧問である秋田大学新野直吉学長、国立歴史民俗博物館考古研究部長岡田茂弘教授に対し、第92・93次調査



第24図 第93次調査位置図

の概要を説明するとともに現地で御指導いただいた。8月22日には第92次調査の現地説明会を実施した。8月24日～26日にかけて、外郭南門の埋め戻し作業を行った。

9月2日、S L1035河川跡の川幅を特定すべく、北岸を探るためのトレントを入れた結果、約100mの幅があることがわかった。翌3日には河川底部の砂礫層中から「小勝」と書かれた墨書き土器が出土。また、別地点から第1号漆紙文書も出土した。4日、北岸を探る作業中、河川内から10本の柱を検出、外郭南門と内郭南門を結ぶ線上にあることから、橋脚と推定された。そこで、外郭南門の北方に河川の南岸を探るために、同様に深掘りをして南岸を確認したが、ここでは橋脚は検出されなかった。11日、S B1048掘立柱建物跡を検出。この後、内郭南門南側のトレントの掘り下げを行った。トレント全体に遺物包含層や火山灰層の薄い堆積があるが人路の側溝は見当たらなかった。6日、橋脚のうち最も南端にある柱を断ち割り、写真撮影、実測後に抜き上げを行った。その後、トレントの土層断面図作成などを行って、資材の撤収作業を完了したのは10月20日である。

第2節 検出遺構 (第3図)

調査区は第92次調査の北に連なる標高33mの休耕田である。外郭南門と内郭南門を結ぶ大路の検出が本調査の主たる目的であるが、第92次調査において河川跡が検出され、大路には橋の存在が予想された。そこで、この河川跡の流路と幅員の把握と橋の検出も調査目的に加え、トレント方式によって南から北へ調査を進めた。

調査の結果、掘立柱建物跡1、橋脚1、河川跡1、溝4、土坑8、その他の遺構3の計18遺構を検出した。

1 土層概説 (第25図)

E Hライントレンチ：外郭南門の北にあり、中央部が第7次調査で調査されていて、嘉祥二年の年記ある木簡を出土したSK60土坑などがある。今回もSK1033・1034土坑が検出された。東部では地山粘土層の上に黒色の遺物包含層があって土器が出土した。SK60七坑より西では地山粘土層が次第に下がり、スクモ層や砂層が互層となっていて、縄文土器・石器が出土し、無遺物層が介在して古代の遺物包含層はその上にある。古代以前から湿地状の窪地となっていたのであろう。古代の包含層からは須恵器や瓦が出土した。

E Lライントレンチ：このトレントも第7次調査で中央部が調査されている。東端部にSD1039があり、その西には自然の浅い落ち込みがある。西方の10～12ライン付近には火山灰や炭化物が広く分布し、これらに伴う形で土器が比較的多く出土した。これより西はS L1035河川

跡の範囲内にあり、河川内に土砂が堆積した後に浅い溝となっていたと考えられる。

G J ライントレンチ；SL1035河川跡の北にあり、耕作土の下は黒褐色、暗褐色の極めて粘性の強い粘土が水平に堆積し、遺物はほとんど出土しない。トレント西半部は宅地で、厚さ40cmの盛土がなされている。黒色土中から上器が少量出土したが、遺構は検出されなかった。

H C ライントレンチ：トレント西部に掘立柱建物跡や溝が検出されたが、中央部から東側にかけては遺物は出土するものの、遺構の検出はなかった。表土を除き、全体に極めて粘性の強い粘土が水平に堆積する。遺物包含層はオリーブ黒色土で厚さ10~20cmあり、この中に厚さ2~3cmの火山灰を挟む。これより下位は灰色やオリーブ黒色の粘土で、遺物は出土しない。トレント西端部で漆紙文書が出土したのもこの遺物包含層からである。西側は旧宅地のため、厚さ30~60cmの盛土がなされている。

H K ライントレンチ：全体に黒色土や褐色土が水平な堆積を示すが、墓地との関係からか一部に近年の掘り込みがある。東端部では畑に最大60cm盛土がなされている。古代の遺物包含層は厚さ10~40cmで、全体に存在するが、西部では遺物はほとんど出土しない。火山灰はごく一部に厚さ5cmほどに堆積が見られる。最下層は繩文土器を含む黒色土で、殊にトレント東部から繩文土器が出土する。SK1052もこの時代の遺構であろう。

F N ライントレンチ：このトレントは大路の他の遺構確認を目的として西へ長く設定し、西方では耕作土のすぐ下から上坑やその他の遺構を検出し、遺物も出土したが、東半部では遺構はなく、遺物もほとんど出土しなかった。後にSL1035河川跡の北岸を探るために深掘りを行ったところ、トレント中央部で北岸を検出し、それ以来は河川跡の中に入っていることがわかった。河川跡は深さが水田面から2.5~2.9mあり、川底の砂礫層は最も厚い所で約1mである。砂礫層は一様ではなく、砂混じり粘土層が最下層の堆積層となっている部分もある。その上に砂層・粘土層があり、粘土層の中に厚さ2~3cmの火山灰層が水平に堆積している。

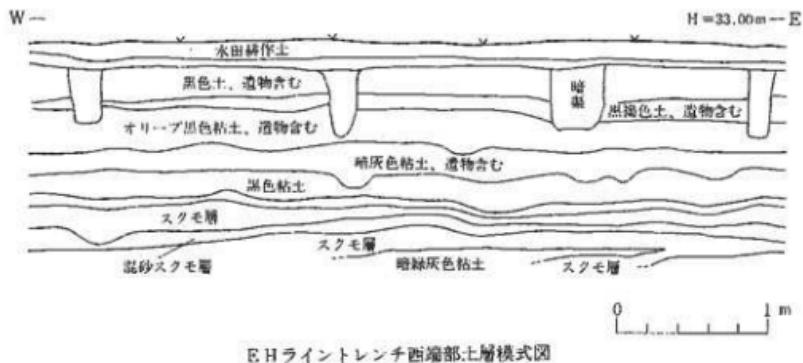
20ライントレンチ：SL1035の北岸を探るため、南北方向に設定したトレントである。水田面から川底まで2.6mの深さがある。川底はほぼ平坦であるが、その上に堆積する砂礫層・砂層・粘土層は起伏が大きく、砂礫層の厚さは10~80cmにわたる変異がある。火山灰層は上にトレントの南部において水流によって砂と細かい層理をなす。最終段階の河川跡は幅7mあり、その上にも青灰色粘土が10~60cmの厚さにかぶさっている。

2 遺構と遺物

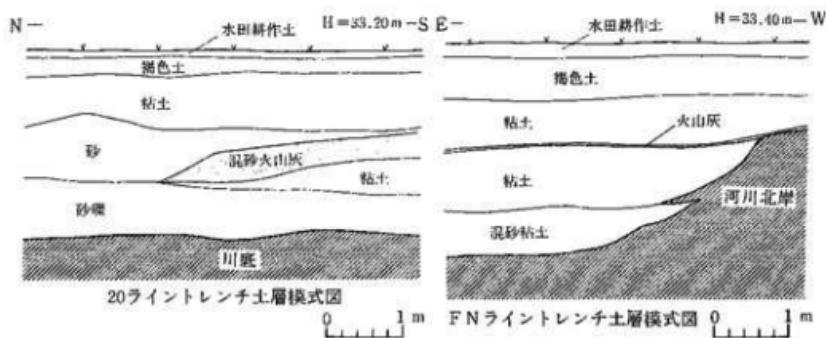
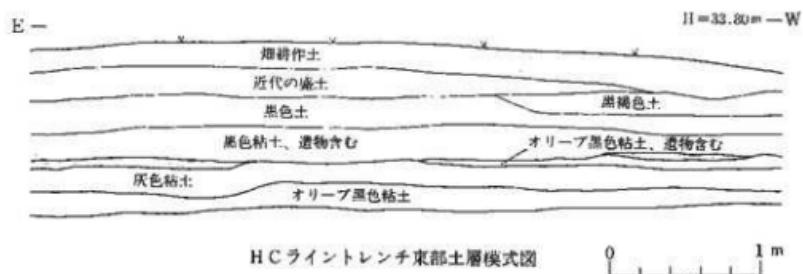
(1) 掘立柱建物跡 (第26図、図版16・17)

① SB1048

東西2間、南北2間以上の掘立柱式建物で、建物の北側はトレント外へ延びている。柱掘形



E-H Line Soil Profile Diagram (West to East)



第25図 土層模式図

は長軸80～100cm、短軸60cmほどの梢円形を呈し、深さ80cm、検出した掘形の全てに直径20～25cmの丸柱が残る。東側の南から2番目の柱は下部に目渡孔があり、柱の下に厚さ3cmほどの礎板を置く。東西方向の総長は5.30m（東から2.55+2.75）で、南北方向の柱間は2.60mである。建物方位は南側柱列で見ると、調査南北基準線に対しN84°Eである。述べ替へはない。建物の南東隅柱は、内郭南門と外郭南門とを結ぶ中軸線より約7.6m西に位置する。建物の東西両側に火山灰が厚さ2cmほど堆積しているが、建物との新旧関係は必ずしも定かでない。しかし、火山灰降下よりも古いSK1050の埋土と本遺物の柱掘形の埋土はほとんど同一であるので、本遺構もSK1050同様に火山灰降下より古い時期の構築かと推定される。建物の西に梢円形の掘形を有する柱が2本あるが、この建物との関係は不明である。柱掘形から遺物は出土しなかった。

（2） 橋 脚

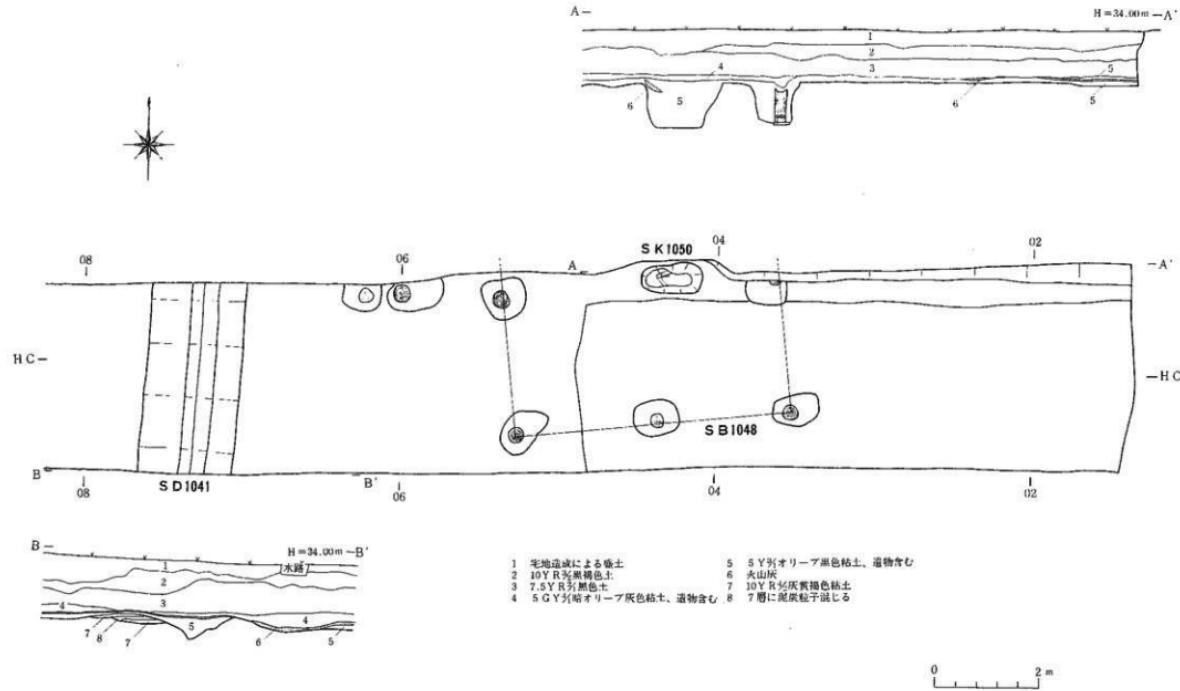
① SK1049（第27図、巻首図版10、図版18～20）

東西方向に設定したFNライントレンチで、SL1035河川跡の北岸を探るために重機で深掘りをしたところ、河川敷内に立つ10本の柱を検出した。直径50cmほどの太さの柱が4本あり、東西3.3m、南北7mの間隔に並び、他に、直径25～30cmほどの丸柱や角柱が6本ある。細めの丸柱と角柱は杭ではなく、その下端も砂利層の上で止まっている。南端にある直径50cmの柱は、残存長2.5mのスギの杭で、川底の粘土層に約1m打ち込んでおり、わずかに東に傾いている。河川の上層は下から川底の砂礫層、砂層、粘土層で杭の上方に火山灰を含む粘土層がある。杭の掘形はなく、これらの土層は杭を打ち込んだ後に河川の流れによって堆積したものである。砂礫層からは他のトレンチと同様の時期の土器が出上する。これらの柱の位置は、外郭南門と内郭南門を結ぶ線上にあることから、大路は直線で、それに伴う橋脚と考えられる。橋桁・梁・橋板などの部材は出土していない。精査は平成5年度に行う予定である。

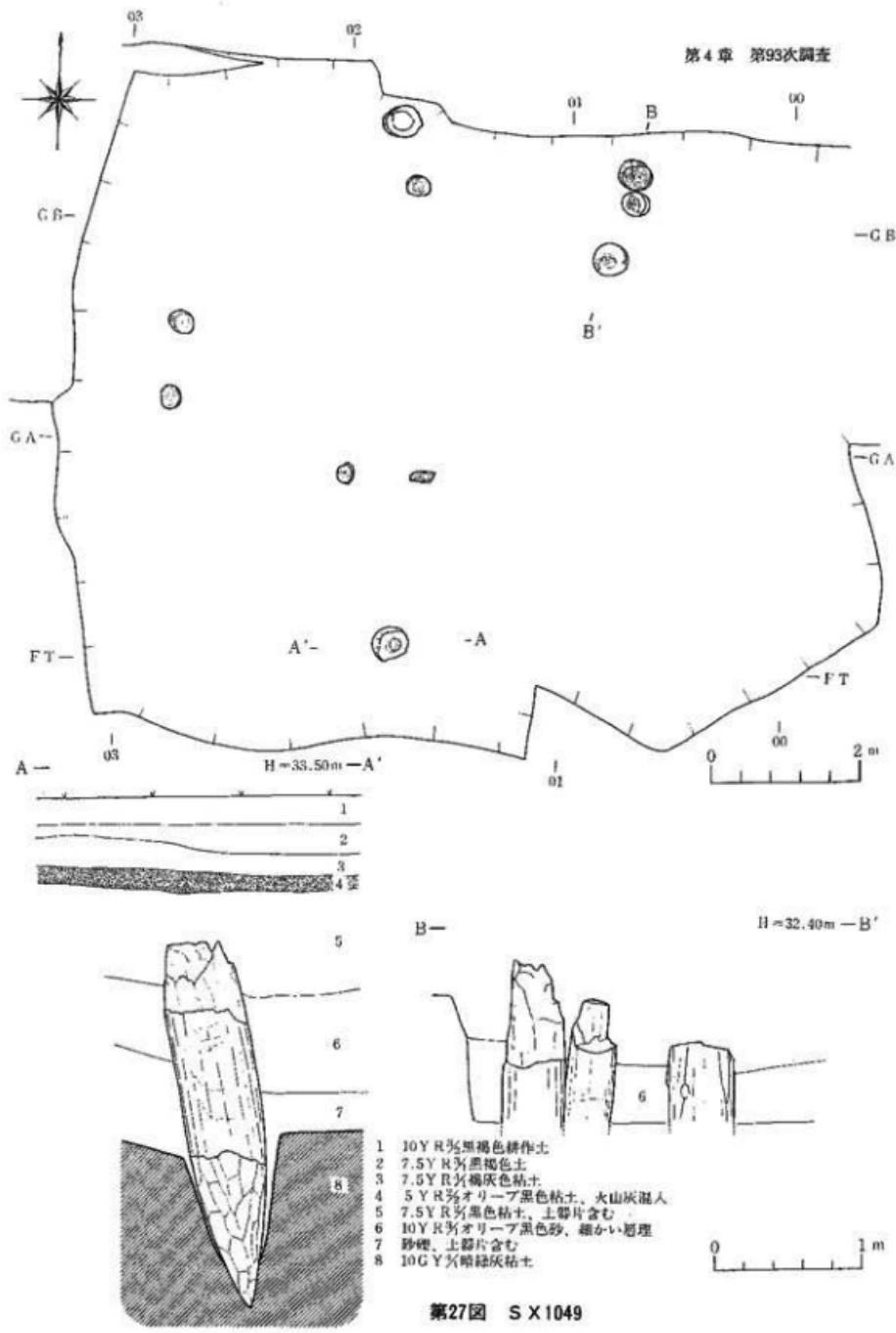
（3） 河川跡

① SL1035（第3・25・28～34図、図版15・29～31）

第92次調査で、その南岸の一部を検出した河川跡の幅員を探ることを目的に、重機を用いて深掘りを行った。方法はユンボによって川底の粘土層まで下げ、砂礫層の分布を追跡し、砂礫が消える所を川岸とした。砂礫層中には遺物が多く含まれるので可能な限り採集に努め、必要に応じて土層断面図を作成した。その結果、南北方向に設定した20ライントレンチでその北端に、東西方向のFNライントレンチでその西端に、さらにGAライントレンチとGIライントレンチの中間に河川の北岸を検出し、河川敷の南北幅は最大100mあることが判明した。



第26図 SB 1048、SK 1050、SD 1041



第27図 S X 1049

20ライントレンチでは、川底まで現水田面から2.60mあり、川底の砂礫層は厚さ80cmに達する。その上に堆積する砂層の中に火山灰と砂が交互に細かい層理をなして最大約40cmの厚さに挟在する箇所がある。火山灰降下時の川の流れを示すものであろう。トレント北端に東西に流れる最終段階の河川跡があり、幅6.9mある。この最終段階の河川跡の上面から川底まで1.8mある。FNライントレンチでは、川底まで現水田面から2.5~2.9mあり、砂礫層は最も厚い所で1mの層厚がある。川底から1.5m上位の粘土質土層中に厚さ2~3cmの火山灰層が水平に堆積している。この他のトレント内に検出した最終段階の河川跡は幅4.5~7mほどで最大幅100mの河川敷内を大きく蛇行しながら東から西へ流下する。

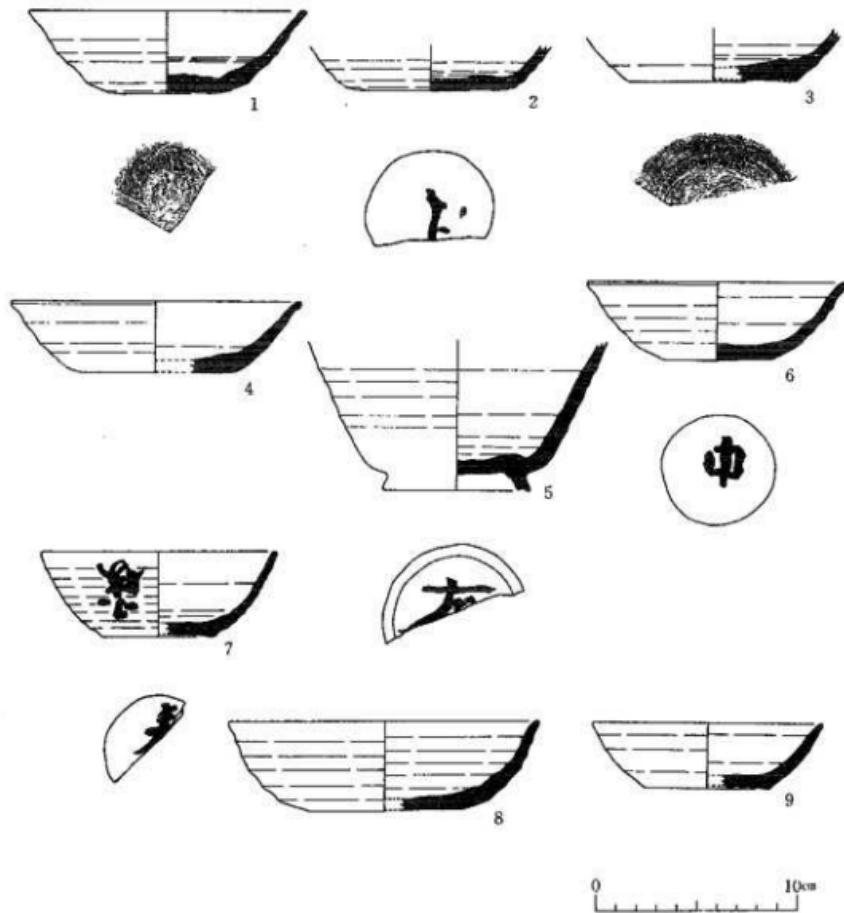
外郭線角材列が途切れる部分においては、その創建時に存在した南岸部分に重なる形で最終段階の河川が流れしており、このことから、創建時に存在した川幅も最終段階の川幅とほぼ同規模で、同じように緩やかに大きくなっていると推定される。

遺物は砂礫層中から出土した（第28~34図）。火山灰層はこの砂礫層の上にある砂層や粘土層に挟在するので、遺物はすべて火山灰降下前の年代を示す。1~19は須恵器杯で、5は高台が付く。このうち1~5までは底部切り離しが回転ヘラ切りである。他は回転糸切り痕りによる。2・5~7・16~19は墨書き器で、5は「友」か。6は「中」、7は体部に「小勝」、底部にも墨書きがある。16~19は不明である。19は内面に書かれる。須恵器杯で回転ヘラ切り痕が明らかなものは、他に小破片が4点あるにすぎない。須恵器の破片では長頸壺の頸部、肩部、甕胴部がある。20~23は底部切り離しが回転糸切りによる土師器で、内面に黒色処理を施す。20・21の底部周縁には手持ちヘラケズリによる再調整を施す。24~44は底部切り離しがすべて回転糸切りによる土師器である。体部はやや丸みを帯びるか直線的となる。39は口縁部が大きく外反する特徴がある。41~44は体部に墨書きがあり、41は「力□」42は「□」、43は「肩」、44は則天文字の影響による特殊文字「丸」^(注1)か。45はカマド用支脚である。破片では内面に黒色処理を施した高台付杯、甕口縁部、丸底でタタキメのある底部がある。46~50は斎串で、50の両側縁には等間隔の刻みがある。51は串である。他に檜扇（52・53）、木鉤（54）、えぶり（54）、曲物の瓶（55）が出土した。

（4） 土 坑

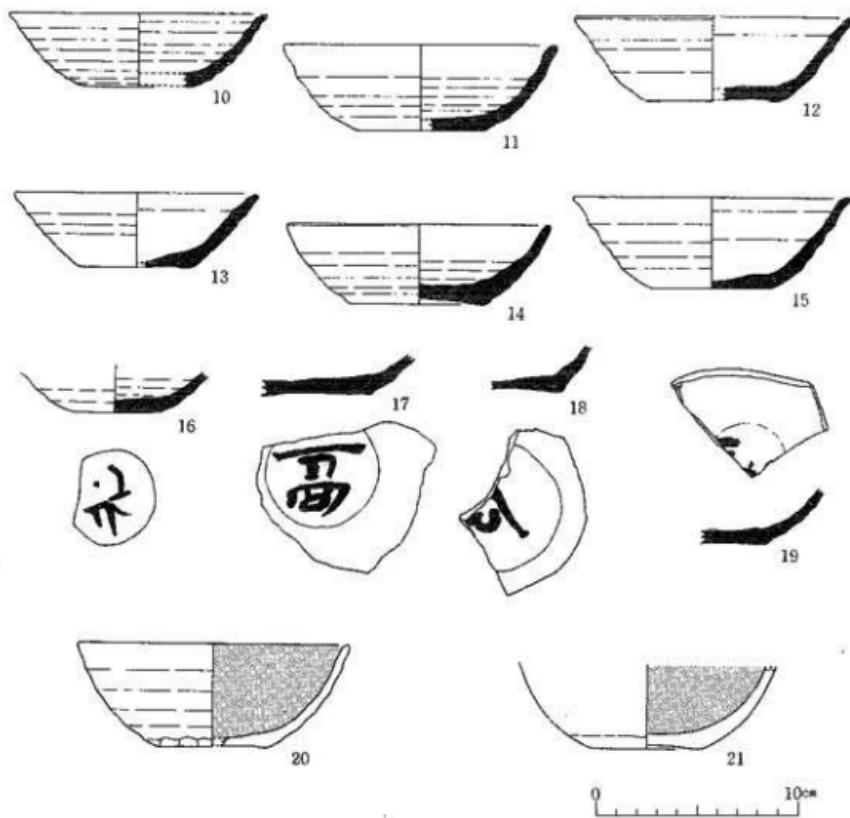
① SK1033（第35~38図、図版21・33）

EG98・99グリッドにあり、長軸1.85m、短軸1.55mの梢円形で、深さ約20cm、底面は平坦である。東端の坑底に須恵器長頸壺が置かれ、その西側に直径3~5cmの杭が南北に3本並んで打ち込まれていた。埋土中から、須恵器杯、斎串・箸・曲物蓋・曲物の樟皮紐・曲物側板の断片・削屑などの木製品が混然となって出土した。



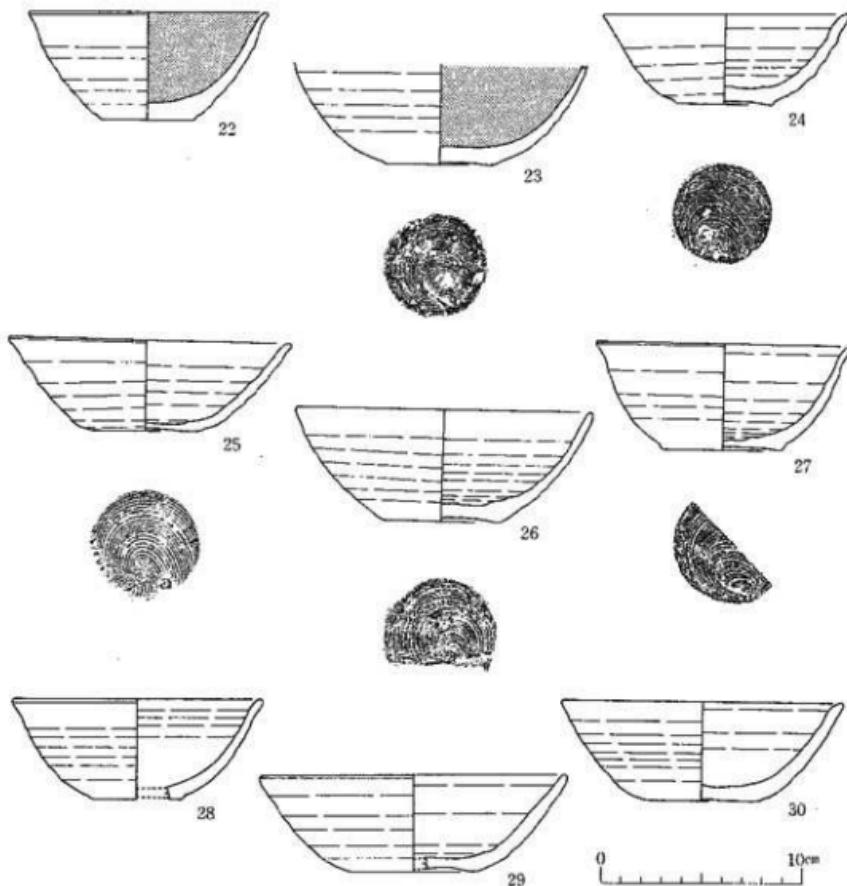
番号	種別	器形	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底形 形状	高径 比	外輪 厚	内輪 厚
1	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→脚軸へラ切り 内側：ロクロナデ	13.8	5.0	4.1	0.36	30.0	37°	
2	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→脚軸へラ切り、底部に墨書き「口」 内側：ロクロナデ		6.4					
3	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→脚軸へラ切り 内側：ロクロナデ		8.4					
4	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→脚軸へラ切り 内側：ロクロナデ	14.4	7.6	3.6	0.53	25.0	36°	
5	須恵器	鉢	外側：ロクロナデ、底部に墨書き「丸」 内側：ロクロナデ	17.2	7.4	3.6	0.5	29.7	29° - 1	
6	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→脚軸へラ切り、底部に墨書き「中」 内側：ロクロナデ、使用痕	12.8	5.6	3.9	0.44	30.5	35°	29° - 2
7	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→脚軸へラ切り、底部墨書き「小」 内側：ロクロナデ	11.8	5.6	4.2	0.48	35.6	26°	29° - 3
8	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→脚軸へラ切り 内側：ロクロナデ	15.4	7.6	4.5	0.49	29.2	26°	
9	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→脚軸へラ切り 内側：ロクロナデ	11.4	6.2	3.3	0.54	28.9	29°	

第28図 S L1035砂砾層出土遺物（1）



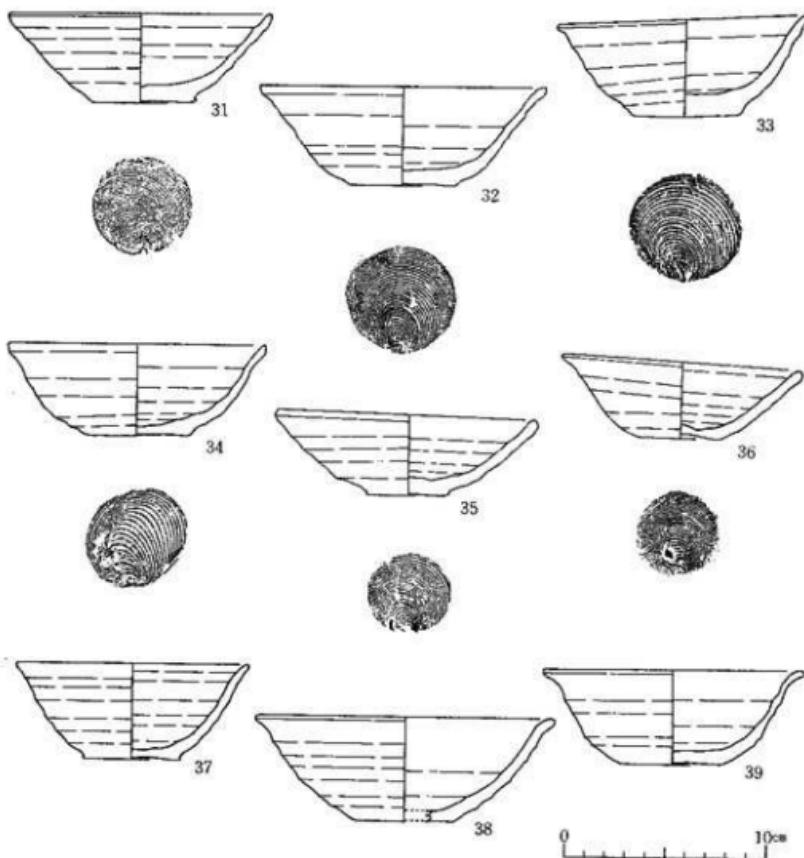
番号	種別	器形	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径 指数	外輪 厚	基盤
10	瓶	壺	外面: ロクロナデ→凹輪条切り 内面: ロクロナデ	12.8	5.2	3.7	0.41	28.9	40°
11	瓶	壺	外面: ロクロナデ→凹輪条切り 内面: ロクロナデ	13.6	6.4	4.3	0.47	31.6	30°
12	瓶	壺	外面: ロクロナデ→凹輪条切り 内面: ロクロナデ	13.8	6.6	4.2	0.48	30.4	33°
13	瓶	壺	外面: ロクロナデ→凹輪へう切り 内面: ロクロナデ	10.0	5.4	3.7	0.54	37.0	37°
14	瓶	壺	外面: ロクロナデ→凹輪条切り 内面: ロクロナデ	13.0	6.4	4.0	0.49	30.8	28°
15	瓶	壺	外面: ロクロナデ→凹輪条切り 内面: ロクロナデ	13.8	6.0	4.5	0.43	33.0	34°
16	須恵器	杯	外面: 瓢部に墨書き「丁」						29- 4
17	須恵器	杯	外面: 瓢部に墨書き「丁」						29- 5
18	須恵器	杯	外面: 瓢部に墨書き「丁」						29- 6
19	須恵器	杯	内面: 瓢部に墨書き「丁」						29- 7
20	土師器	杯	外面: ニロナデ→凹輪条切り・手押らヘラケズリ 内面: 黑色施墨	13.4	5.6	4.2	0.42	31.3	
21	土師器	杯	外面: ニロナデ→凹輪条切り・手押らヘラケズリ 内面: 黑色施墨			5.0			

第29図 S L1035砂疊層出土遺物（2）



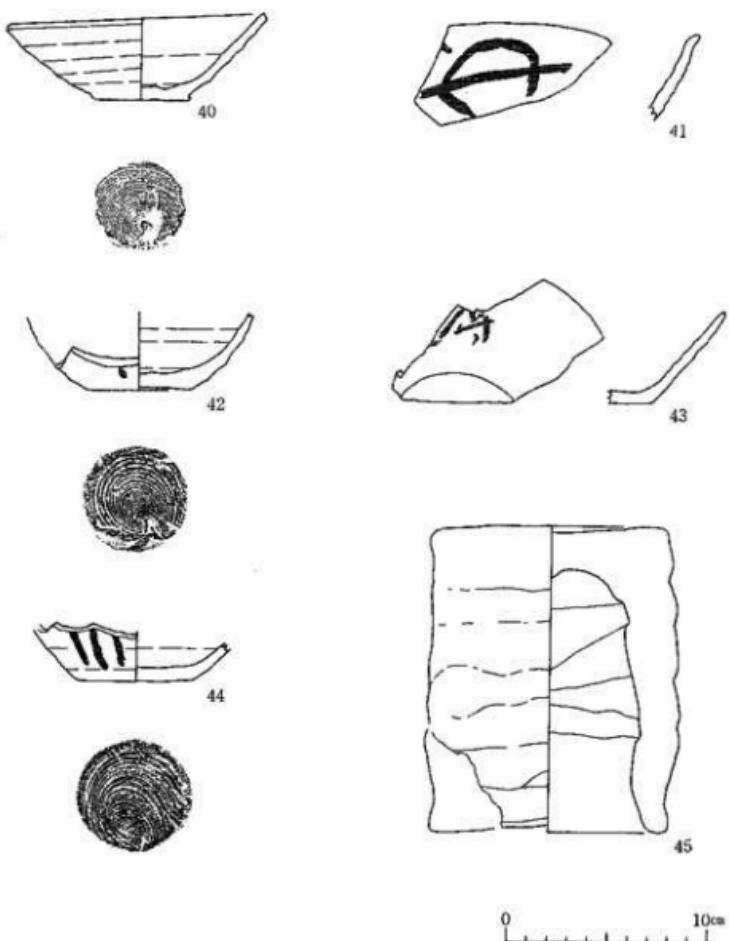
番号	種別	器種	特　　徴	口徑 (cm)	底径 (cm)	脚高 (cm)	底盤 指数	高脚 指数	外脚 度	内　　版
22	上脚器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：黒色処理	12.0	4.8	5.4	0.40	45.0	27°	
23	土師器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：黒色処理			5.4				
24	土頭器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.3	4.8	4.6	0.39	37.4	32°	29-8
25	土頭器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	14.1	5.6	4.6	0.46	32.5	35°	30-1
26	土頭器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	14.8	5.8	5.6	0.39	37.8	31°	30-2
27	上脚器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.8	6.0	5.3	0.47	41.4	24°	
28	土頭器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.6	4.6	5.0	0.37	39.7	28°	
29	土頭器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	15.2	6.2	4.8	0.41	31.6	31°	
30	土頭器	杯	外曲：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	14.0	6.0	4.9	0.43	35.0	30°	

第30図 S L 1035砂礫層出土遺物（3）



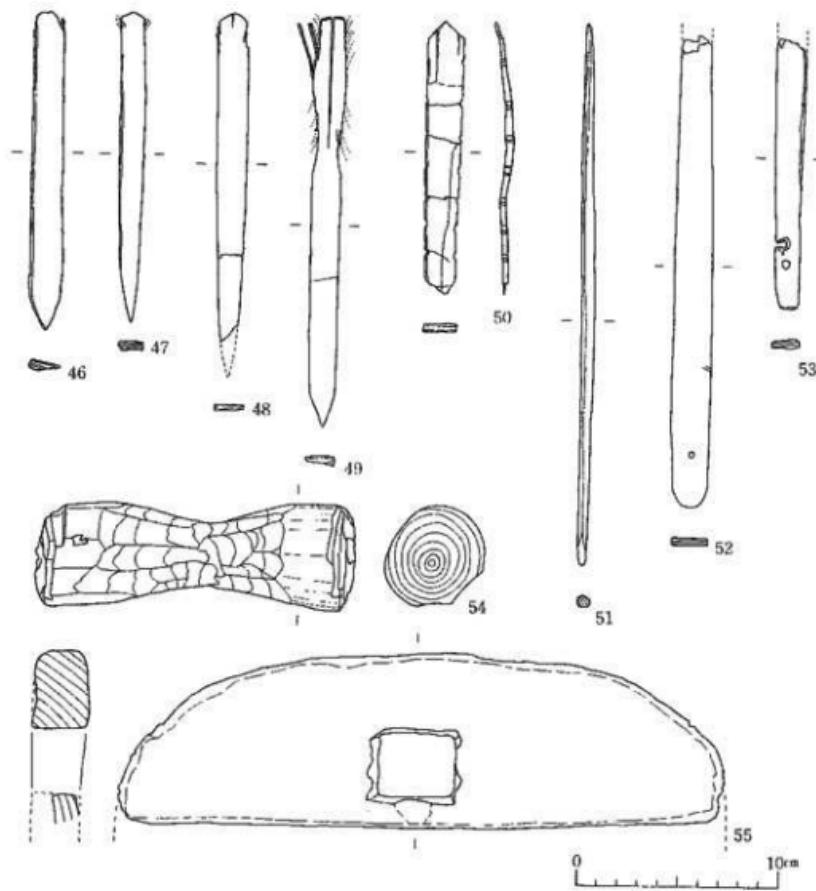
番号	種別	器形	特徴	外径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底面 指数	底面 指數	外側 底面	内側 底面
31	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	13.0	5.3	4.5	0.41	34.6	39°	
32	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	14.2	5.2	4.9	0.37	34.5	35°	30°-3
33	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	12.6	5.2	5.2	0.41	28°	30°-4	
34	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	12.8	4.9	4.6	0.38	35.9	29°	
35	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	13.0	4.0	4.3	0.31	33.1	39°	
36	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	12.0	4.0	4.1	0.33	34.2	36°	30°-5
37	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	11.6	4.8	4.8	0.41	41.4	31°	
38	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	15.0	5.0	5.2	0.33	34.7	37°	
39	土師器	杯	外面: ロクロナデ→回転糸切り 内面: ロクロナデ	13.0	5.0	4.7	0.39	36.2	32°	

第31図 S.L. 1035砂礫層出土遺物(4)



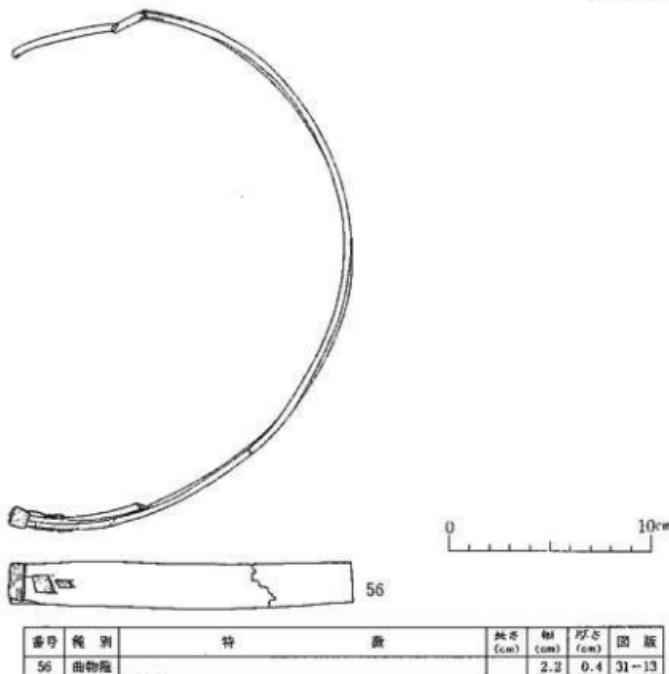
番号	種別	器形	特 著 査	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径 倍数	高径 倍数	外輪 底	内 輪
40	土師器	杯	外面：ロクロナデ→圓輪条切り 内面：ロクロナデ	13.0	4.6	4.4	0.35	33.8	39°	30-6
41	土師器	杯	外面：墨青「か」							30-7
42	土師器	杯	外面：ロクロナデ 壁底各切り、底部に墨青「口」 内面：ロクロナデ		5.2					
43	土師器	杯	外面：体部に墨青「絞」							30-8
44	土師器	杯	外面：ロクロナデ→圓輪条切り、各面に墨青「舟」カ 内面：ロクロナデ		5.5					31-1
45	瓦	瓦	粘土細巻き上げにより成形	11.8	11.7	15.3				31-2

第32図 S L. 1035砂疊層出土遺物（5）



番号	種別	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図版
46	箸串		15.3	1.5	0.5	31-3
47	箸串		15.3	0.7	0.5	31-4
48	箸串			1.5	0.3	31-5
49	箸串		20.4		0.4	31-6
50	箸串	両側面に刻みあり				31-7
51	串		27.0	0.8	0.8	
52	栓					
53	栓	肩 2孔あり				
54	木 縄		15.6	5.3		31-11
55	えぐり					31-12

第33図 S L 1035砂岩層出土遺物 (6)

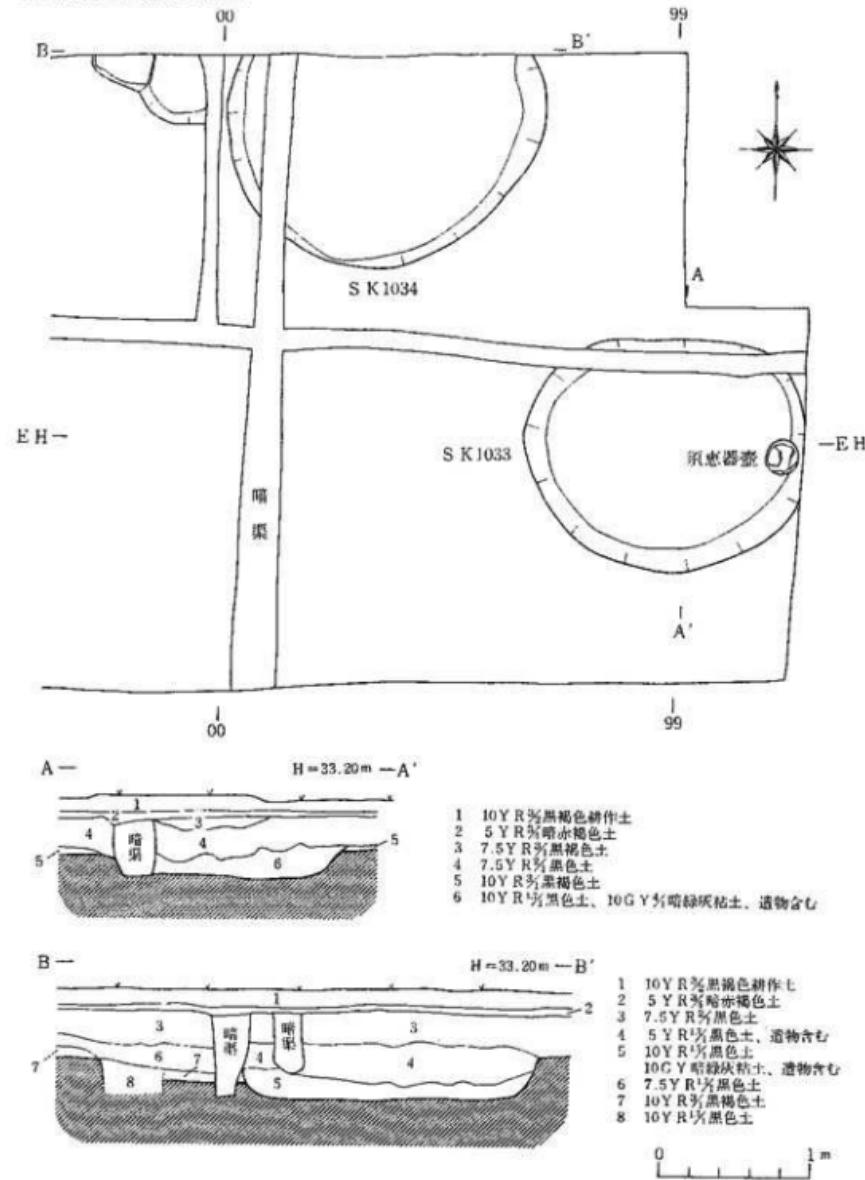


第34図 S L 1035砂疊層出土遺物（7）

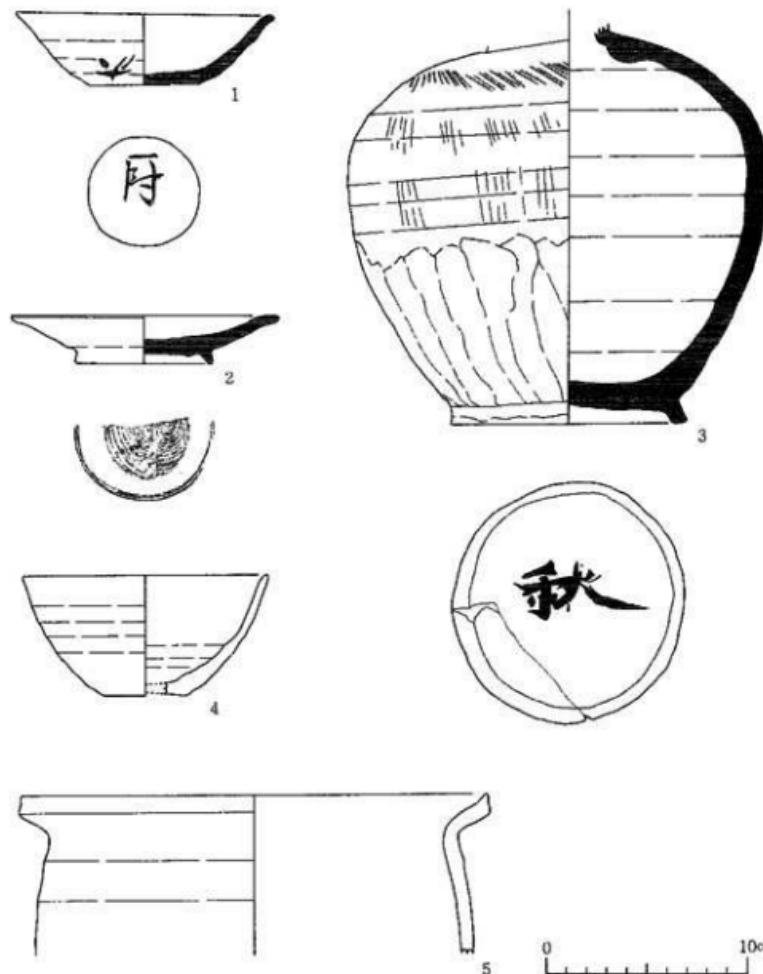
第36図1は須恵器杯で、底面に「厨」の墨書があるほか体部にも見られる。2は高台付皿で、内面を倪に転用している。3は土坑東端にあった長頸壺で、口頸部を欠くが、接合は二段成形であろう。底面に「秋」の墨書がある。4は土師器杯、5は土師器壺である。他に破片資料として須恵器では蓋・甕、土師器では内面黒色処理を施した皿・内外両面にタタキメのある壺が出土した。木製品では箸（第37図6・7）、斎串（8）、串（9～12）があり、13は先端が切っ先状に尖っていて刀形であろうか。14の木錘は縦に割れた材を利用している。山物蓋（第38図15）、曲物底板（16）、挽物皿（17）も出土した。これらの他、曲物の檜皮紐（図版33-5）、削屑（図版33-6）、曲物側板の断片（図版33-7）、両端を切断した板（図版33-8）などが出士した。

② SK 1034

SK 1033の北西に隣接する土坑で、最大径2.1mの円形を呈し、深さは35cmである。底面は平坦で、埋土中から須恵器杯や木製品が出土した。土器では須恵器杯（第39図1）、土師器杯（2）のほか、破片として須恵器杯・蓋・甕、土師器では内面黒色処理の施された杯・内外両面にタタキメのある壺底部、凸面に格子叩き目のある平瓦が出土した。須恵器杯の破片はSK

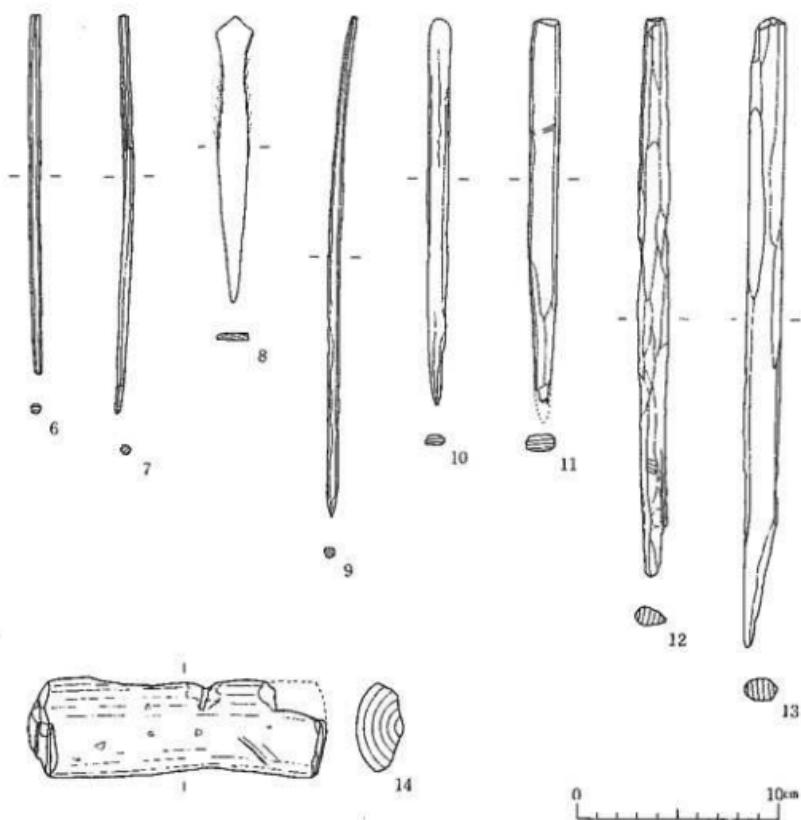


第35図 SK 1033・1034



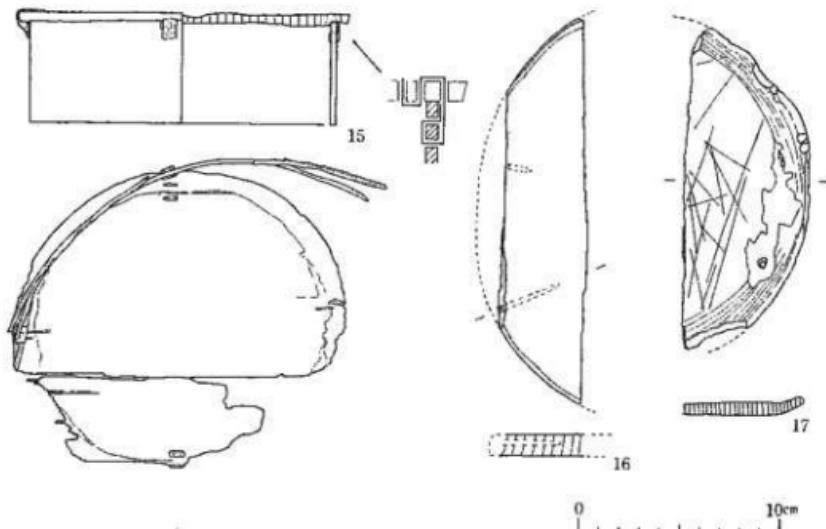
番号	種別	器形	特徴	寸法 (cm)	底径 (cm)	腹高 (cm)	底径 倍数	高径 倍数	外側 角度	図版
1	須志器	杯	外面：ロクロナデ→細軋毛切り、裏面あり鉢形〔側〕、底部口内面：ロクロナデ	12.8	5.4	3.7	0.42	28.9	38°	32-1
2	須志器	副付器	外面：ロクロナデ→細軋毛切り、底 内面：ロクロナデ、墨	13.4		2.4		18.0	60°	
3	須志器	長颈壺	外面：タガキ→ロクロナデ→ヘラケイテ、底部に茎痕〔側〕内面：ロクロナデ							32-2
4	土師器	杯	外面：ロクロナデ→細軋毛切り、内面：ロクロナデ	12.2	4.0	6.0	0.33	49.2	25°	
5	土師器	壺	ロクロナデ	23.4						

第36図 SK 1033出土遺物（1）



番号	種別	特 徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	回 数
6	箭		17.9	0.6	0.5	
7	箭		19.8	0.5	0.5	
8	矛 甲		14.3	1.8	0.4	32-3
9	矛		25.0	0.5	0.5	
10	矛		19.3	1.0	0.5	
11	矛				1.5	0.8
12	矛		27.8	1.6	0.9	
13	刀形?		31.4	1.7	1.1	
14	木 鉄	継に割れた材を使用	14.7	5.0	2.3	33-1

第37図 SK1033出土遺物（2）



第38図 SK 1033出土遺物（3）

1033出土の「厨」銘墨書のある土器に接合した。木製品としては斎串（3・4）、箸（5～7）の他、箸（図版34-3・4）、削屑（図版34-5）、曲物側板の断片が出土した。曲物の蓋板がSK 1033出土上の曲物蓋に接合した。両土坑は同時に作られたもので、遺物内容や出土状態も近似することから、同一の性格の遺構と考えられる。

③ SK 1038（図版40・41図）

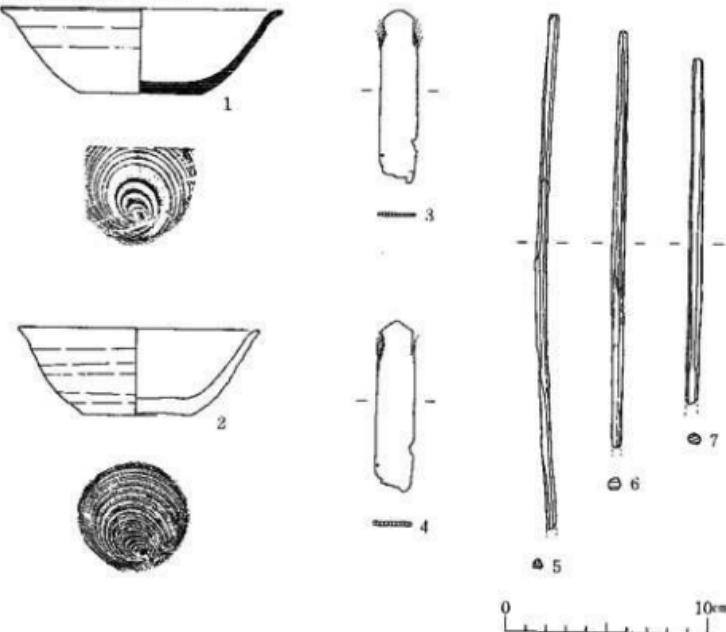
S L 1035河川跡の北岸にある円形を呈する遺構である。直径2.08m、深さ26cm、底面は平坦である。

遺物は土師器杯（第41図）のほか、破片資料として底部切り離しが回転糸切りの杯、同じく回転糸切り痕のある甕底部が出土した。

④ SK 1042（第40・42図、図版22・34）

S L 1035河川跡の北岸にある橢円形を呈する遺構である。長軸1.95m、短軸1.63m、深さ16cmである。

遺物は須恵器高台付杯（第42図1）、土師器杯（2～8）がある。8には体部に墨書がある。破片資料として須恵器では高台の付く甕・高台付杯・回転ヘラ切り痕のある杯、土師器では回



番号	種別	器形	特　　徴		口徑 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底面 指標	高洋 指標	外傾 度	図版
			外側	内側							
1	須恵器	杯	外側：ロクロナデ→回転糸切り	内側：ロクロナデ	14.0	6.0	4.2	0.43	30.0	39°	
2	土師器	杯	外側：ロクロナデ→回転糸切り	内側：ロクロナデ	12.0	5.4	4.4	0.45	36.7	29°	34-1
番号	種別	器形	特　　徴		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)				図版
3	青　　串					1.9	0.1				34-3
4	青　　串					1.9	0.2				34-2
5	管					0.6	0.6				
6	管					0.6	0.6				
7	管					0.5	0.4				

第39図 SK 1034出土遺物

転糸切り痕のある杯・甕口縁部・画面にタタキメのある變胴部が出土した。

⑤ SK 1043 (第40・43図、図版34)

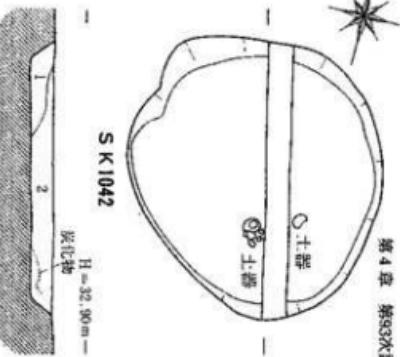
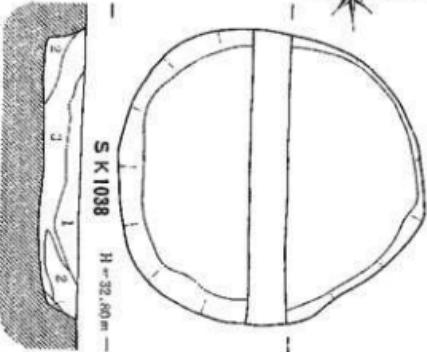
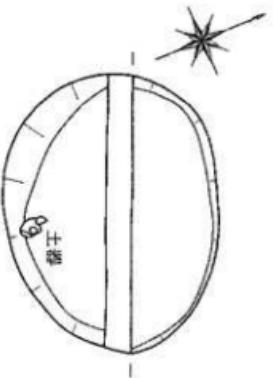
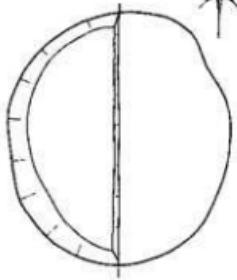
SK 1042の西に位置し、横円形を呈する遺構である。長軸1.84m、短軸1.42m、深さ20cm、底面は平坦である。

遺物は土師器杯（第43図1～3）のほか、甕口縁部が出土した。

⑥ SK 1044 (第40図)

S L 1035河川跡の北岸、S X 1040の東に位置する、略円形の遺構である。直径1.58m、深さ15cm、底面は南側が幾分浅くなっている。

遺物は破片であるが須恵器では杯の口縁部、土師器では底部に回転糸切り痕のある杯・皿・



0 1 m

1 2.5Y 5/6 黑褐色土、10Y R 5/6 黑褐色土

甕口縁部が出土した。

⑦ S K 1050 (第26図)

S B 1048掘立柱建物跡の範囲内にあり、橢円形を呈する遺構である。建物と同一面からの掘り込みで、口径1.45m、底径85cm、深さ86cmである。底面は平坦で、下部に腐食した木片がある。埋土は掘立柱建物跡の柱掘形のそれと同一であるが、上部に火山灰層がレンズ状に斜めに入っている。火山灰降下よりは古い時期の遺構であろう。

⑧ S K 1052 (第40図)

調査区北端に位置する橢円形の遺構である。長軸1.60m、短軸1.48m、深さ26cm、底面はほぼ平坦である。遺構内から遺物は出土しなかったが、縄文土器を含む黒褐色土層からの掘り込みで、遺構周辺からは縄文中期初頭の大木7a式土器が出土しており、本土坑はこの時期の遺構と考えられる。

(5) 溝

① S D 1036・1051 (第44図)

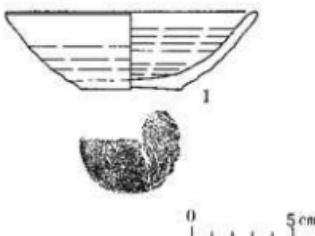
北東～南西方向に走る2条の溝で、長さ約31mを検出した。重複があり、S D 1036を1051が切っている。上面幅1.1m、深さ28～35cmで、底部は丸みを帯びる。北部では一体となっているが、南半部では2本になり、同じように西方にカーブしている。溝の西側の一部に周囲よりも硬い面の塗がりがあった。溝の確認面は現水田面より約15cmほどと極めて浅く、S L 1035の最終段階の河川跡や、その付近の遺物包含層を掘り込む。明治年間の耕地整理前の様子を描いた『耕地整理地区現形図』に見られる水路と、その西側にある道路に位置・方向がほぼ一致することから本遺構は明治時代の耕地整理前の用排水路と判断される。

② S D 1039 (第45図)

E L 99グリッドにある南北方向の溝で、長さ2.9mを検出した。幅70cmあり、地山の粘土層を約5cm掘り込んでいる。北へ延びている。

③ S D 1041 (第26図)

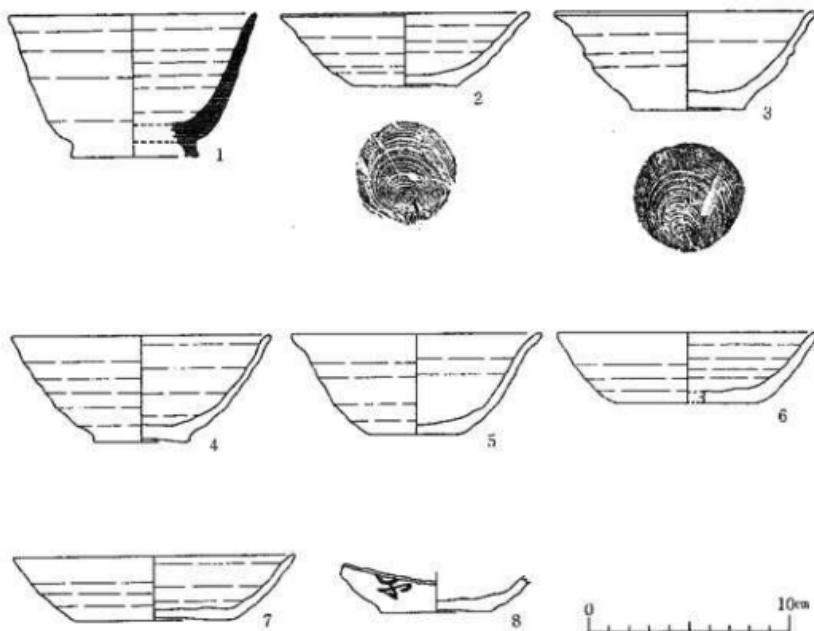
S B 1048掘立柱建物跡の西にある南北方向の溝である。長さ3.6mを検出した。黒色粘土質



第41図 S K 1038出土遺物

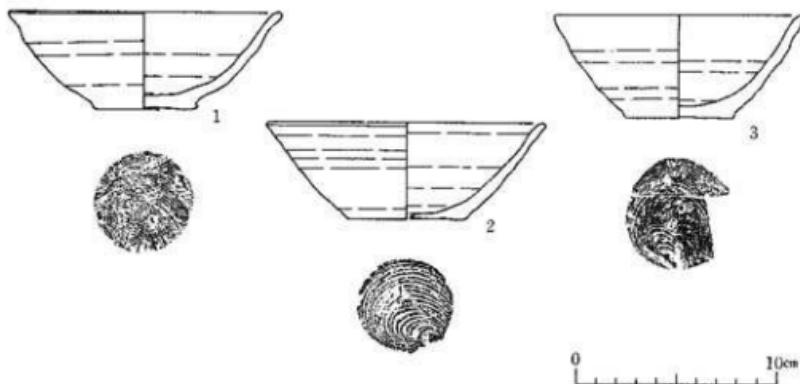
番号	種別	型形	井					
			井					
1	土器	杯	外輪：ロクロナゲー回転毛切り 内面：ロクロナゲ					

口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底面 指数	高径 比	外輪 度	内輪 度	開口 度
12.5	5.0	4.9	0.40	39.2	34°	34°	34°



番号	種別	器形	特 質	内径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径 倍数	高さ 倍数	外縁 度	周 長
1	須恵器	浅鉢	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	12.4	7.1	2.8	0.45	0.8	39°	
2	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転条切り 内面：ロクロナデ	12.4	5.2	3.6	0.42	29.0	39°	
3	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転条切り 内面：ロクロナデ	13.0	5.6	4.9	0.43	37.7	34°	34—7
4	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転条切り 内面：ロクロナデ	13.0	4.7	5.3	0.36	40.8	31°	
5	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転条切り 内面：ロクロナデ	12.5	4.4	5.0	0.35	40.0	31°	
6	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ	13.0	7.2	3.5	0.55	26.9	30°	
7	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ	14.0	7.8	3.2	0.56	22.9	35°	
8	土師器	杯	外面：内部に墨書き「匁」							

第42図 SK 1042出土遺物



第43図 SK 1043出土遺物

の遺物包含層からの掘り込みで、上面幅1.8m、深さ45cm、断面は逆三角形である。埋土の上に火山灰層が約2cmの厚さに堆積しており、火山灰降下前の遺構であることが明らかである。

(6) その他の遺構

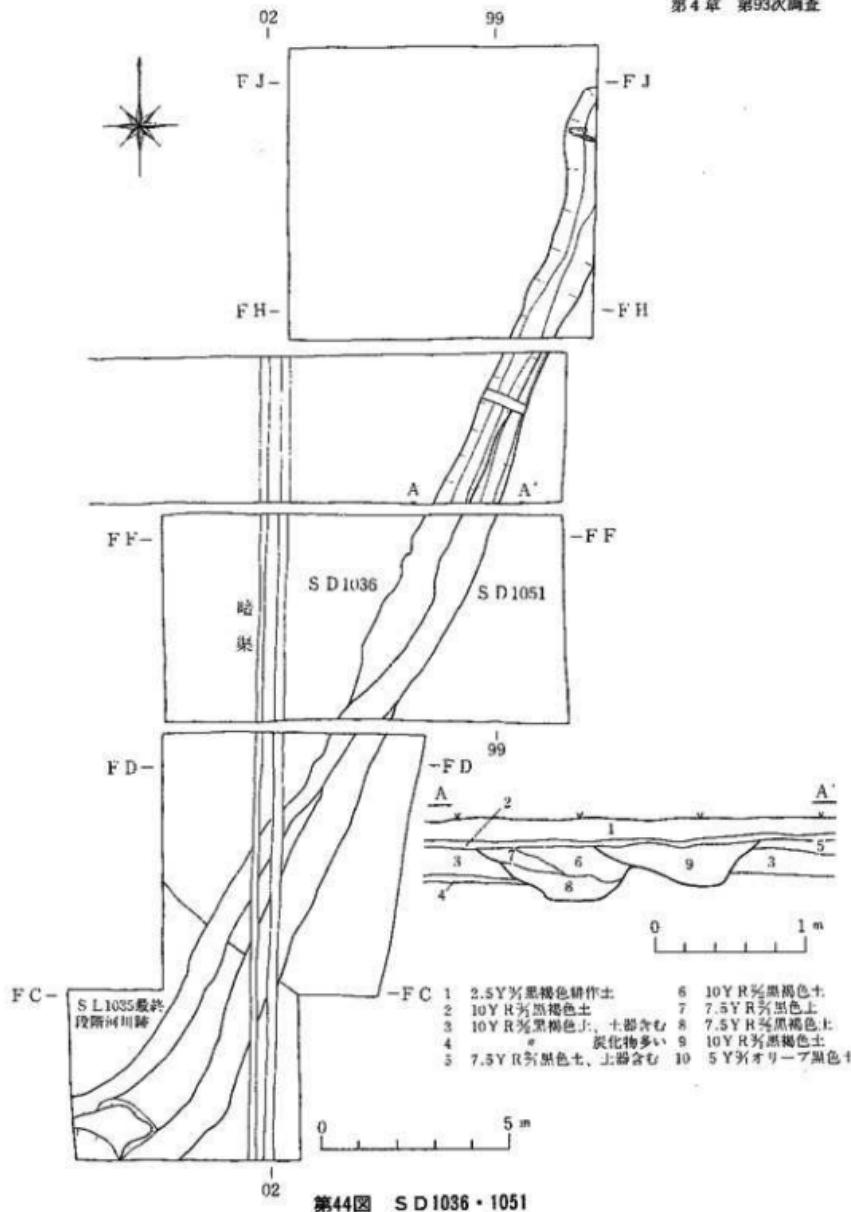
① S X1040 (第46図、図版23)

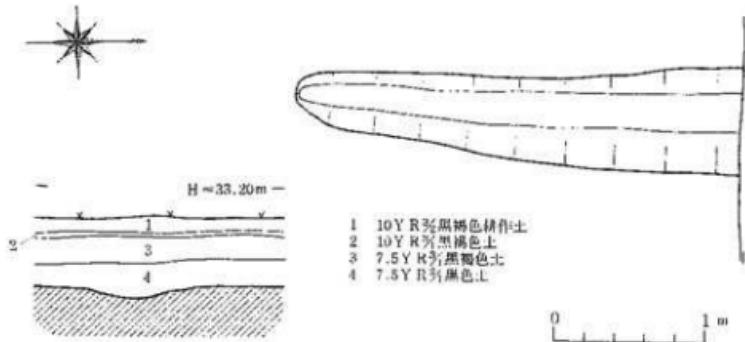
S L 1035河川跡の北岸、S K 1044の西に位置する、南北2.60m、東西1mほどの範囲の焼土・炭化物の拡がりである。北端部の径70cmほどの範囲が強い加熱を受けて焼けており、石が赤変している。焼土の中に骨粉が混じり、焼面の上に土器片が乗る。炭化物の拡がりは南に細長く延びている。

② S X1045 (第46・47図、図版23)

E N11グリッドにある、焼土と炭化物の拡がりである。焼土は主に東半部に見られ、厚さ6cmほどで、この部分で加熱がなされている。その西に長軸80cm、短軸60cm、深さ20cmのピットがあり、中に黒褐色土と炭化物が互層をなしている。周囲には炭化物が極めて薄く広範囲に分布している。また、遺構と同一レベルに火山灰も分布する。本遺構はS L 1035河川跡の上方まで砂や粘土が堆積した後の遺構である。

遺物は土師器杯（第47図1・2）・甕（3）、破片資料として回転糸切り痕のある杯、甕の底部が出土した。





第45図 SD 1039

③ SX1046 (第46・48図、図版34)

S L 1035河川跡の北岸にあり、SK1043のすぐ西側に隣接する焼土と炭化物の拡がりである。その拡がりの北端部に径40cmほどの石があり、この周囲50cmほどの範囲が強く加熱を受けている。焼土や炭化物を含む土層は厚さ約10cmほどで、この南西側に全体として3m×1.5mほどの範囲に分布している。

遺物は土師器杯（第48図1、2）のほか、破片資料として須恵器甕の肩部・壺高台部、上部器杯・ケズリ調整のある甕胸部が出土した。3は管状土錘である。

第3節 遺構外出土遺物 (第49~63図、図版35~42)

1 EHライントレンチ出土遺物 (第49図)

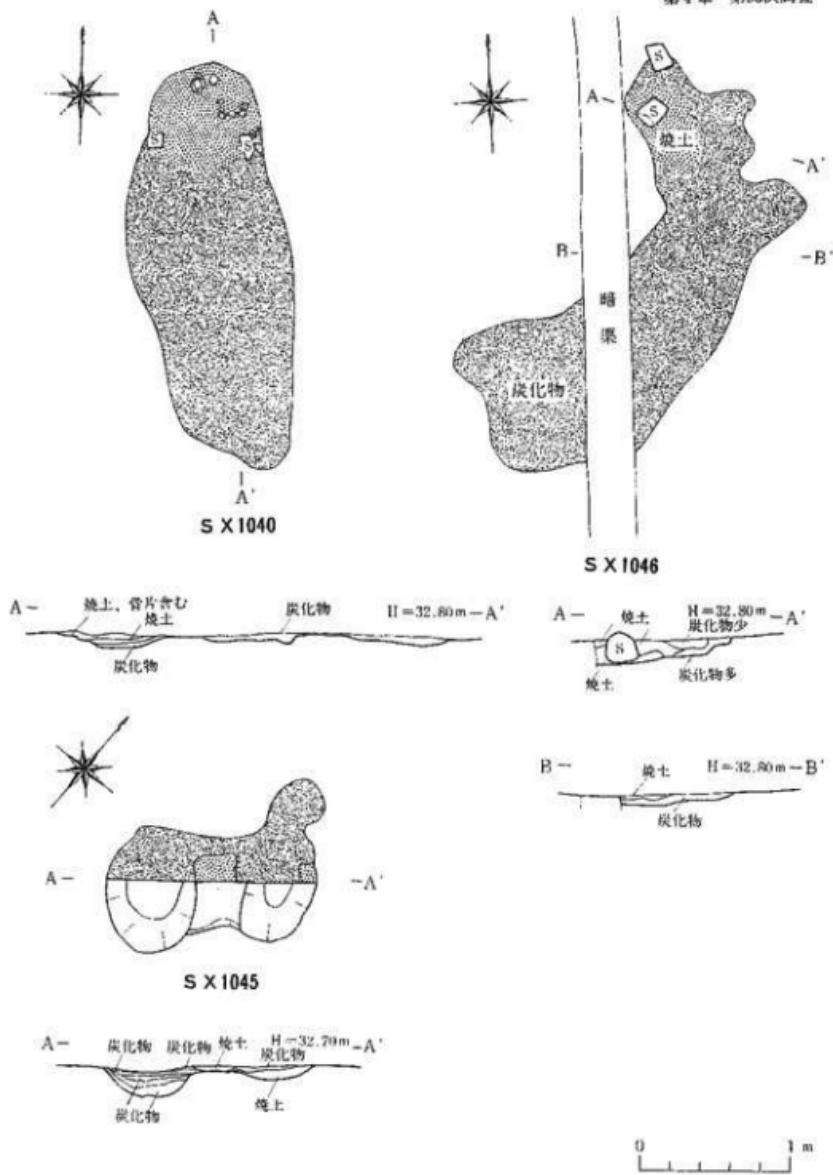
1~3・7・8はトレンチ西端部の湿地状落ち込みの上の、古代遺物包含層としてはほぼ最下層から出土した。1~3は底部切り離しが回転糸切りの須恵器杯で、2は「矢」、3には「官」または「臣」の墨書きがある。7は須恵器長頸甕である。8は棒状の木製品である。4~6はトレンチ東端部の最下層から出土した、蓋・長頸甕の頭部である。

2 ELライン・11ライントレンチ出土遺物 (第50図)

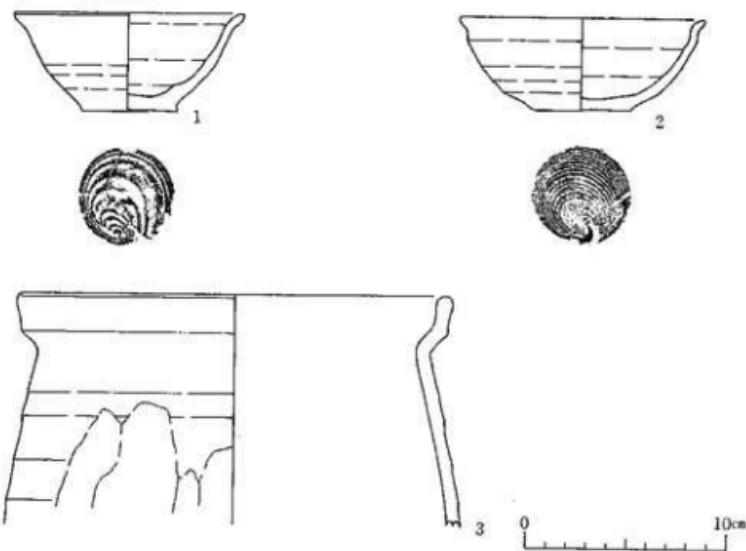
1~6は土師器杯、7は土師器高台付杯である。両トレンチの交点付近では火山灰に伴う形で土器が出土した。

3 HCライントレンチ出土遺物 (第51~55図)

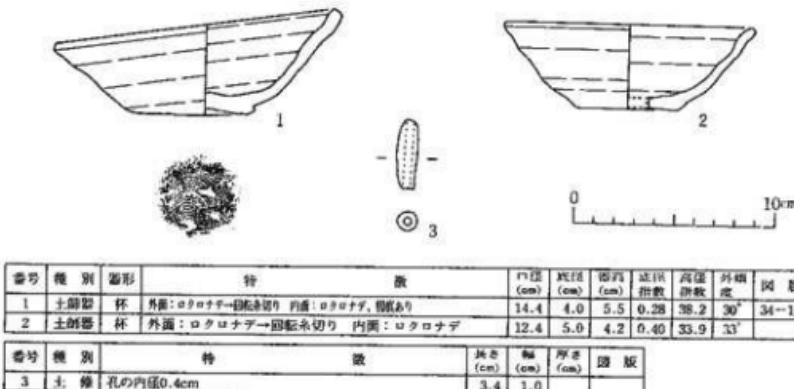
1~11はトレンチ東部で出土した遺物で、1は須恵器杯、2~8は土師器杯、9は土師器皿



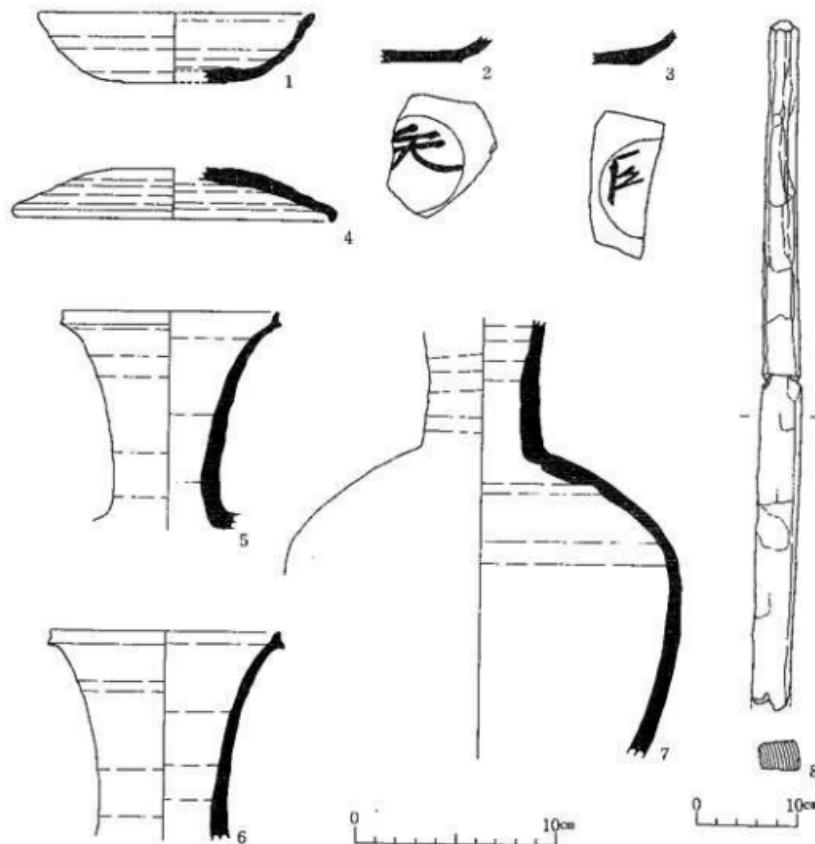
第46圖 S X 1040 • 1045 • 1046



第47図 S X 1045出土遺物



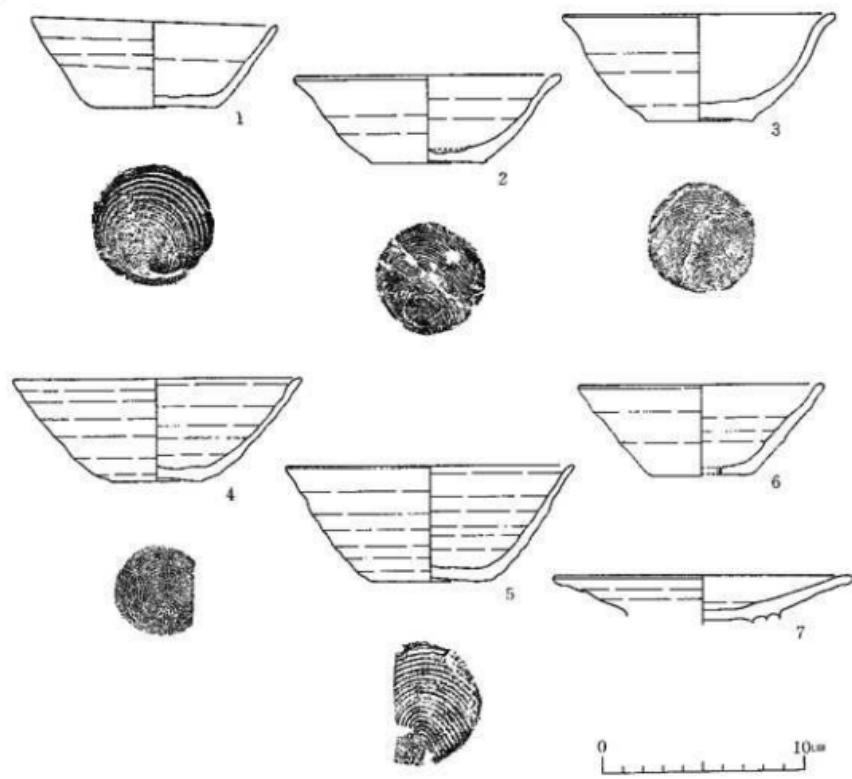
第48図 S X 1046出土遺物



番号	種別	器形	出土地・層位	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	脚高 (cm)	底径 倍数	高径 倍数	外傾度	國版
1	飴匙器	杯	E H10+4層	外面：セクロナデ・鋸歯状切り 内面：セクロナデ	13.8	5.2	3.5	0.36	32		
2	須毛器	杯	E H10+4層	外面：底部に墨書き「矢」 内面：鋸歯状						35-1	
3	飴匙器	杯	E G99+4層	外面：底部に墨書き「宮」 文は「國」						35-1	
4	須毛器	蓋	E G99+4層	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	15.8						
5	須毛器	長颈瓶	E G99+4層	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	10.7						
6	飴匙器	長颈瓶	E H99+4層	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	11.4						
7	須毛器	長颈瓶	E H11+5層	外面：ロクロナデ、鋸歯からT字が消れる 内面：ロクロナデ							

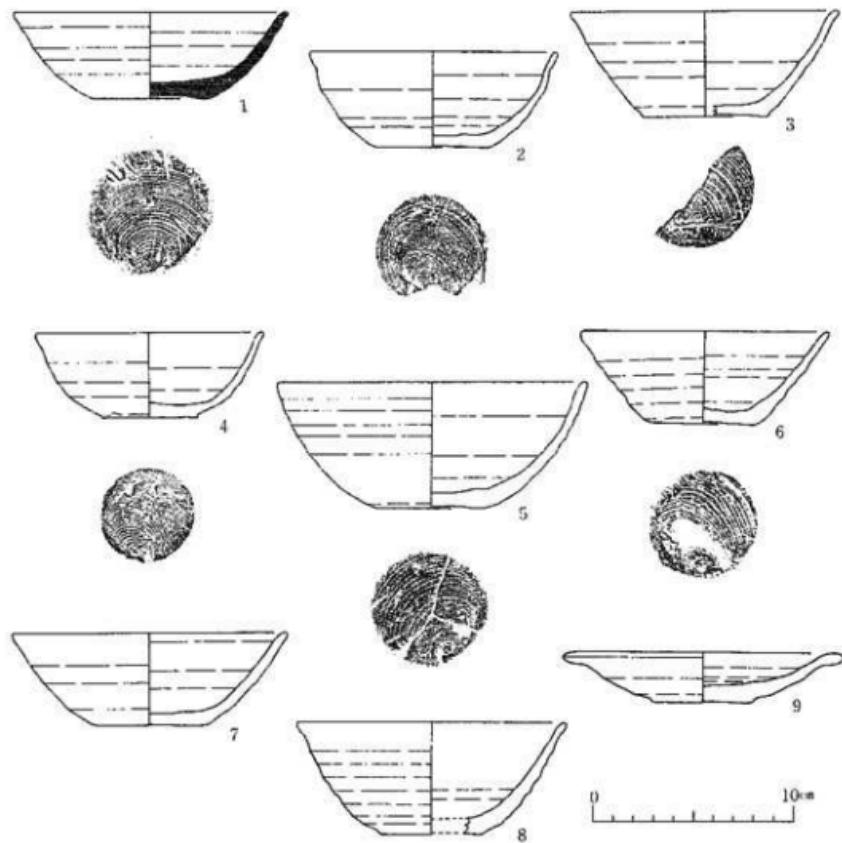
番号	種別	出土地・層位	特徴	底径 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	國版
8	鉢	E F11+4層		4.1	3.0	35-3	

第49図 遺構外出土遺物（1）



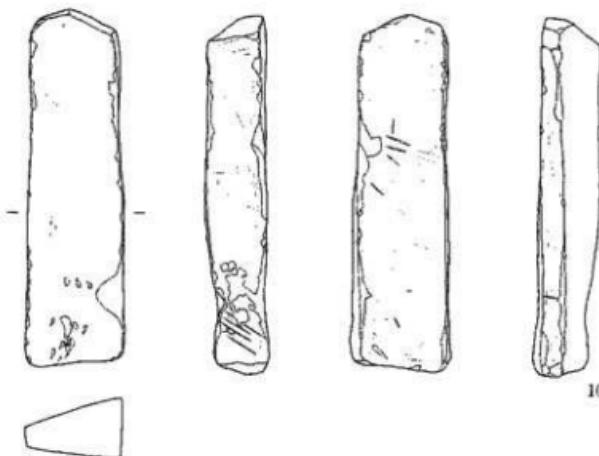
番号	種別	形態	出土地・層位	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	底盤 角度	高径 比	回数
1	土師器	杯	E O11・3層	外面: ロクロナデ・深底鋸切り 内面: ロクロナデ	12.2	6.0	4.5	0.49	36.9	29° 35-4
2	土師器	杯	E M10・3層	外面: ロクロナデ・深底鋸切り 内面: ロクロナデ	13.4	5.6	4.4	0.42	32.8	36° 35-5
3	土師器	杯	E M10・4層	外面: ロクロナデ・深底鋸切り 内面: ロクロナデ	13.5	5.2	5.1	0.39	40.0	30°
4	土師器	杯	E M10・4層	外面: ロクロナデ・深底鋸切り 内面: ロクロナデ	14.4	4.6	5.1	0.32	35.6	37°
5	土師器	杯	E M12・4層	外面: ロクロナデ・深底鋸切り 内面: ロクロナデ	14.4	6.3	5.8	0.43	40.2	30°
6	土師器	杯	E M12・3層	外面: ロクロナデ・深底鋸切り 内面: ロクロナデ	12.2	5.0	4.5	0.41	36.9	35°
7	土師器	高台皿	E N11・3層	外面: ロクロナデ 内面: ロクロナデ	15.0					35-6

第50図 遺構外出土遺物（2）

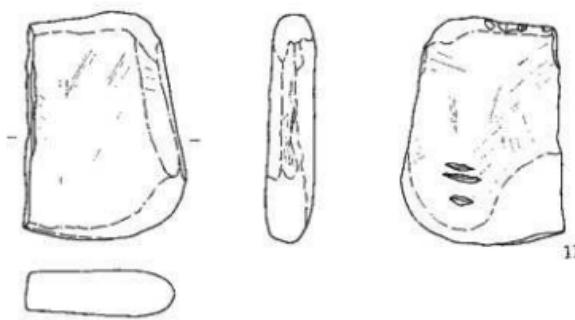


番号	種別	器形	田土地・層位	特 徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	純厚 指数	内深 指数	外縁 度	図 版
1	灰陶器	杯	HB86-4層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: メリロナデ	13.8	5.8	4.3	0.42	31.2	33°	
2	土師器	杯	HC87-3層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: ロクロナデ	12.5	5.4	4.8	0.44	34.3	25°	
3	土師器	杯	HB85-4層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: ロクロナデ	13.4	6.2	5.3	0.46	39.2	30°	
4	土師器	杯	HC83-4層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: ロクロナデ	11.4	4.8	4.2	0.42	36.6	24°	
5	土師器	杯	HC87-3層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: ロクロナデ	15.4	5.6	6.3	0.36	49.9	25°	36-1
6	土師器	杯	HB87-4層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: ロクロナデ	12.4	5.3	4.6	0.43	37.1	33°	36-2
7	土師器	杯	HC87-3層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: ロクロナデ	13.8	5.7	4.6	0.41	33.3	34°	
8	土師器	杯	HC83-4層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: ロクロナデ	13.4	5.1	5.6	0.38	41.8	28°	
9	土師器	杯	HC86-4層	外面: ロクロナデ—鉛板剥離り 内面: ロクロナデ	14.0	5.0	2.5	0.36	17.9	52°	36-3

第51図 遺構外出土遺物（3）



10

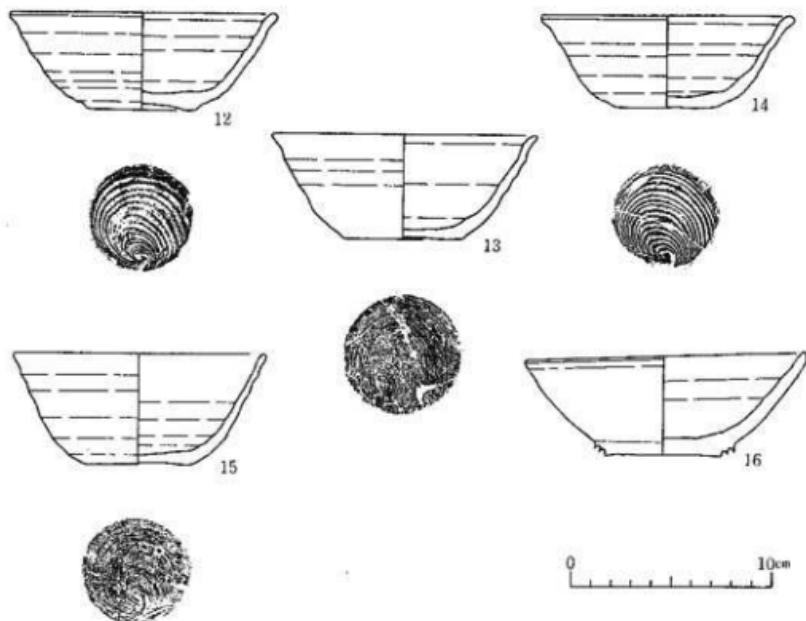


11



番号	種別	出土地・層位	特	微	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	回数
10	砥石	H.C86-3層	4面使用		17.9	3.1	3.0	36-4
11	砥石	H.C86-4層	4面使用		11.4	2.4	2.3	36-5

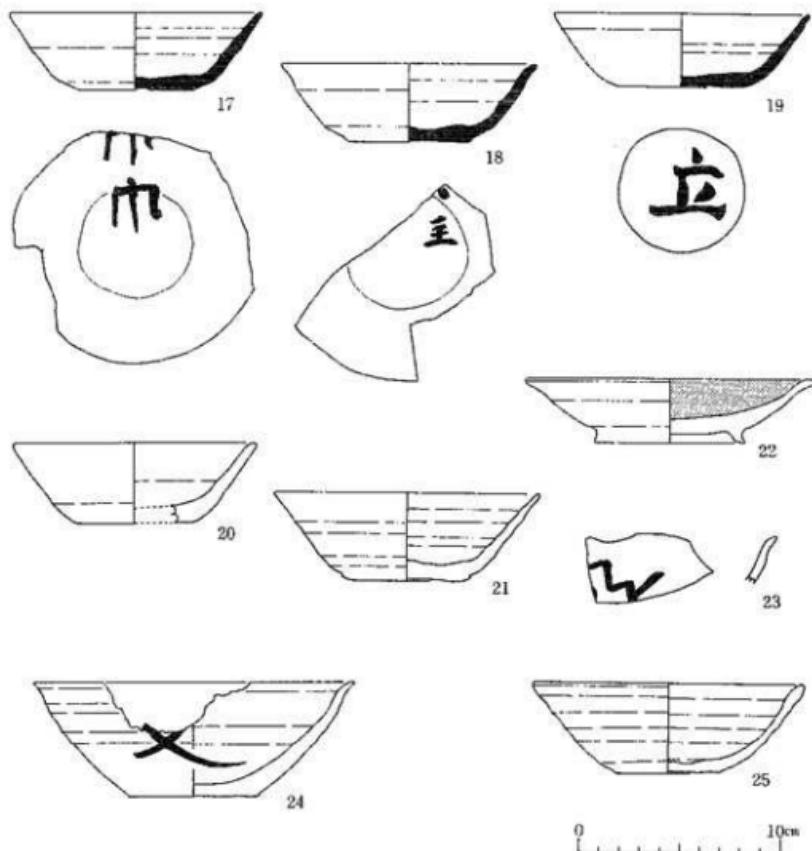
第52図 造構外出土遺物(4)



第53図 造構外出土遺物（5）

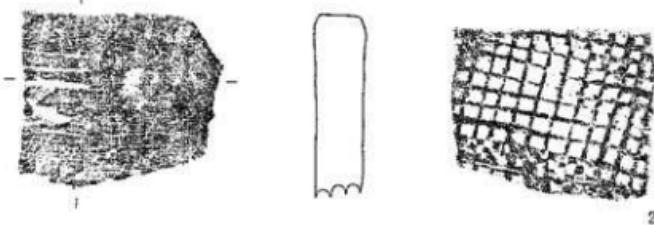
で底部切り離しは全て回転糸切りである。10・11は砥石である。12～16は1～11までの遺物よりは西方で火山灰に伴うか、その直上から出土した遺物である。12～15は土師器杯、16は土師器高台付杯で、いずれも底部切り離しが回転糸切りによる。第54・55図はトレント西端部火山灰よりも下位からの出土である。17～19は須恵器杯で墨書がある。17は則天文字の影響による特殊文字「爪」が重なる。18は底部に「主」の他、体部にも墨痕がある。19は「立」である。20・21は底部切り離しが回転ヘラ切りによる土師器杯、22は内面黒色処理された土師器高台付皿である。23には墨書がある。24・25は底部切り離しが回転糸切りによる土師器杯で、24の体部に墨書がある。平瓦（26）、箸（27）、筋輪（28）、砥石（29）も出土した。

漆紙文書（第56図）はトレント西端部の暗灰色粘土層から出土した。10.0×6.3cmの断片である。この層はトレント全体にあり、出土地点付近ではその下層は古代の遺物を全く含まない

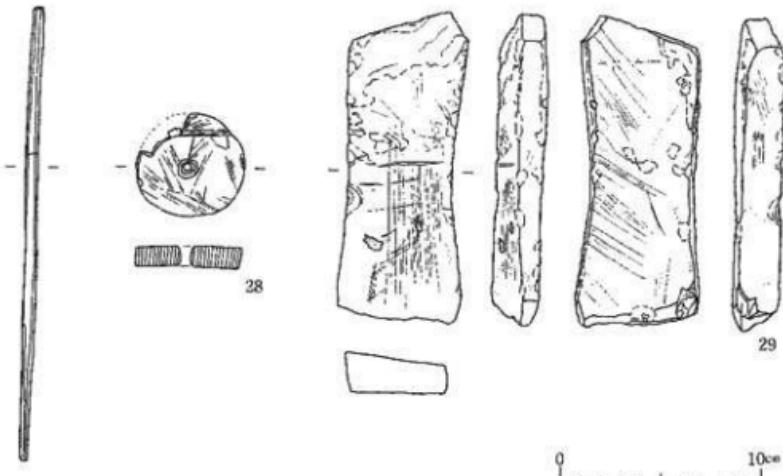


番号	種別	形態	出土地・層位	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底厚 内側	高径 比	外縁 角度	固 版
17	須恵器	杯	II-C-09-3層 内側底より下	外面：セラコナテ、底面：へき裂。裏面：陶質光澤	12.6	5.8	3.9	0.46	31.0	32°	37-1
18	須恵器	杯	II-C-09-4層 内側底より下	外面：セラコナテ、底面：へき裂。裏面：陶質光澤	12.8	6.0	3.9	0.47	30.5	33°	37-2
19	須恵器	杯	II-C-09-4層 内側底より下	外面：セラコナテ、底面：へき裂。裏面：陶質光澤	12.8	6.2	3.7	0.49	29.0	33°	37-3
20	上繩器	杯	II-C-09-4層	外面：セラコナテ、底面：へき裂。裏面：セラコナテ	12.2	6.0	4.0	0.49	32.8	32°	
21	七輪器	杯	II-C-09-4層 内側底より下	外面：セラコナテ、底面：へき裂。裏面：セラコナテ	13.2	5.8	4.4	0.44	33.3	34°	37-5
22	千葉型	斎場器	II-C-09-4層 内側底より下	外面：セラコナテ、裏面：玉筋焼	14.4		3.2		22.2		37-4
23	七輪器	杯	II-C-09-4層 内側底より下	外面：セラコナテ、底面：白口。裏面：セラコナテ							37-6
24	上繩器	杯	II-C-09-4層 内側底より下	外面：セラコナテ、底面：へき裂。裏面：セラコナテ	16.0	6.4	5.7	0.46	26.6	35°	37-7
25	七輪器	杯	II-C-09-4層 内側底より下	外面：セラコナテ、底面：へき裂。裏面：セラコナテ	13.5	5.1	4.5	0.38	33.3	35°	38-1

第54図 遺構外出土遺物（6）



26



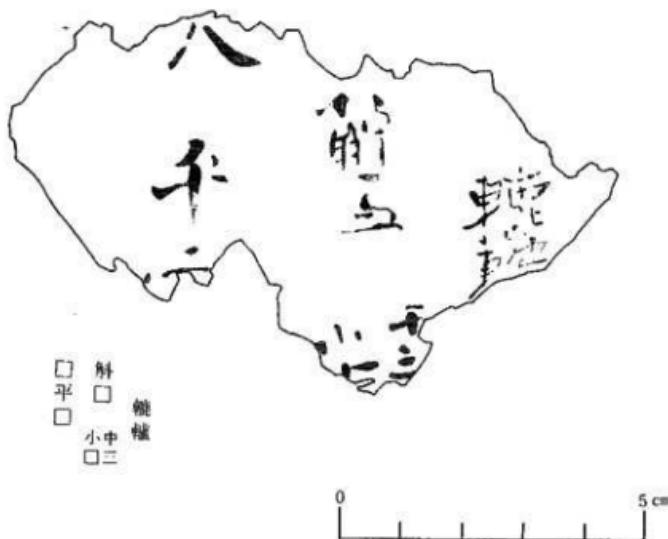
28

29

○ 27

番号	種別	出土地・層位	特 訴	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図 版
26	平 瓦	RCM-1K-2EX T-1-1 層位	片面：布目模 内面：格子タキシメ			2.4	38-2
27	瓦	RCM-1K-2EX T-1-1 層位		22.6	0.7	0.5	38-3
28	纺 織	HB10			5.4	1.1	38-4
29	研 石	RCM-1K-2EX T-1-1 層位	4面使用	15.6	2.5	2.1	38-5

第55図 造構外出土遺物（7）



第56図 造構外出土遺物（8）漆紙文書

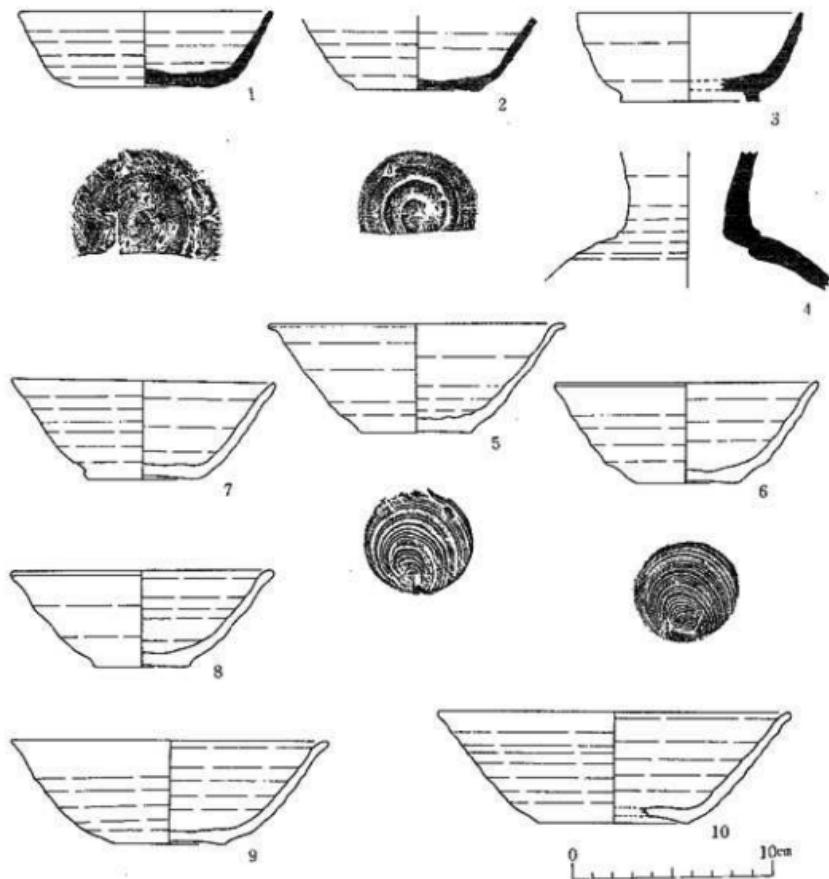
黒色土であるので、古代遺物包含層としては最下層からの出土である。ただし、このトレンチ西端部には火山灰層は見られず、火山灰との新旧関係は不明である。伴出遺物は第54図20の土師器杯が最も近い。平川南氏に积累を依頼中である。

4 HKライントレンチ出土遺物（第57・58図）

HCライントレンチと同様に、トレンチ西端部から古手の上器が出土している。1～3がそれで、1・2は須恵器杯、3は高台付杯である。底部切り離しはいずれも回転ヘラ切りによっている。他はトレンチ東部からの出土で、7は須恵器壺、4～10は土師器杯、11・12は土師器皿である。13は全体が丁寧に加工されたヘラ状の木製品である。

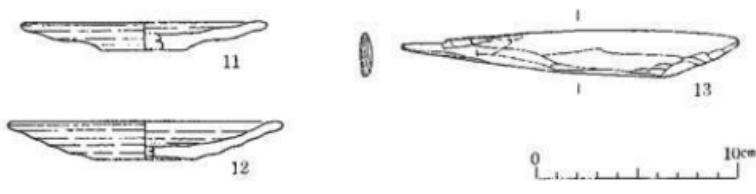
5 その他の遺構外出土遺物（第59～63図）

須恵器杯（1・2）、土師器杯（3～6）は、いずれも底部切り離しが回転糸切りによる。7は非ロクロの土師器小型壺である。8～10は土師器杯で墨書きがあり、8は「上」、9は「就」であるが、10は不明である。瓦には凸面に渦巻印き日のある平瓦（11）と丸瓦（12）が出土した。木製品のうち、13の串は先端が焼けている。14は断面がU字形を呈し、両端が欠損している。15も串であるが1孔があく。16～19は曲物の底板であろう。20は下駄である。21～24は砥石である。



番号	断面	器形	出土地・層位	特徴	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底径 倍数	高径 倍数	外壁 厚	図版
1	須恵器	杯	HJ 09-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ, 板削ぎ?	12.6	7.4	3.8	0.59	30.2	23°	
2	須恵器	杯	HJ 09-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ		6.0					
3	須恵器	輪形片	HJ 09-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ	11.2						
4	須恵器	長颈瓶	HJ 85-3層	外面: ロクロナデ 全体に墨分着							
5	土師器	杯	HJ 91-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ	14.8	5.4	5.5	0.36	37.2	36°	
6	土師器	杯	HJ 94-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ	13.2	5.0	5.0	0.38	37.9	30°	
7	土師器	杯	HJ 86-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ	13.3	5.6	5.0	0.42	37.6	33°	38-6
8	土師器	杯	HJ 93-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ	13.1	4.8	4.8	0.37	35.6	34°	
9	土師器	杯	HJ 87-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ	15.8	5.6	5.2	0.35	32.9	36°	
10	土師器	杯	HJ 87-3層	外面: ロクロナデ-凹板ヘラ切り 内面: ロクロナデ	17.6	7.4	5.6	0.42	31.8	37°	

第57図 造構外出土遺物 (9)



番号	種別	断面	出土地・層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	断面 形	高さ (cm)	外傾 度	回数
11	土器	楕	HK91・3層	外面: ロクロナゲ・側面斜切り 内面: ロクロナゲ	12.2	4.4	1.4	0.36	11.5	69°	
12	土器	楕	HK87・4層下層	外面: ロクロナゲ・側面斜切り 内面: ロクロナゲ	13.6	4.8	1.9	0.35	14.0	62°	
13	石槍	HK88・3層			16.7	2.3	0.6				

第58図 遺構外出土遺物 (10)

6 繩文時代の遺物 (第62図25~63図32)

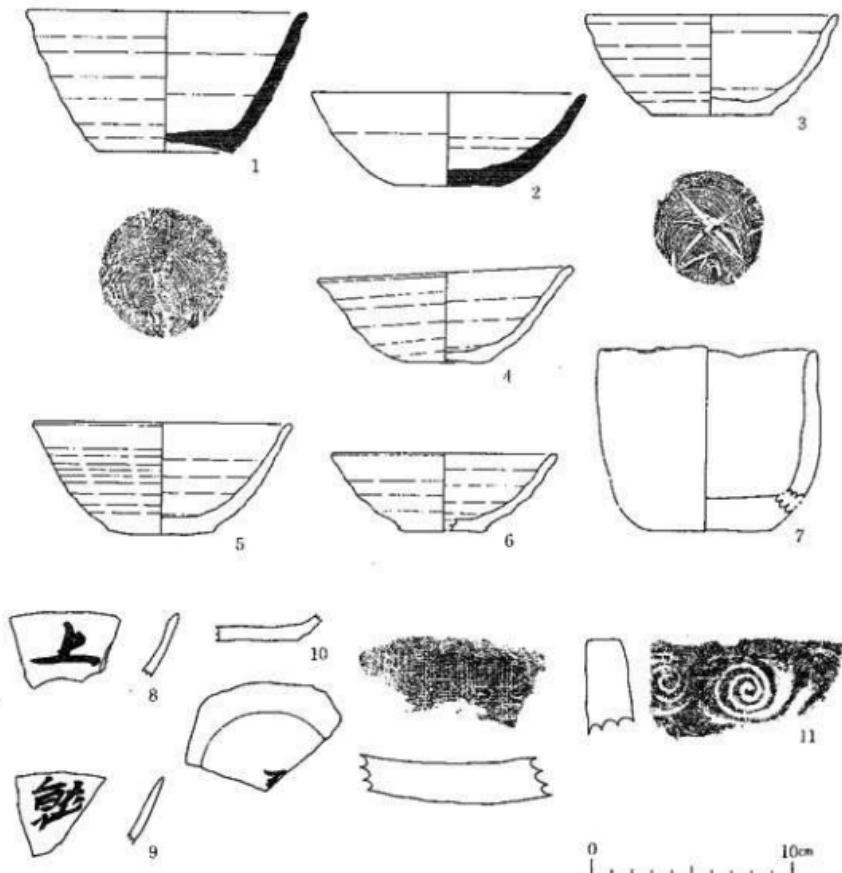
図示した土器は全て内郭丘陵に近いH J ライントレンチからの出土である。25・26は中期初頭の大木7a式、27は木目状燃糸文があり円筒下層式であろう。28は中期末葉の大木9式、29は後期の十脚内II式である。石槍(30)はE H ライントレンチ西端部の湿地状落ち込み付近の最下層黒色土から出土した。31は側縁を細かく抉り込み、刃部をもつ。32は両面に凹みがあり、一面を平坦に研磨する。火山灰より上位からの出土であるが、繩文時代の遺物であろう。

第4節 小 結

第93次調査は、外郭南門と内郭南門を結ぶ大路の検出と、その他の遺構の分布確認を目的として実施した。また、第92次調査において河川跡の存在が明らかとなったので、外郭内におけるその流路、幅員などを把握し、橋脚を検出することも、その目的の一つに加えた。

外郭内には東から西へ流れる河川が存在し、その最大幅は南北約100mあることがわかった。川底の堆積層の年代は出土土器から9世紀末ないし10世紀前半代に納まる範囲と考えられる。しかし、800年、801年を伐採年代とする外郭線角材列が、河川の流れを問において開口部を有していることは、外郭線創建時にも河川が存在して、角材列が河川と接する部分にはあえて角材列を造らなかったことになる。

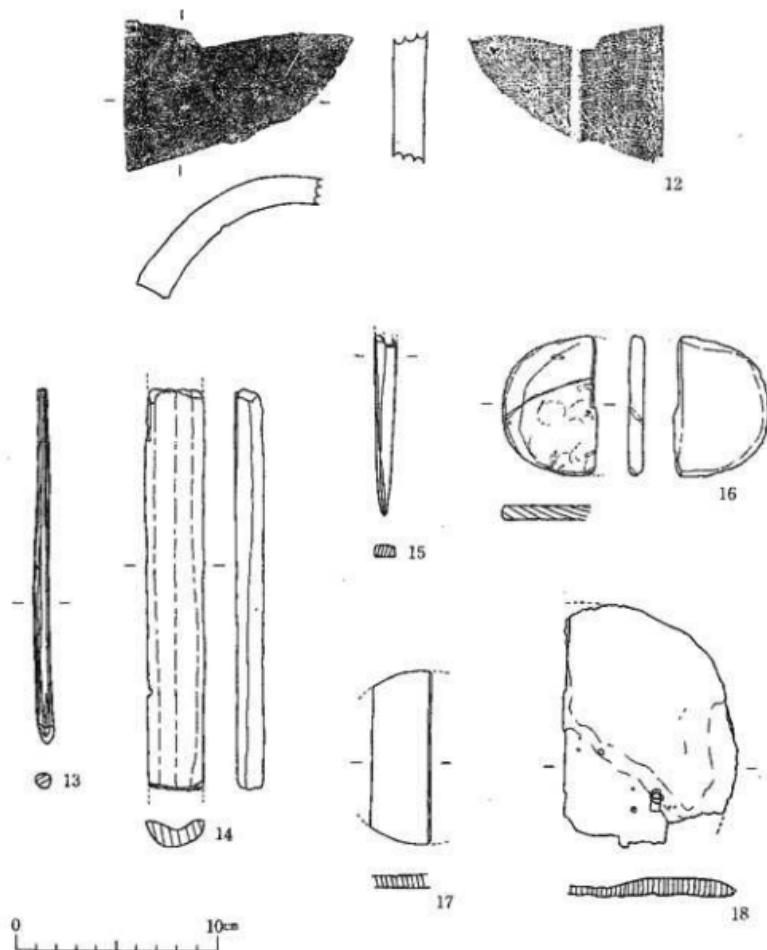
第92次調査の小結でも触れたが河川の変遷をたどると、河川は外郭線の創建時の9世紀初頭には存在し、その後も流下していたが、9世紀末~10世紀前半にかけて大きな氾濫があったり、川下の河道が変わるなどして、多くの砂礫層を堆積させる状況に変化し、河川敷は最大100mにも達したが、急激に堆積が進み、火山灰が降下した時点ではこの河川敷の大部分は砂や粘土



番号	種別	形態	出土地・層位	特徴	外径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	底壁 厚さ (cm)	外壁 厚さ (cm)	回数
1	瓦型器	杯	E-L00-4層	外面: ロクロナデ・凹底未切り 内面: ロクロナデ	14.0	6.6	7.0	0.47	50.0	23°
2	瓦型器	杯	E-J11-4層	外面: ロクロナデ・凹底未切り 内面: ロクロナデ	13.1	5.4	4.7	0.40	35.1	32°
3	上輪器	杯	F-O12-3層	外面: ロクロナデ・凹底未切り 内面: ロクロナデ	12.6	5.8	5.0	0.46	39.7	25°
4	土師器	杯	G-A07-3層	外面: ロクロナデ・凹底未切り 内面: ロクロナデ	12.7	4.4	4.8	0.35	37.8	37°
5	十輪器	杯	E-D09-2層 E-D10-3層	外面: ロクロナデ・凹底未切り 内面: ロクロナデ	13.0	4.8	5.6	0.37	43.1	28°
6	土師器	杯	F-O17-3層	外面: ロクロナデ・凹底未切り 内面: ロクロナデ	11.2	4.4	3.9	0.39	34.9	35°
7	十輪器	小型瓶	F-O15-3層	外面: 縦方向のナデ 内面: 横方向のナデ	10.8	6.4	9.2			
8	土師器	杯	H-J07-2層	外面: ロクロナデ, 異2 [上] 内面: ロクロナデ						39-4
9	土師器	杯	H-K09-3層	外面: ロクロナデ, 異3 [上] 内面: ロクロナデ						39-5
10	土師器	杯	E-H02-5層	外面: ロクロナデ・凹底未切り, 異2 [上] 内面: ロクロナデ						39-6

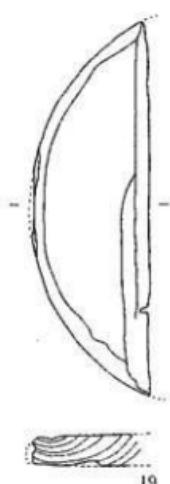
番号	種別	出土地・層位	特徴	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	回数
11	平瓦	E-G01-3層上	外面: 布目模 凸面: 深谷押き目				39-7

第59図 遺構外出土遺物(11)

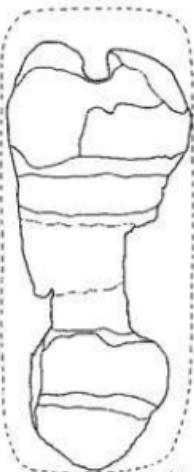
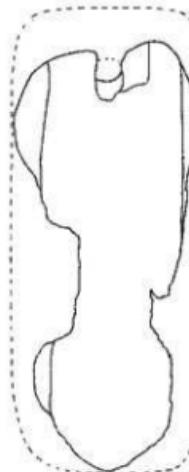


番号	種別	出土地・層位	特徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	回数
12	丸瓦	E L99-4層	四面：布目模			1.6	40-1
13	串	E S08-2層	先端部が開いている	18.1	0.8	0.7	40-2
14	骨質施錠	G I04-4層			2.9	1.3	40-3
15	出	A G03-3層	孔あり		1.1	0.6	40-4
16	曲物底板	F N09-日高込				0.8	40-5
17	曲物底板	G I07-3層				0.7	40-6
18	曲物底板	E H02-5層				0.9	40-7

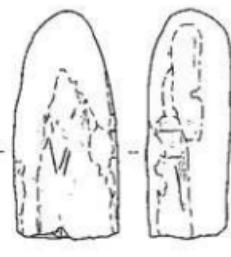
第60図 造構外出土遺物 (12)



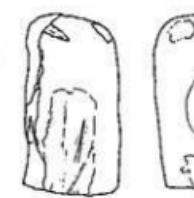
19



20



21

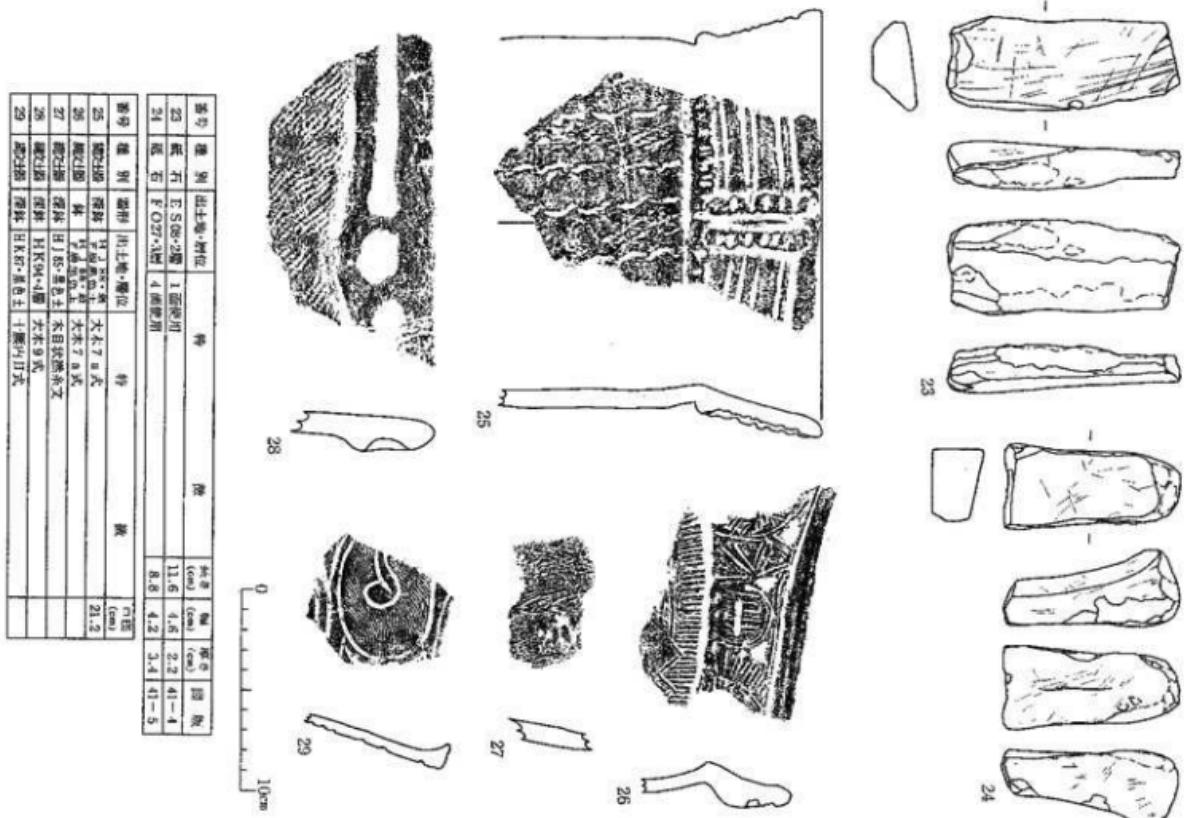


22

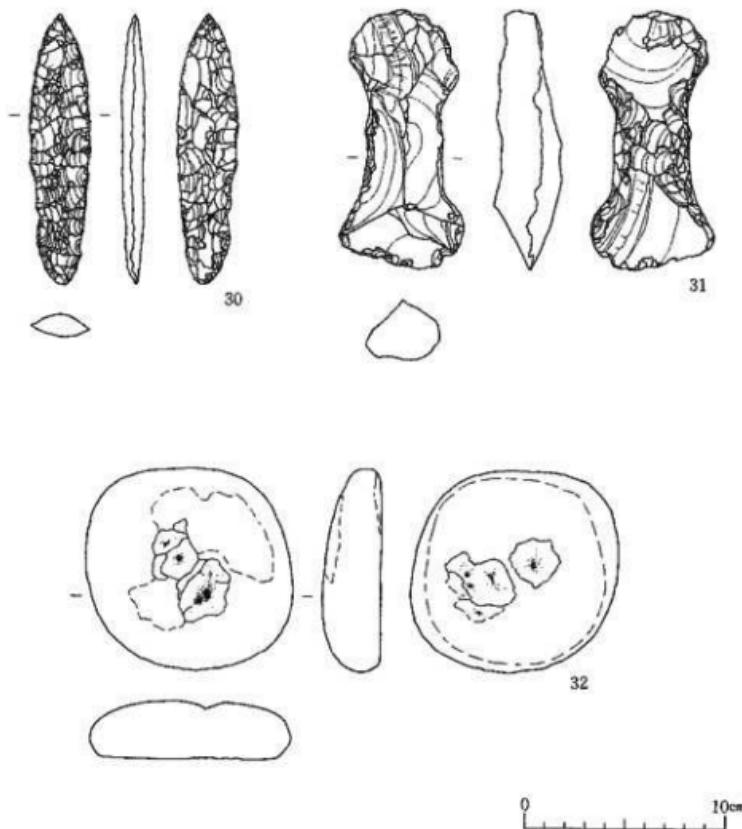
0 10cm

番号	種別	出土地・層位	特 徴	破 片	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	圓 盤
19	骨物遮蔽	G 1 02・3層					1.6	40-8
20	骨 片	H E35・最下層					4.0	41-1
21	砥 石	E H00・4層	2面使用		9.0	5.0	4.9	41-2
22	砥 石	E P25・2層	3面使用		11.5	5.2	4.0	41-3

第61図 造構外出土遺物 (13)



第62図 遺構外出土遺物 (14)



第63図 遺構外出土遺物 (15)

番号	種別	出土地・層位	名	蓋	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	回数
30	石 素	E0108-堆山頂上			13.4	3.0	1.1	42-1
31		F G-06-33H			12.9	6.1	3.0	42-2
32	円 石	HJ90-火山頂上	両面に凹み、1面研磨		10.0	10.2	2.9	42-3

層が厚く堆積していた。その頃に流れのない場所では火を伴う何らかの行為がなされて焼土造構を残したり、遺物包含層を形成した。最終段階の流れは角材列の開口部では創建時点と同じ位置で重なっており、その形成は古代の範囲内と推定される。

平坦な外郭内に東西方向に流れる河川を取り込むのは、胆沢城に共通する立地のあり方である。9世紀初頭に創建年代のある城柵の共通性として認識される。河川は水運による物資の運搬に利用したことも考慮すべきであろう。

外郭南門と内郭南門を結ぶ大路は、その路面や側溝が検出されなかった。しかし、河底の粘土層に打ち込まれた橋脚の一部が発見され、その位置が二つの門を結ぶ線上にあることから、大路を横切る河川に架けられた橋脚と判断された。この橋脚の存在によって外郭南門と内郭南門を結ぶ大路は存在したと考える。その後、河川の氾濫、砂礫、砂の堆積があつて橋脚や道路は失われたと考えられる。現時点では橋脚の全体規模は不明であるが、梁行は3.3mであろう。^(註2) 直径50cmの橋脚は平城京のそれに比べても大きい。また、河川の流路が変化していれば、今回検出した橋脚は払田柵の創建年代の橋とは限らず、この点にも考慮して精査は5年度に行いたい。

河川敷以外の外郭南門や内郭南門に近い位置でも、遺物包含層が有りながら側溝やバラス等の路面を全く認めることができなかつたことは、単に削平によって失われたと考えてよいであろうか。大路は低い位置を流れる河川を横切るのであるから、側溝を設けるよりもむしろ盛上を行つて高くし、その後盛土が流失したことによるものではないだろうか。

外郭線は、第88次調査で角材の上に1mの厚さの砂利層が堆積する事実と今年の第92次調査の結果から、9世紀末～10世紀前半には機能していなかつたと推定できる。その後の内郭南門から南へ延びる道路については、今回の調査の限りではその形骸を認めるることはできなかつた。次に大路の幅員を推定したい。橋脚の存在によって大路は二つの門を結んで直線的に造られていたと考えることができる。その場合、二つの門を結ぶ中軸線に対して東西対称にあると仮定する。また、内郭南門の南西にS B1048掘立柱建物跡があるが、この建物を大路が存続した期間中の造営と仮定すると、門を結ぶ中軸線から建物東側の柱まで約7.6mの距離がある。この建物の軒の出や側溝幅を考慮すると、大路の西側は中軸線の西側約6m以内に押さえられ、これを中軸線に対して対称に折り返し、大路の幅員は約12m以内と推定することができる。

註1 平川南「墨書き土器とその字形—古代村落における文字の実相—」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第35集 1991(平成3)年

註2 奈良国立文化財研究所編『平城京東堀川左京九条三坊の発掘調査』1983(昭和58)年

註3 秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1991 扉門柵跡—第88～91次調査概要』1992(平成4)年

第5章 自然科学的分析

平安時代の土地利用状況・古植生の解明を目的として、河川跡の堆積物の花粉分析を行った。また、外郭南門の柱のうち、これまで樹種不明とされていた3本の樹種鑑定と、外郭線角材の年輪年代測定を行った。花粉分析と樹種鑑定はパリノ・サ…ヴェイ株式会社に、年輪年代測定と樹種鑑定を奈良国立文化財研究所光谷拓実主任研究官に依頼した。

第1節 花粉分析および樹種鑑定

はじめに

払田柵跡は仙北郡仙北町・千畳町に所在する平安時代の城柵である。今回の発掘調査では、四箇所ある柵の出入り口の一つの外郭南門の門柱や、出土土器より平安時代とみられる河川跡が検出されている。今回の自然科学分析では、河川埋積物について花粉分析を行い平安時代頃の土地利用状況・古植生を推定し、同時に門柱のうち樹種が不明な柱の樹種同定を行う。このうち、花粉分析については河川埋積物が砂・砂礫で構成されていることから、秋田県教育庁払田柵跡調査事務所兜玉氏と協議のうえ花粉化石の含有状況を概査し、当時の古植生推定が可能な化石の保存状態かどうかを確認し、可能であれば環境解析を行うことにした。

1 平安時代の河川埋積物の花粉分析

(1) 試 料

試料は、平安時代の河川埋積物の3層準から採取された3点である(第64図)。河川埋積物の層序は、下位より砂礫、砂の順に堆積しており、その上位を暗灰黄色の火山灰が覆っている。この火山灰の給源については不明であるが、発掘調査時の所見によれば平安時代頃の火山灰と考えられている。

(2) 方 法

湿重30gの試料について、HF処理、重液分離(ZnBr₂ : 比重2.2)、KOH処理、アセトナリシス処理の順に物理・化学処理を施し、花粉・胞子化石を分離濃集する。得られた残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作しながら出現する種類(Taxa)の同定・計数を行う。結果は、同定結果の一覧表として示す。なお、複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

第3表 花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3
木本花粉				
マツ属	—	—	1	
スギ属	—	2	—	
ハンノキ属	—	2	3	
ブナ属	—	—	1	
コナラ属	—	5	2	
クリ属	—	1	1	
ニレ属一ケヤキ属	—	1	—	
トチノキ属	—	2	—	
草本花粉				
イネ科	—	3	3	
カヤツリグサ科	1	1	1	
アカザ科	1	1	1	
ヨモギ属	—	6	3	
不明花粉				
シダ類胞子	1	—	—	
合計				
木本花粉	0	13	8	
草本花粉	2	11	8	
不明花粉	1	0	0	
シダ類胞子	2	6	1	
総花粉・胞子数	5	30	17	

第64図 河川埋積物の模式柱状図および
花粉分析試料採取層準

(3) 結 果

花粉分析の結果を第3表に示す。花粉分析を行った全試料で花粉化石が少なかった。検出された種類は、木本花粉8種類、草本花粉4種類、シダ類胞子1種類であり、これらの化石の保存状態は良いものと悪いものとが混在していた。

このように今回の河川埋積物中の花粉化石数は極めて少なかったが、この原因としては河川埋積物の層相が砂・砾といった粗粒堆積物であり、花粉・胞子がシルト以下の粒子と半動を共にすることから、堆積時あるいは堆積後に流失した可能性がある。したがって、検出された種類は淘汰されて残った化石である可能性が強く、当時の植生について考察することは控える。なお、検出された種類は本遺跡のこれまでの花粉分析結果で検出されている種類でもあり、当時の植生を構成する要素であった可能性がある。

2 柱材の用材選択に関する検討

(1) 試 料

試料は、奈良時代の払山櫻跡外郭南門の12本ある門柱（1列4本で3列）のうち、北側の列で最も西寄りの柱（試料4）、中央の列で最も西寄りの柱（試料8）、南側の列で東から2番目の柱（試料10）の3点である。

(2) 方 法

剥刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・杢目（放射断面）・（接線断面）の3断面の徒手切片を作製、ガム・クロラール（抱水クロラール50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlを混合液）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

(3) 結 果

3点の試料は、試料4がクリ、試料8がトネリコ属の一種、試料10がハリギリに同定された。同定根拠とした主な解剖学的特徴や一般的な性質を以下に記す。なお、一般的な性質については『木の事典 第1、3、4巻』（平井、1979-1980）を参考にした。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で孔縁部は1～4列、孔縁外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、樹木や海苔粗朶などの用途が知られている。樹皮からはタシニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

・ハリギリ (*kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai) ウコギ科

環孔材で孔縁部は1～3列、孔縁外で急激に管径を減じのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は管壁厚は中庸、横断面では円形～楕円形、単独、小道管は管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状または対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。柔組織はターミナル状および周囲状。年輪界は明瞭。ニレ属とよく似た材組織を持つが、ハリギリの小道管にはらせん肥厚がないことで分けられる。

ハリギリは、北海道から九州の肥沃な適潤地に生育する落葉高木で、大きいものは高さ25m、直径1m程になる。材の硬さは中程度で、加工は容易であるが耐朽性は高くない。比較的の欠点

の少ない材で、木理が鮮明であるため家具材として古くから利用されてきた。また、材が白色に近く、板目面で年輪が明瞭な模様になって現れるため、装飾材として用いられる。その他にも器具材・下駄材・彫刻材等幅広い用途に用いられる。

・トネリコ属の一種 (*Fraxinus* sp) モクセイ科

環孔材で孔團部は2~3列、孔團外で急激に管径を減じる。道管壁は厚く、横断面では円形~橢円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は单穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状~篩状となる。放射組織は同性(~異性Ⅲ型)、1~3(5)細胞幅、1~40細胞高であるが、時に20細胞高前後のものが多い。柔組織は周囲状およびターミナル状、時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ (*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.)、トネリコ (*F. japonica* Blume)、アオダモ (*F. serrata* (Nakai) Murata)など8種が自生する。このうちヤマトアオダモ (*F. longicuspis* Sieb. et Zucc.)・マルバアオダモ (*F. sieboldiana* Blume)・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ (*F. mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.)は北海道・本州(中部地方以北)に、トネリコは本州(中部地方以北)に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸~やや重硬で、韌性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

(4) 考 察

門柱の樹種は3点とも異なり、クリ、ハリギリ、トネリコ属が各1点であった。今回同定を行わなかった9点(試料1~3, 5~7, 9, 11, 12)については、奈良國立文化財研究所によつて全点クリに同定されている。これらの結果を合わせると、12本の柱の内10本にクリが使用されていたことになる。クリは木材の中でも特に強度が高い樹種の一つで、縄文時代以降日本各地の遺跡で住居の柱材等強度を必要とする部材として検出されている。また、北陸を中心にしてしばしば発見される巨大木柱にもクリが多く(例えば、古池, 1986; 能登町教育委員会, 1984等)、今回のような大型建築物の柱としては適した材といえる。ハリギリとトネリコ属については、住居の柱材として出土している例はあるが、今回のような大型建築物の柱として適した木材かは疑問も残る。

ハリギリとトネリコ属の出土位置をみると、ハリギリは中央の列の最も西寄りでトネリコ属は南側の列の東から2番目である。これらが門の中でどのような位置を占めるのか充分には理解できないが、いずれにしても上屋の荷重がかかった場所であろう。今後建築史的な研究成果を含めて検討を行う必要があろうし、類例にこのような用材がみとめられるのかどうか検索する必要があろう。

文献

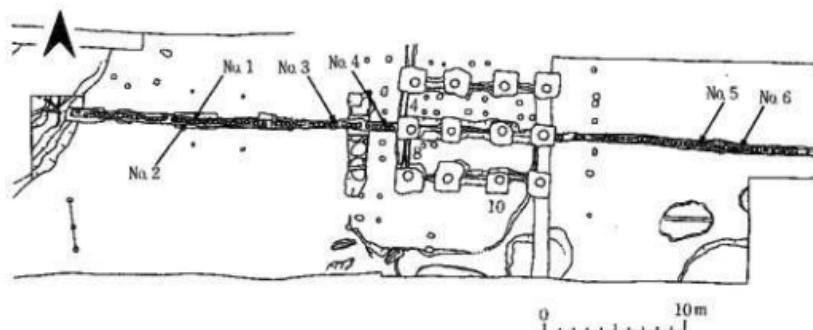
平井信二『木の事典』第1, 3, 4卷. かなえ書房. 1979 (昭和54) - 1980 (昭和55) 年.

古池 博「木柱根その他木材ならびに大型堅果類の植物学的検討」『金沢市新保町チカモリ遺跡-第一次発掘調査兼土器編-』p. 203-226. 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会・金沢市新保町第一七地区画整理組合. 1986 (昭和61) 年.

能登町教育委員会「巨大木柱」『真脇遺跡 発掘調査概報』p. 28-30. 1984 (昭和59) 年.

第2節 年輪年代測定と樹種鑑定

7月30日、光谷拓実氏より、角材列の中から適切な材を選んでいただき、試料採取を行った。同時に門柱3本の試料採取も行った。試料4は角材の木口面に虫食いによる孔があいており、既に成長が停止していたものを伐採、使用したと判断されるので、試料4の示す最外年輪年代は伐採年代ではない。



第65図 年輪年代測定試料採取位置

第4表 外郭縁角材年代測定結果

試料	形 状 タ イ プ	計 測 年輪数	最外年輪 形 成 年
1	A	109	800
2	A	104	801
3	A	41	801
4	A	293	788
5	A	184	801
6	A	224	801

第5表 門柱樹種鑑定結果

試 料	樹 種
4	ク リ
8	トネリコ属
10	ケ ャ キ

第6章 調査成果の普及と関連活動

1 現地説明会の開催

平成4年8月22日

第92次調査について

2 諸団体主催行事への協力活動

政府跡や発掘調査現場において、西仙北町立上川小学校、大曲生活改善実行グループ、雄物川町役場の方々や、各種団体主催の郷土学習会、見学会などに対し、払田柵跡の概要説明を行った。

3 扉田柵跡環境整備審議会への出席

第1回 平成4年7月23・24日

第2回 平成5年3月9・10日

4 顧問会議の開催

第35回 平成4年8月18日

第36回 平成5年2月26日

5 報 告

児玉 準「払田柵跡—第92・93次調査の概要—」

『第19回古代城柵官衙遺跡検討会資料』平成5年3月20・21日

児玉 準「払田柵跡第92・93次調査の概要」秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料

平成5年3月13・14日

図版1 第92・93次調査



1 調査前の状況（北から）



2 同 上（東から）

図版2 第92次調査



外郭南門と角材列（西から）

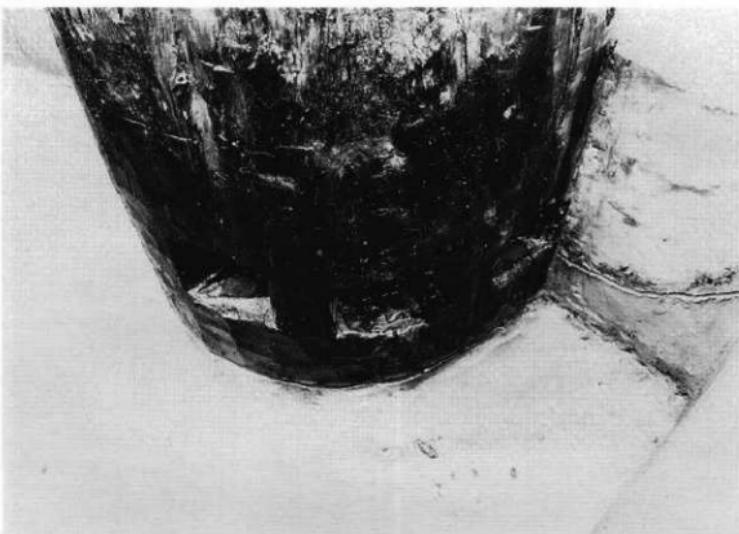


1 外郭南門（北から）

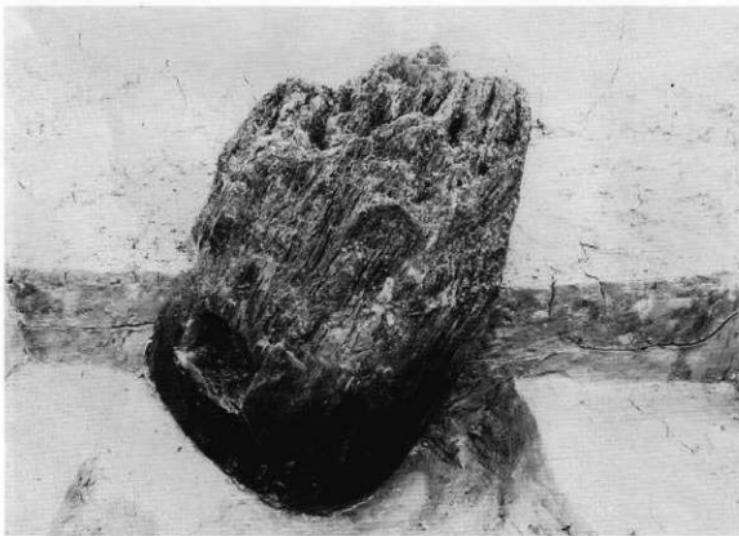


2 外郭南門発掘作業（西から）

図版4 第92次調査



1 外郭南門北側東2柱

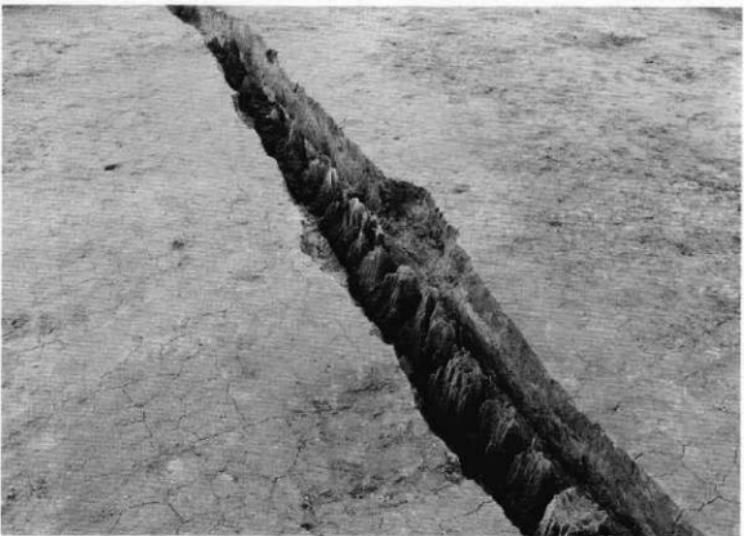


2 外郭南門棟通り東2柱

図版5 第92次調査

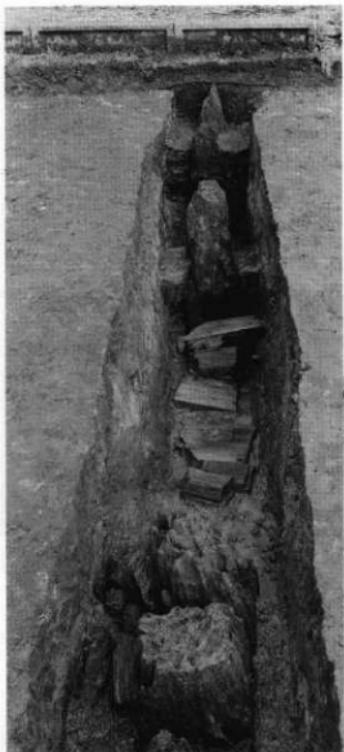


1 SA 1027角材列（南西から）



2 同 上（南東から）

図版 6 第92次調査

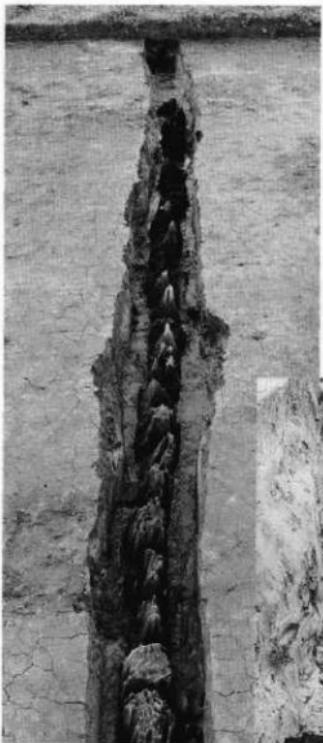


1 (西から)

SA 1027角材列における角材と、
その下の檻板



2 (東から)



1 SA 1027角材例（西から）



2 布張り内の角材（西から）

図版 8 第92次調査



1 SA 1027角材列
角材の下の礎板



2 SA 1028角材列（西から）

圖版9 第92次調查



1 S A 1032角材列



2 S A 1032角材列（裏から）

図版10 第92次調査

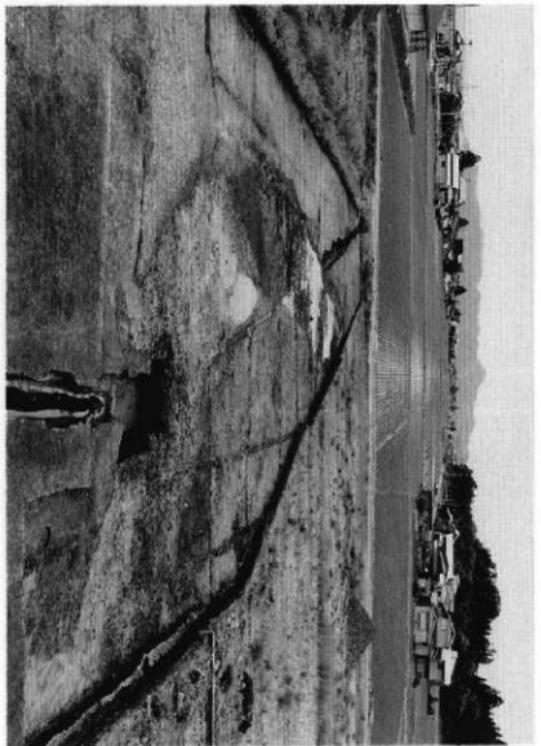


1 SA 1028角材列西端部と河川跡（東から）

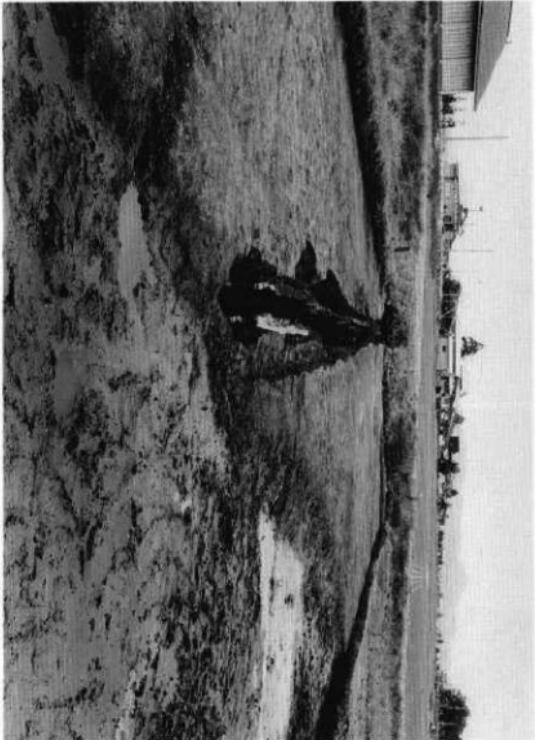


2 SA 1032角材列東端部（南から）

図版II 第92水調査



1 角村列開口部（東から）



2 SA1032角材列と河川跡（東から）

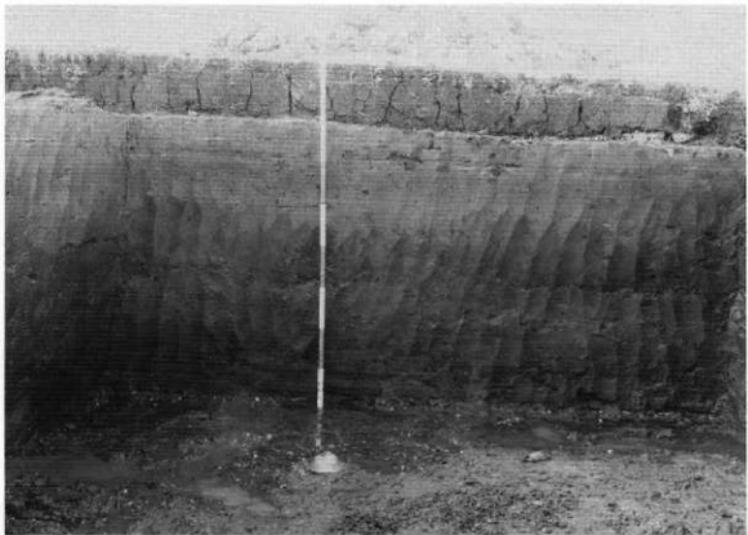
図版12 第92次調査



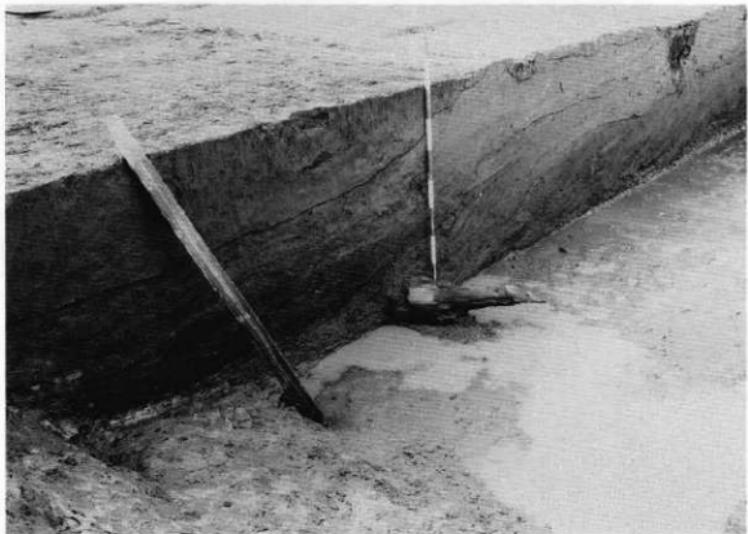
1 S L1035河川跡の土層



2 S L1035D トレンチの最終段階河川跡（東から）



1 S L1035D トレンチの遺物出土状態



2 S L1035D トレンチの角材と杭検出状況

図版14 第92次調査



1 年輪年代測定試料の採取を行う光谷氏



2 西暦788年の角材木口面



1 S L1035河川跡の調査



2 同 上

図版16 第93次調査



1 S B 1048掘立柱建物跡（東から）



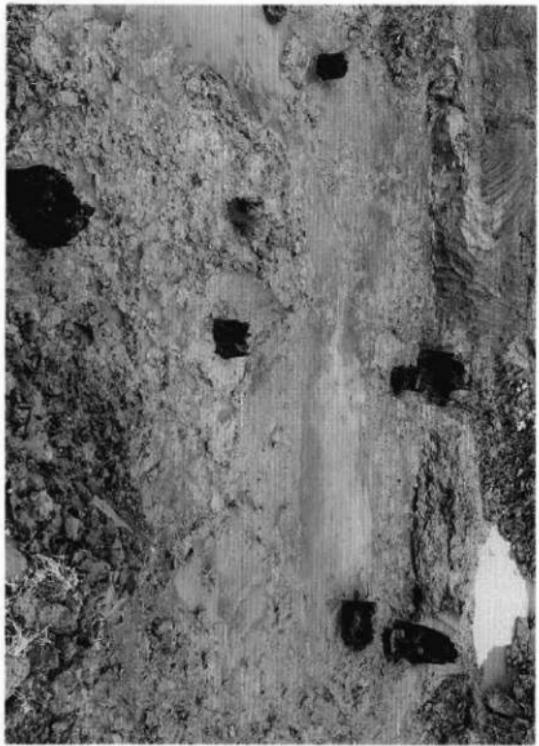
2 同 上トレンチ壁面の柱



1 S B 1048掘立柱建物跡の柱



2 同 上



1 植物検出状況（南から）



2 同 上（西から）

図版19 第93次調査



橋脚（北から）

図版20 第93次調査

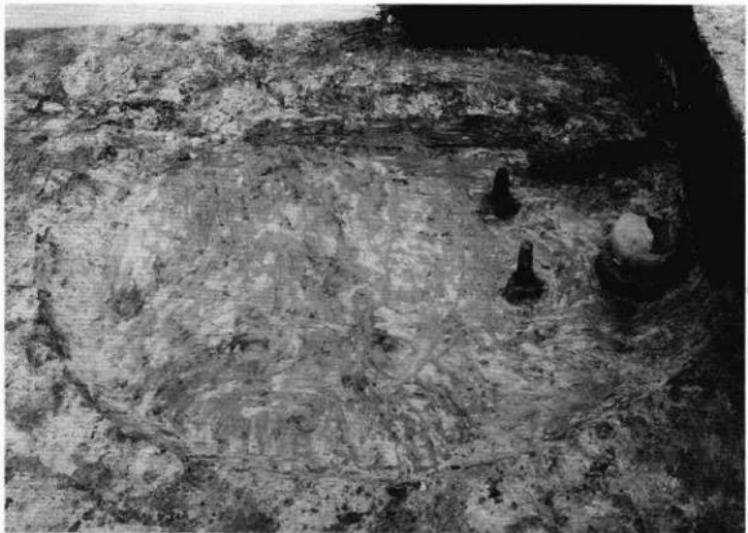


1 抜き上げた橋脚

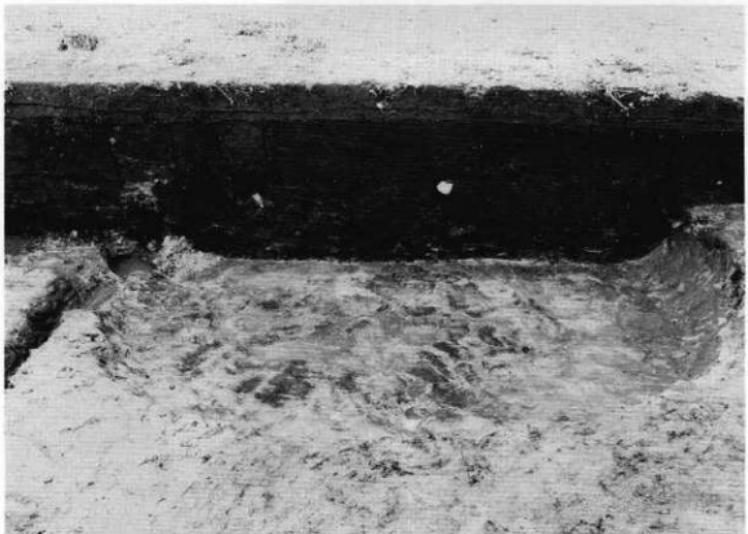


2 同 上

図版21 第93次調査



1 SK 1033土坑（南から）

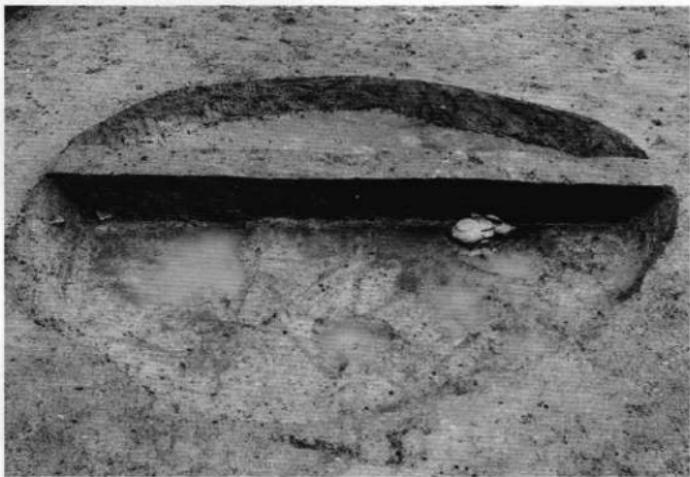


2 SK 1034土坑（南から）

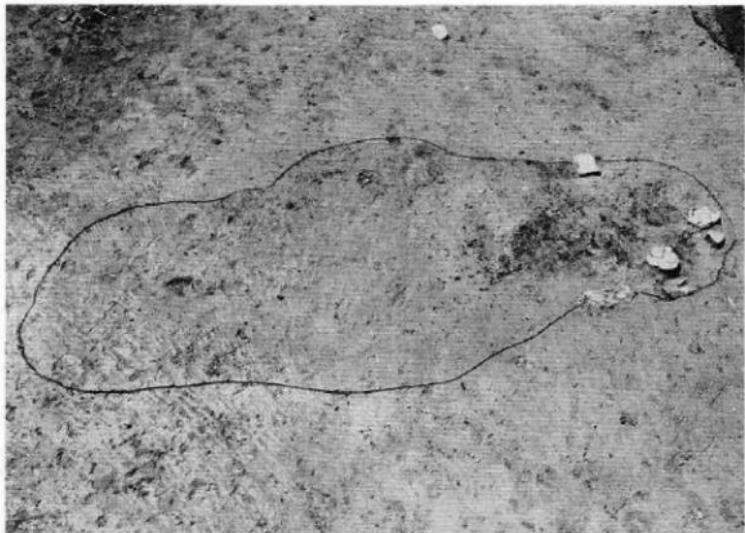
図版22 第93次調査



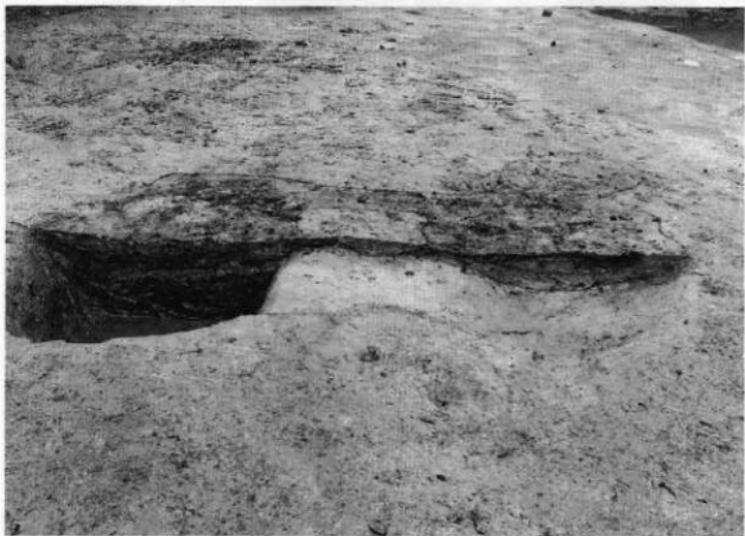
1 FNライントレンチの土坑・
その他の遺構（西から）



2 SK1042土坑（西から）

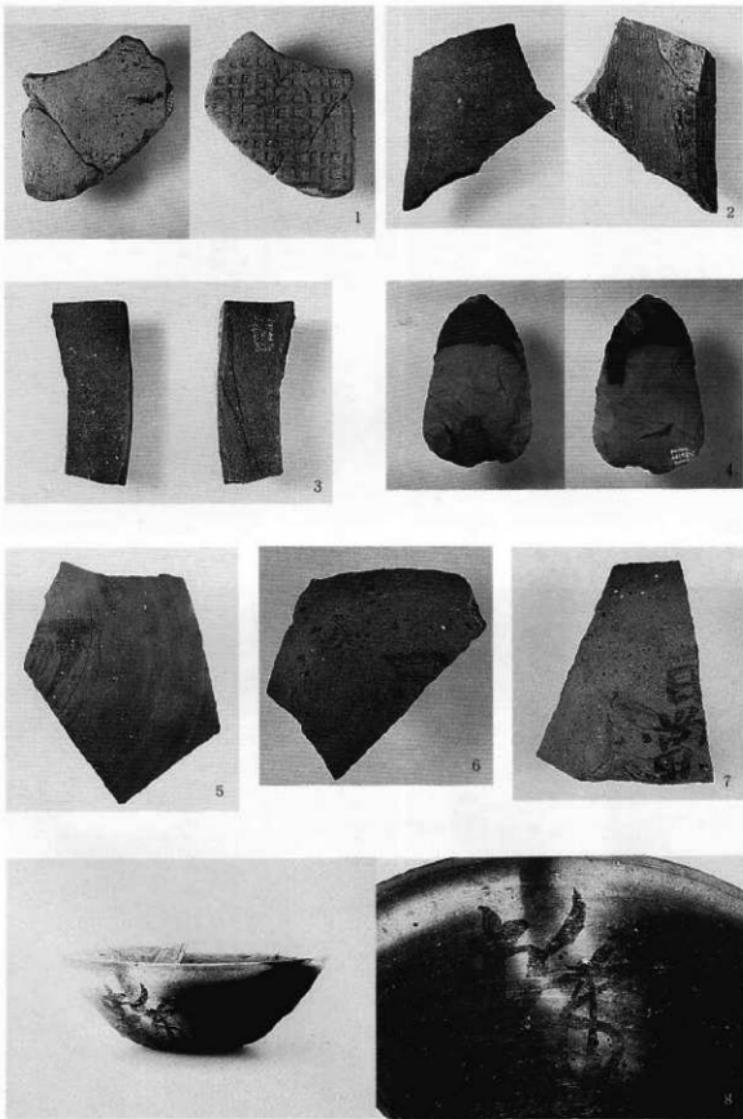


1 S X1040 その他の遺構（東から）



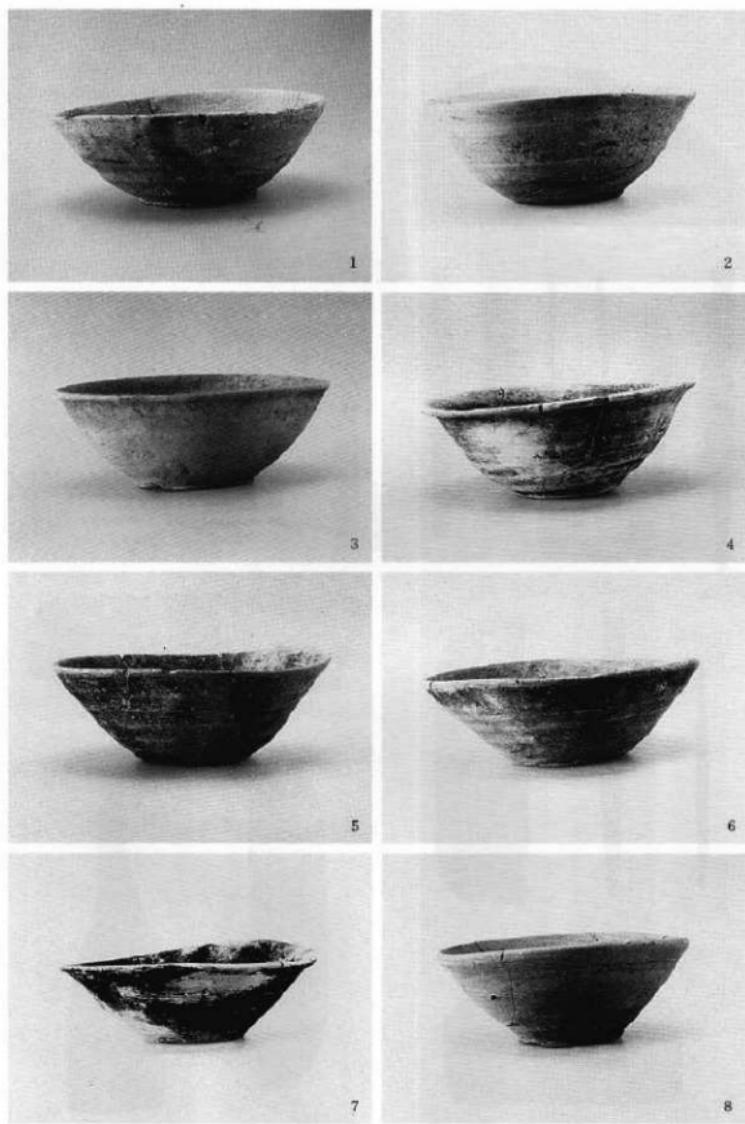
2 S X1045 その他の遺構（東から）

図版24 第92次調査 遺物(1)



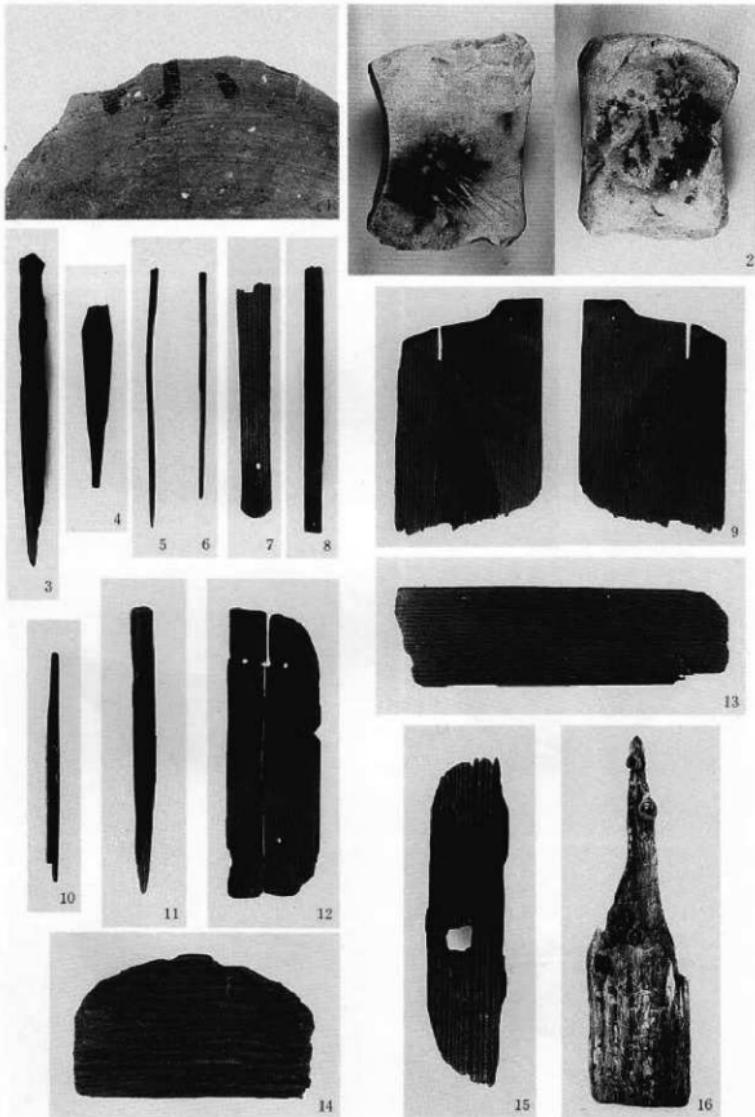
1~4 S A1027 5~8 S L1035砂礫層

図版25 第92次調査 遺物(2)



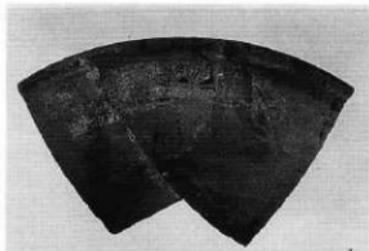
1 ~ 8 S L1035 砂礫層

図版26 第92次調査 遺物(3)

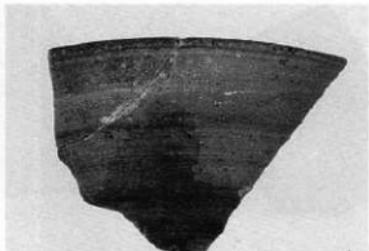


1 ~ 9 + 16 S L1035砂砾層 10~15 S L1035最終段階河川跡

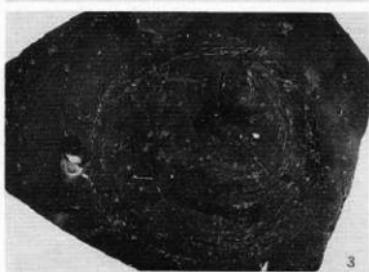
図版27 第92次調査 通物(4)



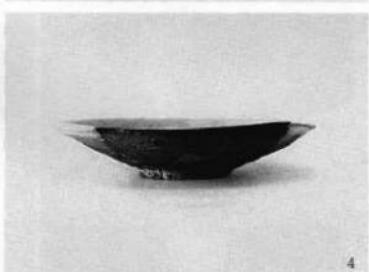
1



2



3



4



5



6



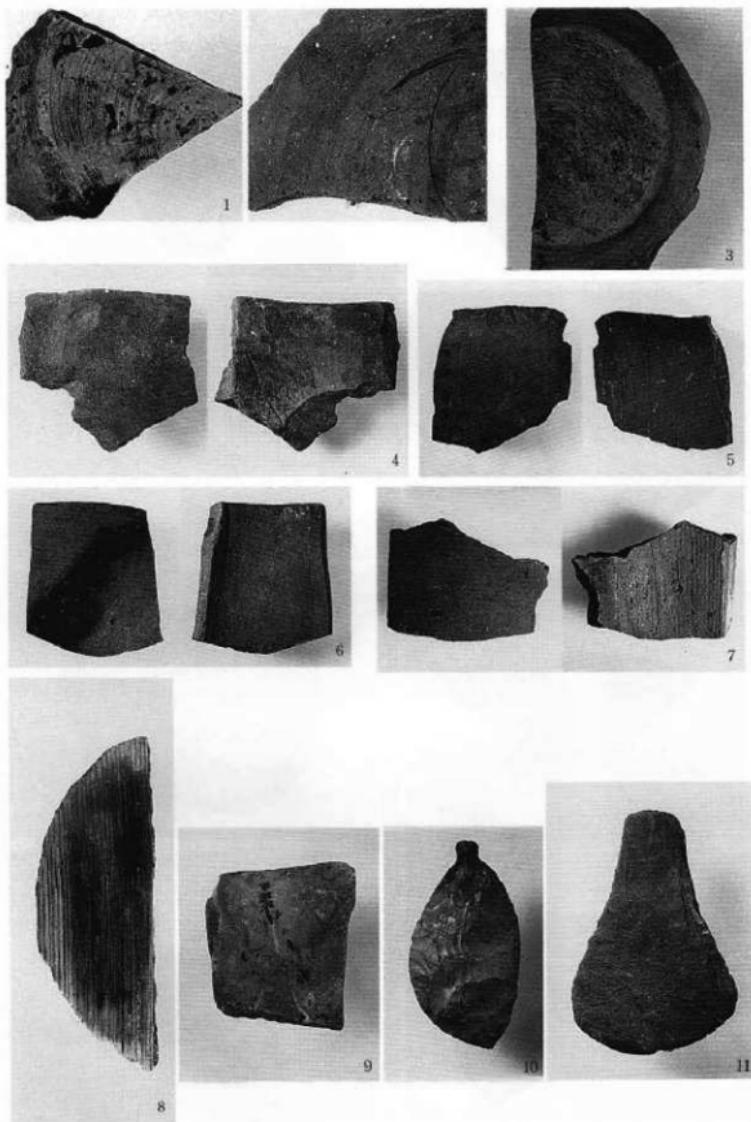
7



8

1 ~ 8 SK1029

図版28 第92次調査 遺物(5)



1~11 遺構外

圖版29 第93大調查 遺物(6)



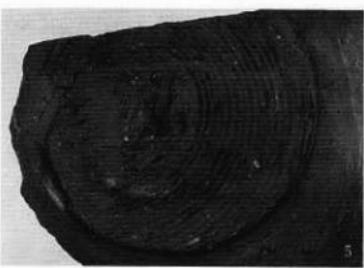
1



3



4



5



6



7



8

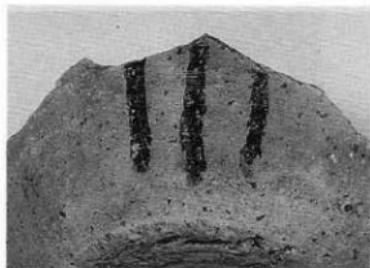
1 ~ 8 S L1035砂砾層

図版30 第93次調査 造 物(7)

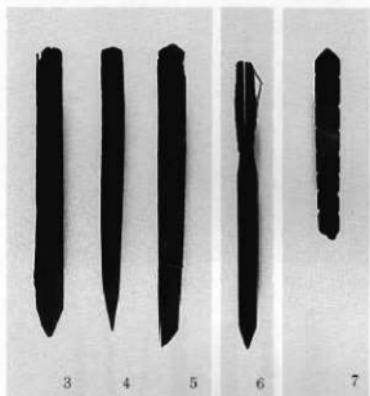


1 ~ 8 S L1035砂礫層

図版31 第93次調査 遺物(8)



2



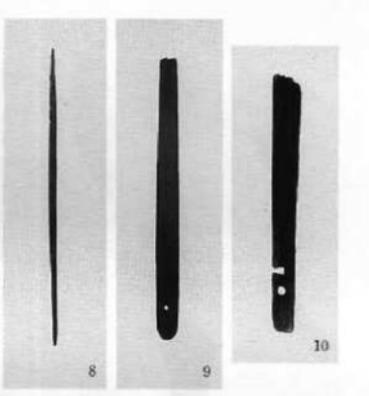
3

4

5

6

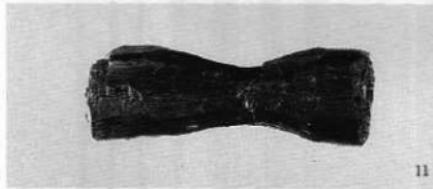
7



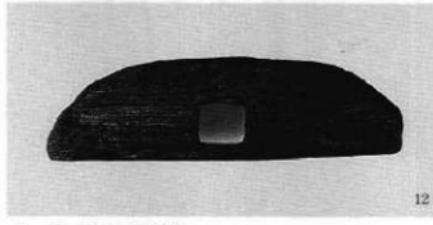
8

9

10



11



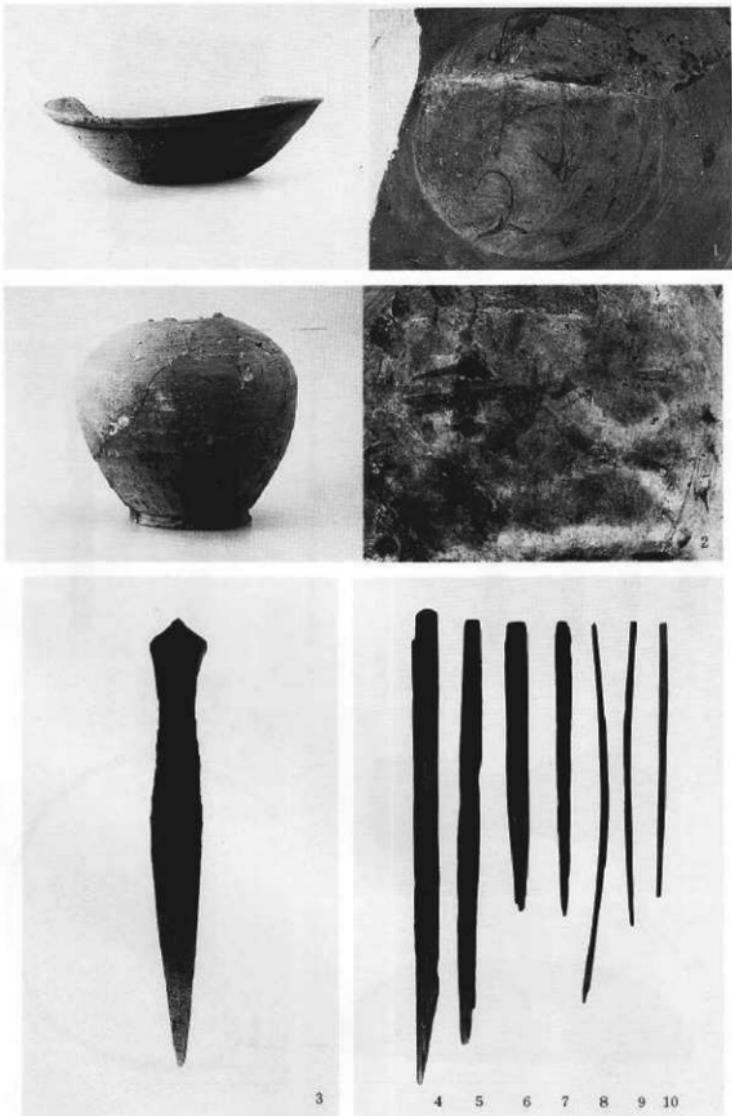
12



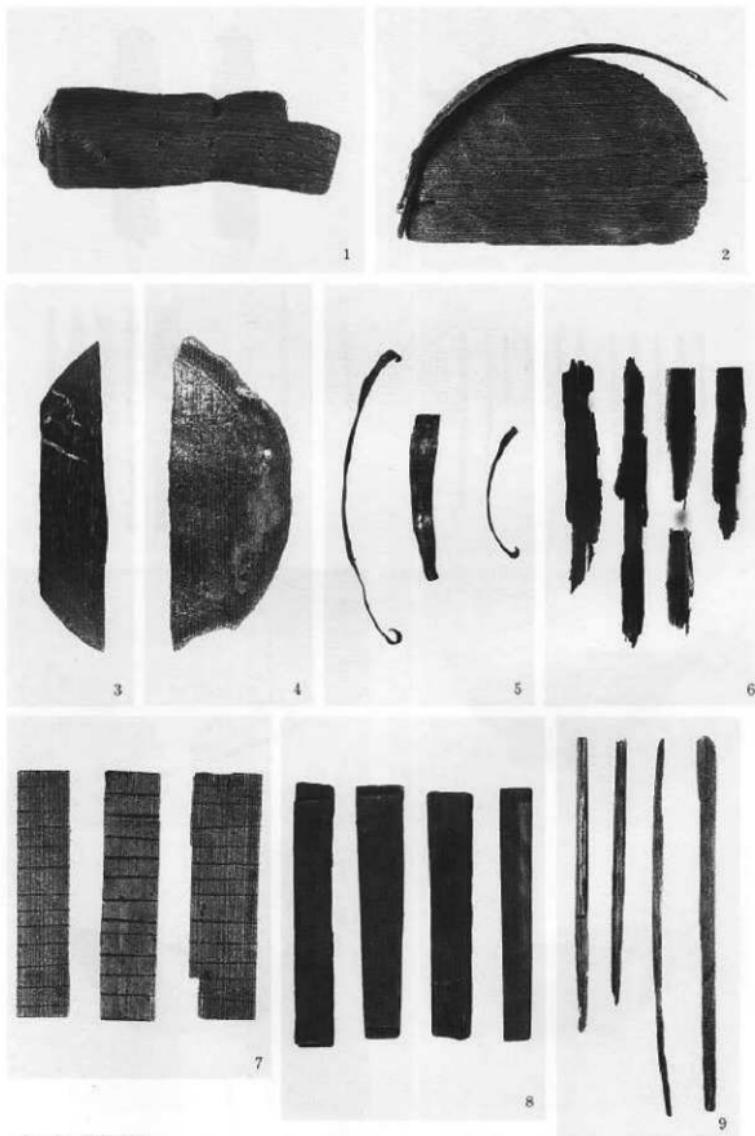
13

1-13 S L1035砂砾層

図版32 第93大調査 遺 物(9)

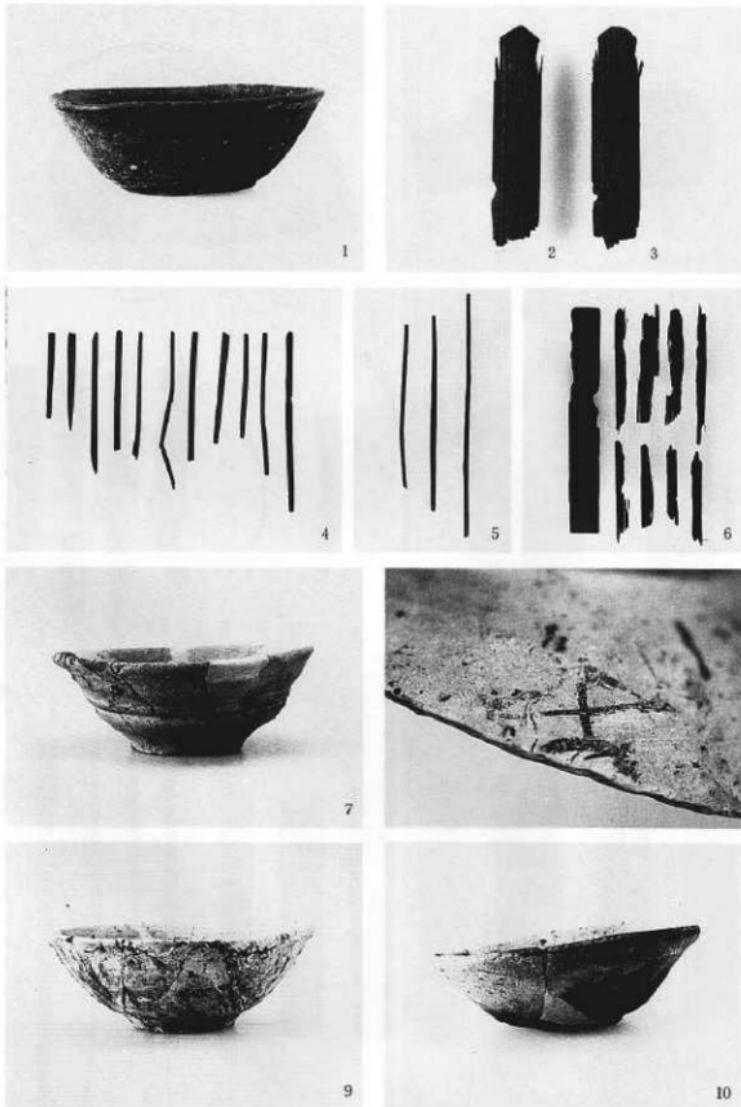


1~10 SK1033



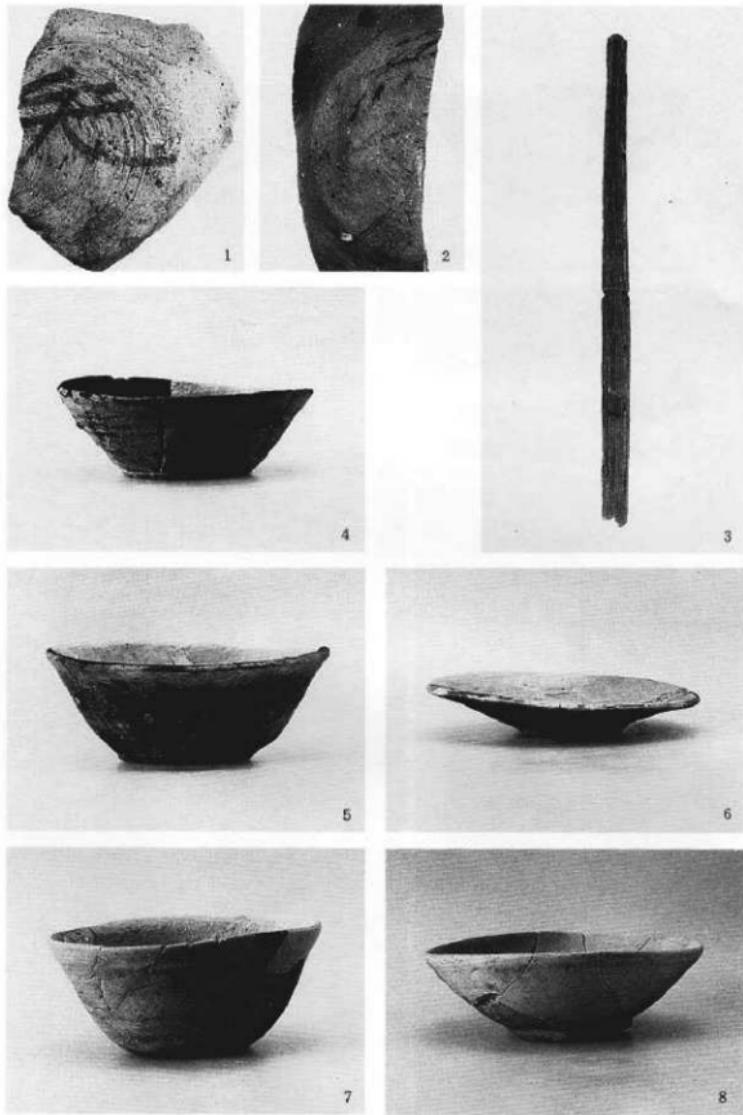
1-9 SK1033

圖版34 第93大調查 遺物1)



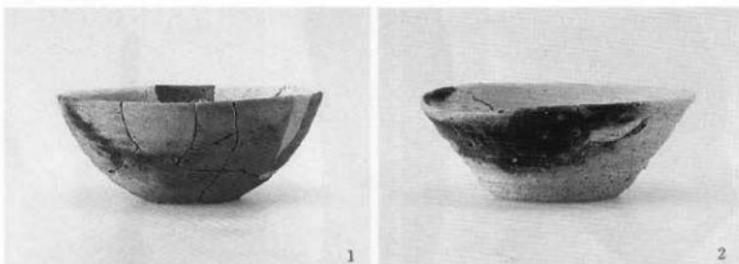
1 ~ 6 SK1034 7 ~ 8 SK1042 9 SK1043 10 SX1046

図版35 第93次調査 遺物12



1~4 EHライントレンチ 5・6 ENライントレンチ 7・8 HCライントレンチ

図版36 第93次調査 遺物13

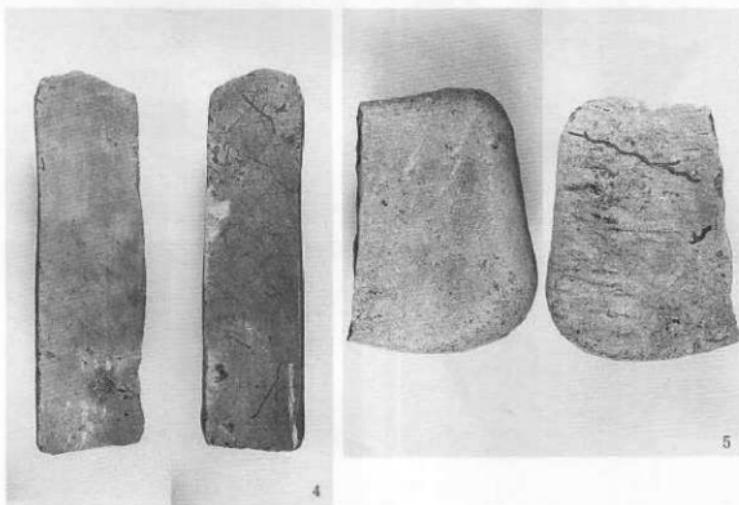


1

2



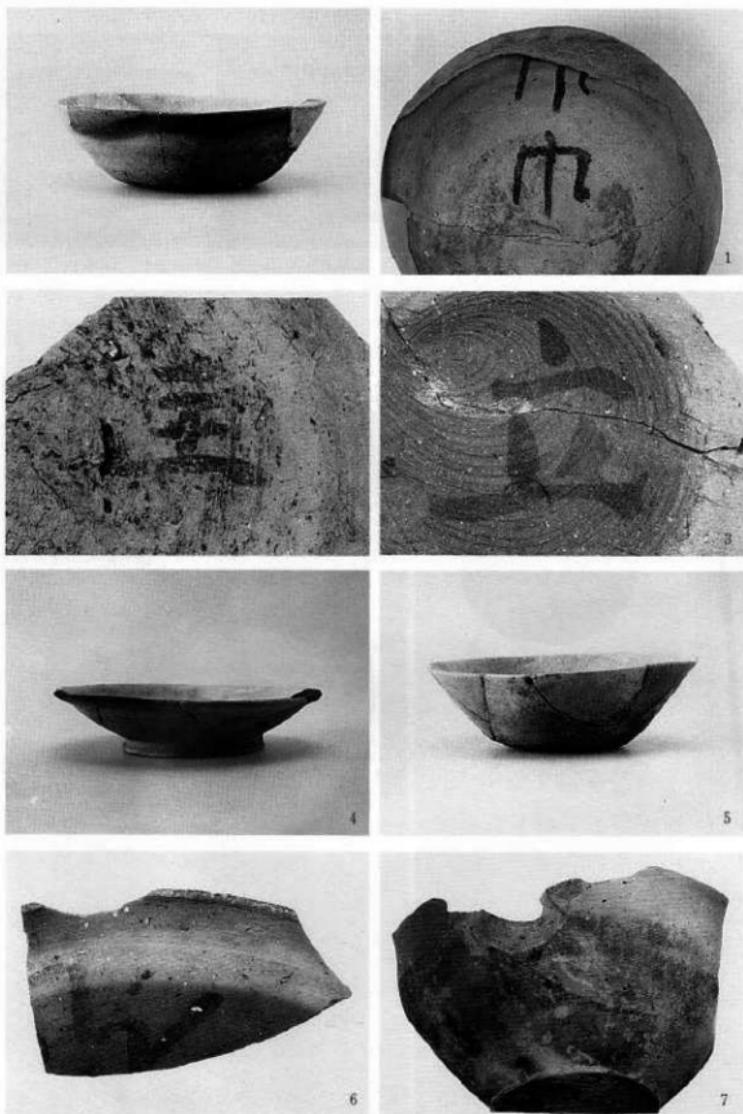
3



4

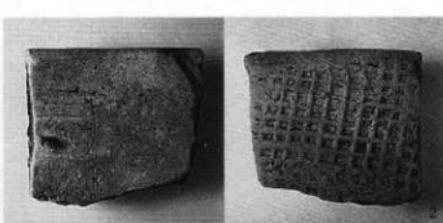
5

1~5 HC ライントレンチ

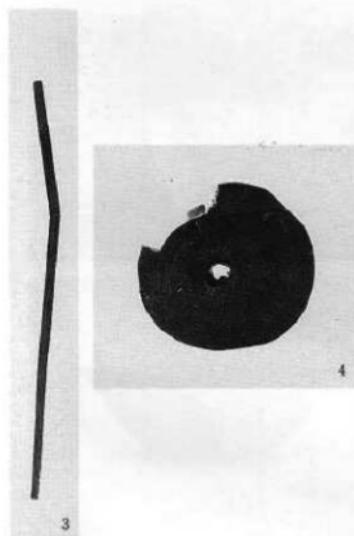


1-7 HC ライントレンチ

図版38 第93次調査 遺物19



1

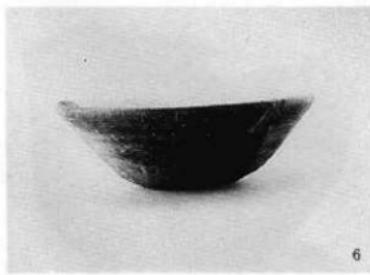


3

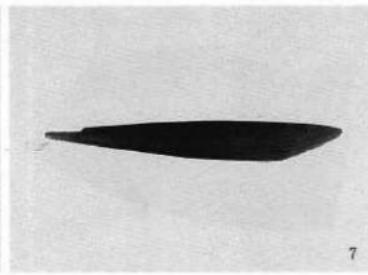


4

5



6



7

1-5 HCライントレンチ 6・7 HKライントレンチ



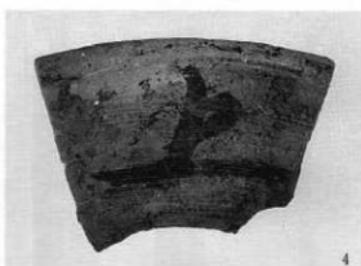
1



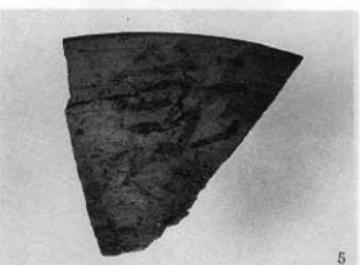
2



3



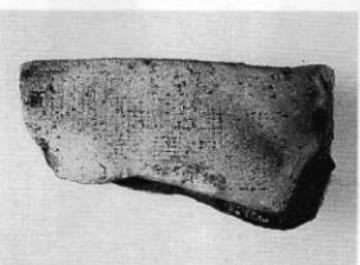
4



5



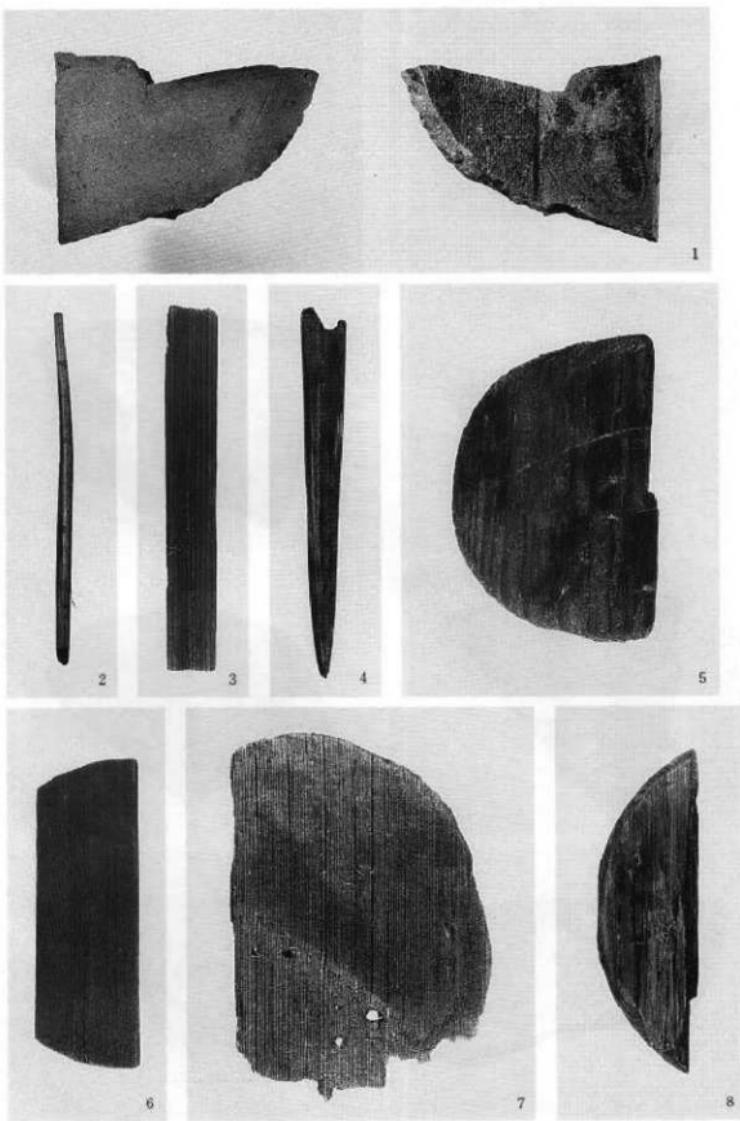
6



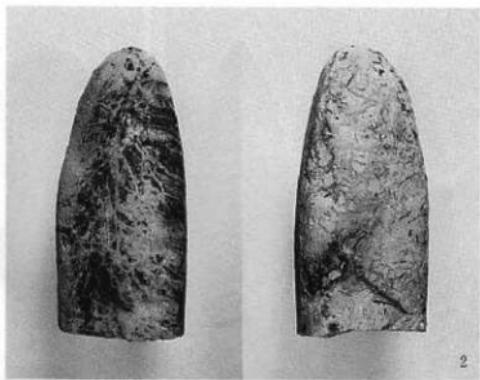
7

1～7 遺構外

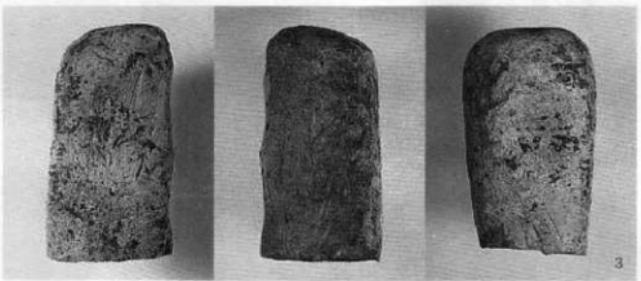
図版40 第93次調査 遺物(7)



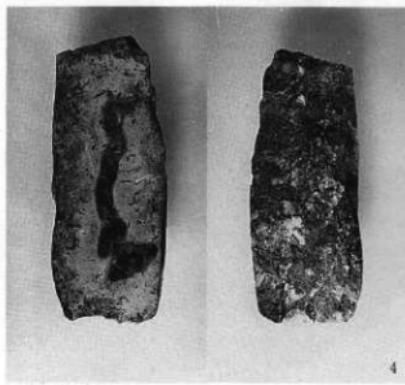
1~8 遺構外



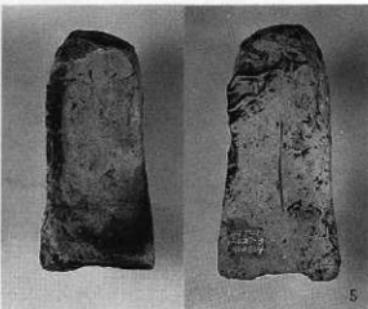
2



3



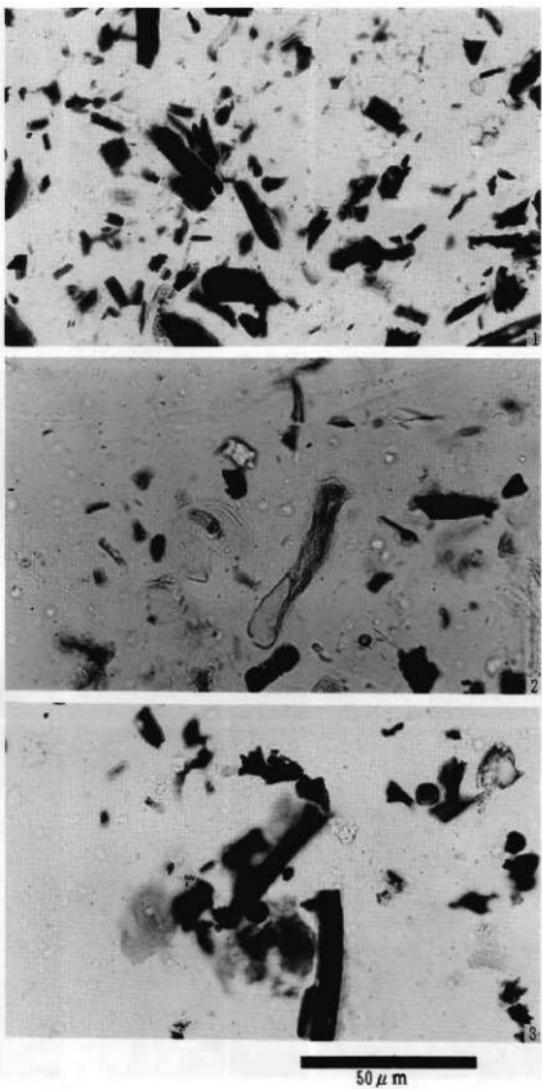
4



5

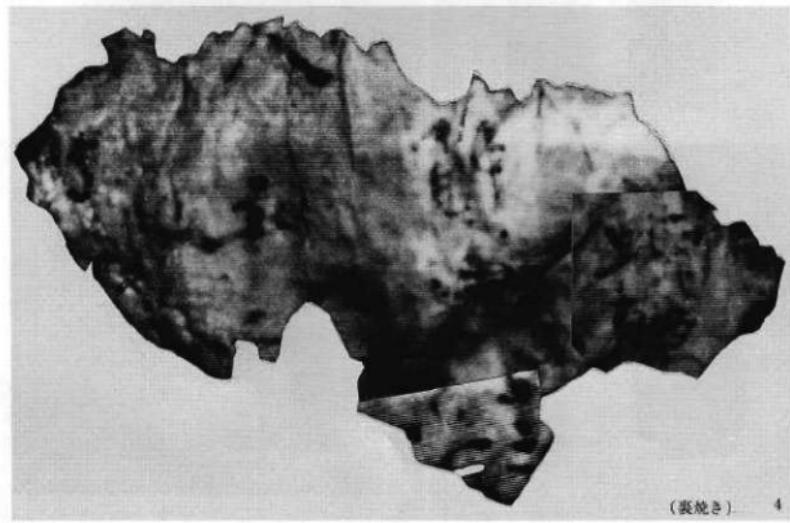
1～5 遺様外

図版43 花粉分析プレパラートの状況写真



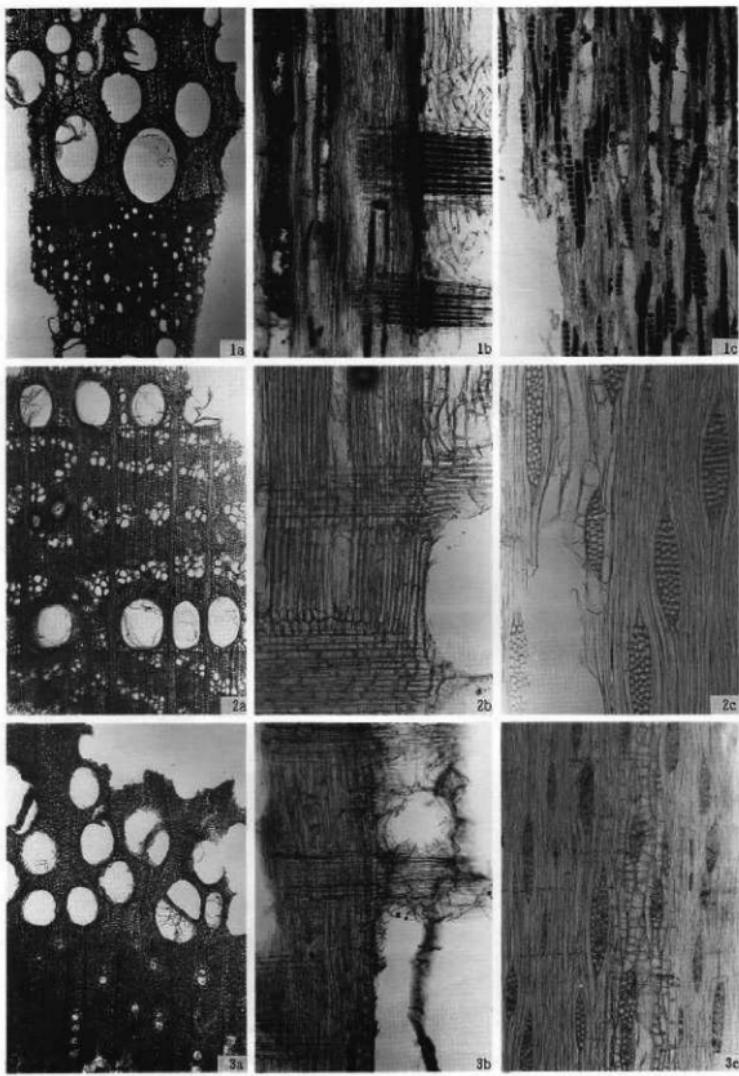
1.試料番号 1 2.試料番号 2 3.試料番号 3

図版42 第93次調査 遺物⑯



1 ~ 4 遺構外

図版44 材の顕微鏡写真



1. クリ (試料4)
2. ハリギリ (試料10)
3. トネリコ属の一種 (試料8)
a : 木口, b : 極目, c : 板目

200μm : a
200μm : b, c